恋して、恋して

花びらがまだ残る桜の木を見ながら、僕は「春が終わるのか……」と感慨に浸っていた。

僕は、自分の何かを変えたくて、ひとり、旅に出ようとしていた。

まず僕は、新しくバッグを買った。

登山にでも使うようなヘッドバッグの付いた本格的なバックパックだった。容量はたっぷりと４０Ｌで、真ん中にTHE NORTH FACEと書かれていた。だが、その意味はさっぱりわからなかった。

生地はとてもしっかりしていて、あちこちに沢山のプラスチックのバックルが付いていた。そのバックル達は、つけても外しても小気味良い音がして、僕のやる気を胸の奥から刺激した。そのバッグを背負って鏡の前に立つと、ニヤニヤとしただらしない顔が映っていた。

このバッグパックを買う為に、僕は初めて本格的なアウトドアショップに行った。店の中をウロウロしていると、若い店員さんが「何かお探しっすか？」と馴れ馴れしく尋ねてきた。僕は「来たな」と言って目を輝かせる。舐められたら終わりだ。と「わたくし、経験豊富な旅人なんですけど、何か？」を身に纏うため、気持ちのペダルを踏み込んだ。眼光は鋭く精悍にセットし、ありったけの用語を並べ立てた。このためにヒゲだって生やしてきた。しかしその店員さんは、なぜか所々笑いを堪えている。「なぜ笑う……？」と猛烈な焦りと不快感が僕を襲う。しかし不安を払拭するかのように、さらにペダルを踏み込んだ。

「パクパックってさあ、旅先で盗難に遭いやすいじゃないですかあ。僕なんかもう、ずっーとパクパックで旅に出てますから～」と語尾をいやらしく伸ばした。「パクパック」と言えば言うほど、店員さんの露骨に笑いを堪える。僕の眉間にしわが走ると、ついに店員さんが口を割った。

「あの、さっきからー、パクパック、パクパックって、言ってますけど。それもしかして、バックパックの間違いじゃないですか？」

店員さんは、笑いを堪えきれないような奇妙な引き笑いとともに、本格的なバックパック

を手に取って僕に見せつけた。
「へ？　間違いっ？」
顔面の毛細血管が暴力的に躍動し始めると、みるみると鮮烈な朱色に変わっていった。
「ぽ、ぽく、ぱくぱっくなんて言いまし、た？　おっかしいなあ、ははは」と言うと顔面から、バルタン星人でも倒せそうなほどの炎が噴きだされた。
「ぎゃははは」
その炎によって、バルタン星人（店員）はあっさりと焼き（笑い）倒された。僕は顔を押さえ「ぎゃあああ」と叫びながら走り出すと、店内は「ぎゃははは」という笑い声で溢れかえった。転がるように店を出て、慌てて曲がり角を探すと、恥ずかしさに身を震わせ。
「まったく、なんだよあいつ、嘘教えやがったな……、はあはあ」
肩で息をしながら、パクパックと嘘を教えた姪っ子に恨みの拳を握った。高校に入学し、アウトドアクラブに入ったという姪っ子に、用具のあれやこれやを教わっていた。
「あいつおれが素人と思ってからかったな。くそ、仕返しにお年玉減額だ」と僕は自分の器を果てしなく小さくすると、「ぷんぷん」と言いながら他のバルタン星人を当たった。

生まれて初めての海外旅行。一大決心で計画したのは、心配性の僕からは想像もつかない「悠久の国インド」への旅だった。しかも一ヶ月間行きたい所に自由に行く、バックパッカーとしての「一人旅」だった。
行く先々でガイドさんを雇うことにはなるが、飛行機すら乗ったことのない僕にとっては、広大な大風呂敷だった。しかし、きっと何かある。きっと何かが起こるはずだ。その思いが、僕の胸に熱い想いをこみ上げさせた。
「なめんなよっ」と誰にも言ったことのないような一言を、窓の外で目が合った猫に向かい、興奮気味に叫んだ。猫は面倒くさそうに「にゃぁ」と小さく鳴くと、しっぽを立てながらどこかへ行った。
並べた荷物を順番に、丁寧にバッグに詰め込んでいく。最後に無理して買った、新品のデジタルカメラを手に取った。このカメラを買う為に、僕はこつこつと貯めた豚の貯金箱を壊した。
貯金と言えば小さい頃から豚だった。流れ出る小銭の中からお札は財布に詰め、使えそうな硬貨は銀行でお札に変えた。その足で僕は、有楽町にあるサンドバシカメラのカメラ

コーナの前に向かった。
以前サンドバシカメラでＤＶＤプレイヤーを買おうと思い、何も考えずに声をかけたら横柄な店員に当たり、無知をからかわれたことがあった。あんな不愉快な思いは二度とごめんだ。カスタマースペックの高そうな店員を探した。
「いた。いたぞ」と僕は標的を見つけた。おそらく年収は２８０万円、自尊心は低め。目の奥は鎮火中。カメラの知識は豊富だが、媚びそうなその顔。
「あれだ、あの人なら懇切丁寧に案内してくれるぞ、俺がイニシアチブを握ってやる」そう確信し、声をかけた。
「あの……、デジタルカメラがほしいんですけど」
「ディジタル、キャメーラ？」
店員は流暢にそう答えると、眼鏡の角度をゆっくりと直した。嫌な予感がする。その店員のメガネの奥の眼差しは、熱い炎を揺らいでいた。どうやらやる気に火を付けてしまったようだ。またか、またなのか……。しかしもう遅く、店員は猛烈な勢いで専門用語をまくしたてながら、僕ににじり寄ってきた。しかし一体この人が何を言っているのか僕には全く分からなかった。
しかしとにかくニコンだと咆えている。キャノンではなく。「カメラはニコンだ！　ニコンのオートフォーカスは恐るべきスピードで対象物を捉え、ニコンのレンズは阿鼻叫喚の表情までも撮り逃さない！」云々と荒々しく説明した。興奮しながら話す店員さんの鼻息は、見る見るうちに荒くなり、激しく吹き荒びながら僕の顔面ににじり寄った。イラっとした。それでも僕は聞き逃さないように、必死に凝視する。「ニコンニコン」と連発してくる店員さんの言葉は、次第にゲシュタルトに崩壊していき、頭の中でぐつぐつと煮込まれるモツの「煮込み」に変わった。
「うまそうだ」
僕は目的を忘れかけた。隙を見せてしまった僕は、気がつくととても買うつもりも無いような金額のカメラを買っていた。支払を終えると「やっちゃったか……」と頭を抱えた。しかしエスカレーターで降りて行くうちに、次第にそれは嬉しさと不安が入り交じる複雑な気持ちになっていった。それからしばらくの間、頭の中では煮込みがぐつぐつと踊っていた。

＊

中学生の頃僕は、孤独な読書の日々に明け暮れていた。その頃生意気にも、生きてる作家の本なんておかしくて読めないぜ。死んだ者が残した言葉こそが文学だ。などと鼻息を荒く吹き鳴らし、太宰だとか、三島だとか、芥川龍之介なんかを読み漁っていた。しかしなぜか、僕の本棚には1人だけ現存作家の本があった。

大型古本屋にでも行けば、１００円の値札が付いた名作がいくらでも手に入った。それをあるとき、まとめて１０冊ほど買ったことがあった。家に持ち帰るとその中に、買った覚えのない村上春樹という作家の小説が紛れていた。「あれ、この人まだ生きてるじゃん」と言って、その本は棚の隅で長い時間佇むことになった。ある時読むものもなくなり、しかたなく手にとってみると、その世界観はとても興味深く、一気に僕の心を引き込んだ。読むほどにその世界を近くに感じ、いつしか親しげに「ハルキ」と呼んでいた。

ハルキの小説に出てくる青年もたいていは孤独だった。相部屋の同居人を煙たがったり、離れで一人世間を避けるように暮らしていた。そして「やれやれ」と言っては、バーでプール一杯分のビールを飲んだ。そして体だけの関係のガールフレンドと、クーラーの効かない港の海が見える部屋で汗まみれに交わった。中学生の僕には、酒だとか交わるだとかまるで意味が分からなかったが、その世界の中にいる自分を想像すると、不思議と光や温度までもが感じとれた。

僕は大人になってからも、ことある毎に誰かの決め付けや否定に傷付き、しくしくと落ち込んではハルキのページを開いた。ある時は、その小説の世界のように唯一のガールフレンド……、いや僕の世界では、過去に一度電話番号を交わした程度の女性に、思い切って電話をかけてみたが「なに？」と冷たく煙たがられた。焦った僕は、「あ、やかんが沸いて吹き出しちゃった」と、破いて捨てたくなるような嘘を言って電話を切った。せめてパスタが伸びちゃうから、くらい言えなかったものなのだろうか。

「うまくいかないものさ」と、あぐらをかいて俯きかげんにそう言うと、またハルキを開いた。

僕の心はナルトのように渦巻いていた。２０歳も過ぎたというのに、約束をするような

友人もいない僕は、会社では浮き、人が集まれば浮き、どんな時も立派に浮かび上がった。

つまり僕は「変わり者」のようだった。家の中を見渡しても、家族はいつもバラバラで、友人も数える必要がないくらい少なかった。大人になればなるほど人とうまく関われなくなっていく。せっかく話せる友人ができたときも、ある日突然関係を自ら断ち、何も言わずに消え去った。僕は一体、何に怯えているのだろうか。

そんな僕が社会にデビューを果たしたのは、平凡とはかけ離れた、日本屈指の金属加工の会社「日本加工」への就職だった。この業界の中では常に最先端の技術に挑戦を続け、規模も技術も業界トップクラス。別の大手加工会社からも、日々手に負えない難解な加工が持ち込まれていた。

この会社の大きな特徴の一つは、レーシングシーンにおいて、多大な技術力と資本を投下しているということだった。世界中で走る多くのレーシングマシンのボディには、輝かしくも我が社の「日本加工」のロゴが、堂々とデザインされていた。

僕の実力なんかでは、到底、否、何があろうとも入れないようなトップ企業だった。しかし叔父の知り合いの親戚の誰だかわからないような強力なコネを得て、なんとか放り込んでもらった。

会社に入り早くも5年が過ぎていた。沢山の仕事も覚え、それなりのスキルを身につけてはいた。コミュニケーションが下手なりにも、仲間と呼べるような同僚も微かにいた。たぶん……。

しかし女性に関してはまったく違った。会社でも、女性に話しかけようと思うだけで、足がすくんだ。当然彼女なんて、いるわけもなかった。

そんな僕にも、１９歳の時に一度だけ彼女ができたことがあった。もちろん相手は想像上の生き物などではなく、きちんとおしゃべりをしてデートもした実在の女性だ。そして彼女は美しかった。僕は彼女にのめり込むように好きになり、夢中になった。そして僕は夢中になったままの状態で、ある日簡単に振られてしまった。捨てられた、いや見切られたと言った方がいいような別れ方だった。それは当然思いだしたくないような無惨な代物だった。

当然別れなど受け入れられるわけもなく、その子がいない現実に長い間苦しんだ。その苦しみに耐えられなくなって、心の中のゴミ袋に彼女への想いを無理矢理押し込んで捨てた。といっても、無理矢理押し込んだのは僕ではなく、何度も何度もゴミ袋から顔を出す

彼女への想いを押し込んでくれたのは「時間」であり、そのゴミ袋を運んで行った収集車は「仕事」だった。僕自身はもがくだけもがいても、なんの役にも立たなかった。

僕は時間の素晴らしさを知り、仕事の大切さを知った。

僕はずいぶん前から会社にいると「彼女がいない」、ということでいつも誰かにバカにされてるような気がしていた。喉から手が出るほど彼女が欲しかったのに、声すらかけれない自信の無さが、罪悪感をもたらしていたのかもしれない。彼女がいれば、自分に自信が持てる。本気でそんなことを信じていたのだ。だからなのか、現実でも社内で、僕に彼女がいないことをよくからかわれていた。

僕の頭の中のターンテーブルに「彼女が欲しい」という名前のレーコドが置かれ、そっとユニットが下ろされた。ダイヤモンドの針先は、幾重もの溝に進路を任せた。

出会いはまるで、事故のように突然やってきた。

ある日の昼休み、いつもは行くことの無い社屋裏手の駐車場を通った。その傍らのベンチに座り、熱心に雑誌を読む一人の女性がいた。制服ではなく私服だったのでわからなかったが、近づいてみると、すぐに誰だかがわかった。僕とは別の部門の花形で腕を振るう、芹澤ゆり子だった。いつも小さくクスクスと笑う表情が愛おしく、社内の隠れリサーチ部が弾き出す、お嫁さんにしたいランキング、だんとつの1位だった。

彼女はまだ27歳と職人としては若かったが、加工の技術の腕は社内でもトップクラスだった。彼女は僕より二つ年上なだけで、すでに大勢部下のいる役職に就き、会社の中枢とも言える最終仕上げの部門で活躍をしていた。この部門のリーダーは、チームワークとバランスの良い人間性が求められていた。しかし、何より技術の高さと情熱が必要な部門だった。

彼女は専門学校を卒業し、新卒でこの会社に入社したようだったが、すぐに頭角を現し、ありとあらゆる技術をスポンジのように吸収していった。

視界の端でベンチに座る彼女を凝視すると、女性にしては珍しい雑誌を読んでいた。それは『ライディングサウンズ』という業界唯一のレース雑誌だった。僕は根っからのバイク好きで、高校を出たころはミニバイクが走るサーキットで働きながら、暇さえあれば借りたマシンを走らせていた。

そこで走るミニバイクライダー達は、雑誌にも載るような達人の面々で、地面すれすれ

までマシンを倒し、恐ろしいほどのスピードでコーナーを駆け抜けていた。僕は普段、テレビでバイクレースを見るのが唯一と言っていいほどの趣味で、そのためにCS放送のいくつかのチャンネルを契約するほどだった。『ライディングサウンズ』は、僕が毎月熱心に読んでいる雑誌で、必ず毎月、いや隔月、いやいや数ヶ月に一度、……年に1、2度ほど買う雑誌だった。

しかし、買わない月は本屋で何時間でも立ち読みをし、隅々まで読み込んだ。時にはめくり過ぎてページがふやけるほどの意気込みで熱心に読んだ。

こんな僕だ、きっと話も合うはずだ。僕は一世一代の大チャンスに興奮した。彼女と話したいという気持ちは、荒波のようなプレッシャーをも乗り越えようとしていた。

雑誌を読む彼女の近くを歩いたものの、やはり勇気なんて出ない。ひとまずその場を過ぎ去ろうと、ビルの陰に自然に身を隠した。そこからこっそりと彼女の様子を眺めた。

腕を組んで考えた。昼休みはまだ30分ほどあった。きっと彼女はまだしばらくいるはずだ。このチャンスを逃すわけにはいかない、今しかない！　僕の鼓動は跳ね上がり、ハーレーダビッドソンのエンジンのように重く刻んだ。僕は「どさっ」という音とともに、心のブレーキを外すと地面に捨てた。

「ドッドッドッド」唸りを上げるエンジン、血走る目！「もう誰もおれを止めれないぜ」と突進した。しかし僕の膝は、信じられないほどかくかくと震えていた。もう止まることのできない僕は、膝を揺らしながら話しかけた。

「ぼくもその雑誌が好きです。れ、レース好きなんですか？」

「ええ」

とだけ返事をすると、彼女は黙ったまま僕をじっと見た。「え？　それだけ？　え、なんで？」とまばたきがを繰り返す。

沈黙に身動きができないでいる僕を見て、彼女は話を始めた。

「オートバイがとても好きで、特にレースが好きよ。MotoGPのレースは毎回観ているわ」

彼女は僕を見つめながら、星が舞い散るようにきらきらと話した。子猫が人の言葉を話したならば、きっとこんな風に話すのではないか？　それほどの可憐な声だった。

僕を見るその愛らしい表情は、ストーブの前に置かれたアイスクリームのように、僕の胸を甘く溶かした。

「あなたは？」と彼女が言った。

「へ？」
「ん、『へ』って？」
いやいやと僕は顔をブルブルと振るった。
「じ、自分も、見てます、いや見てますです！」と僕はさらに膝を笑わせ、上官に報告でもするように叫んだ。
彼女は新緑の木陰の中から、奇怪な返答をする僕を見てくすくすと笑った。笑った彼女の頬には淡いチークがふんわりと浮かび、口角はくるんと母性豊かに上がっていた。まさに「ゆり子」という名前以外思いつかなかった。もう僕は彼女のことが好きになってしまった。
同じ空気を吸うことすらないと思っていた「高嶺の花」の彼女と会話をするなんて、僕の中にはそんな発想があるわけがなかった。しかし今、目の前にその彼女がいて、僕に視線を向けながら口からは言葉まで発せられている。その現実の破壊力に、くらくらとした。
「どうしたの？ ふふふ」
「い、いや……」
僕の膝はまだ激しく振動している。彼女は揺れる僕の膝を見ると、くりっと大きな瞳を輝かせ、こんなことを言った。
「今お産まれになったのですか？」
「は？」
何が起きたのかさっぱりわからなくて、僕の目は遠くの山に沈むサンセットを、慈しむようにまぶたを細めた。この人が何を言っているのかまるで分からなかった。
「はい、バンビと呼んでください！」
完璧だった。僕の返しは完璧だった。床すれすれでレシーブをするリベロのように、僕はその球をセッターに返した。
「面白い人ですね。面白い人、好き」と言って笑った。
す、好き……。彼女のバックアタックが僕の顔面に決まり、鼻血が出た。
そもそも彼女が放った「今お産まれになったのですか？」、それは、膝を震わせる僕への華麗なる突っ込みだった。子鹿のあの生命の誕生を思い出してほしい。産まれた子鹿が足をガクガクとさせながらも、生命の強さで猛烈に立ち上がる。僕の膝は、まさに子鹿の誕生を思わせるような、「震え」だったのだ。目の前に現れた新生児バンビに対して、彼

女はキラキラとした目をさらに輝かせた。まさにシャレの分かる人だった。
彼女は顔の角度を少し変えると、またさらに優しくニコッと微笑んだ。
その微笑みを凝視した途端、頭の先からつま先まで、全身が真っ赤になっていくのをありありと感じた。顔に関しては完全に『リンゴ』だった。
「あ、あなたのほうが、面白い、人でぶぅぁっ」とリンゴは舌を噛み、やる気は空を切った。
「あ、あはは、大丈夫ですか？」
「は、はあ……」と答えながら、噛んでしまった舌が取れていないことを確認した。
「その雑誌、ライディングサウンズですよね？」と僕は彼女に言った。
しかし次に発した彼女の右ストレートの発言は、僕のこめかみをえぐるように叩き、マットに沈ませた。
「2輪のレースって面白いわよね。わたしの父が運営をしてるチームが、先月のMotoGPのイタリアグランプリで優勝したの。これよ」
「はぁあ？」
僕はページを覗き込みながらパニックになった。彼女があっさりと指を刺したページでは、マシンを見事にウイリーさせ、ゴールラインを過ぎ去る瞬間が大きく載っていた。それを見た僕は、驚きのあまり、少し痩せて……そして縮んだ。
そこに写っていたオートバイは、世界の二輪界を席巻する、バイクメーカーの巨頭の一つ「ヤマハ」が作り上げた、MotoGPマシンだった。そのマシンは、芸術的彫刻と呼べるほどの鍛造技術で作り上げられた車体に、最先端の電子制御テクノロジーが詰まり切ったエンジンが載せられている。この地球上で、サーキットを最も速く走らせることができるオートバイだった。さらにそのページで華麗にライディングしているライダーは、あの過去に9度も世界タイトルを獲得したヤマハレーシングチームのエースライダー、バレンティーノ・ロッシであった。
陽気でお茶目なイタリア人の彼は、世界中に圧倒的な数のファンを持ち、どのサーキットでもテーマカラーの蛍光イエローで観客席を埋めてしまう。そのキャラクターとは正反対に、悪魔のようなレース運びで世界中のレースファンを驚愕させてきた。その存在は、現役として走りながらも、すでに史上最高の伝説となっている。まさに王の中の王だった。
「君もロッシのことは知ってるわよね？」と彼女は知的な表情をしながら僕に聞いた。

「ロッシ？！　も、もちろん知ってますとも！」そう答えると、彼女の瞳は好奇心を膨らませるように、キラリと光った。

「ムジェロサーキットでのこのロッシの走りは、まるでロデオのようだった。暴れるマシンを外側の膝でうまくコントロールして、縦横無尽にタイヤを滑らせる。本当に楽しそうにライディングしてたわ。見ているわたしまで楽しくなってきちゃう。電子制御が極限までに発達されたマシンで、あれだけ観衆の気持ちとを一体化させるライディングができるのは、ロッシの他には知らないわ。わたしはロッシのことが大好きなの。一度日本で会った時は、彼はわたしを抱え上げて頬にキスをしてくれたわ。さすがイタリア伊達男ね。コースの外の彼は、すごくチャーミングで優しいのよ。あ、ごめん、わたし、しゃべりすぎね」彼女はそう爆弾発言を連発すると「ふふふ」と笑った。しかし僕のあごは外れっぱなしだった。「ヤマハが父さん？　ぅぁ？　ロッシがチャオ？　ぅぇ？」僕はとてもじゃないがこの現実が受け止められなかった。僕はどんな表情を作れば今のこの状況に相応しいかなんてわかるわけがない。という無惨な表情を作った。それを見た彼女は「なあに、その顔。あはは」と手のひらで口元を押さえるように笑った。

僕は到底笑えなかった。世界最高峰のレーシングチームを運営する指揮官の娘さまがここにいて、僕と話しをしている。何が起こっているのかなんて理解できるわけもない。僕の膝は、さらに激しく振動し、マナーモードのように、「ぅー、ぅー」と素敵なメロディを奏でた。その振動は大地を割り、地面を引き裂いた。もう一度この状況を解析しようと、コンピューターをフルスロットルした。しかし「ぷすん」と言って動かない。そうだった……。もうすでに僕はありったけの燃料を使ってしまっていた。もはやこの船は大海原の「ゴミ」と化していた。そんなゴミから出た言葉は、

「そうすか」

もはや感情を移入する力は一つも残ってはいなかった。彼女の輝き、彼女の眼差し、彼女の家柄。どれをとってももう僕に防御する力など残ってはいなく、打たれっぱなしのサンドバッグ。「良いパンチもってんじゃねえか」と、翳りゆく意識の中でつぶやいた。

その神々しい家族背景をお持ちの彼女の全身を見てみよう。ヘアスタイルは、ふんわりゆるめのボブカットで、パーマと主張しすぎないカラーが施されている。頬の左右の毛先はくるんとカールし、後頭部は後ろ髪に隠れるように刈り上げられていた。服は、真っ白で麻のふわっとしたシャツ。ボタンは清楚に一番上まで止められている。藍色の踝丈のゆったりとしたキュロットを履き、足下は素足で白いローカットのコンバース。僕は一瞬で

彼女の全身をスキャンすると、「こ、好み……」と見惚れた。
彼女はおしゃれなインテリアショップで働くお姉さんのようなスタイルで昼休みを過ごしていた。後で聞くと、この日はたまたま広報の手伝いで、社内報の撮影をしたらしい。
「社員のある日の休日。という見出しなの」と言っていた。聞いたあとすぐにその社内報を探しに行き、2部持ち帰ったのは言うまでもない。
「テレビで毎週見てるのよ」
「……」
「ねえ？」
彼女が優しく僕の顔を覗き込んだ。
「うわあ、あ、はいっ！」
あまりに非現実な展開に、すぐに脳が活動を停止ししようとする。
「何度も行きたいと言っても、父はなかなか現地へは連れて行ってはくれないの『女が来る場所じゃない』なんて言って。グランプリにはどのチームにも女性のスタッフは沢山いるのよ。わたしはいつかヤマハでレーシングエンジニアになりたいの」
と彼女は話し、さらに衝撃的な事実を僕に告げた。
「実は、わたしはヤマハの社員なの」
「え？　へ？」
「ふふふ、そうよねびっくりするわよね」
僕は間抜けな顔でリアクションをする。
彼女は満足げな表情を浮かべる。
「わたしは最初、ヤマハのレース部門の会社に入社したの。いわゆるヤマハワークスよ。この雑誌を読んでいるならわかるわよね、ヤマハレーシングチームを運営する会社」
僕は上下に頭を大きく何度も振った。
「え？　じゃぁ……？」僕の頭の中は「？」で一杯になった。
「ふふふ。聞いて」
彼女は悪戯げに微笑むと、話を続けた。
「父は気に入らなかったの。わたしが内緒で試験を受けたことが。もちろん試験で父の名前なんて言わなかったわ。自分の力だけで内定を取ったの。わたしは専門卒だけど、大卒まですべて含めても、女性で内定が貰えたのはわたしだけだったわ」
「す、すごい……」

「ありがとう」と彼女はにっこりとした。
「わたしのその行動に父はとても怒って、採用の責任者にまで食ってかかったみたい。だからといって正式に内定した人間の結果を破棄にする権限も父にはなかったわ。わたしは父に『バイクレースのエンジニアになりたい』って言ったの。一ヶ月後父はわたしにこの会社への出向を言ってきた。父はもちろんわたしが憎くてそんなことを言ったわけじゃないのよ。レースの現場では、経験と知恵と体力がいる。父はそれを自分が一番良くわかってる。ヤマハワークスのマシンのパーツ加工は、ほとんどをこの会社が引き受けているの。ここでは山のように金属加工を学べるし、それはマシンを設計する上でも計り知れない経験になるから」
「そうだったんですね、ゆり子さんなら立派なエンジニアになれると思います！」僕は初めてまともなことを言えたのだが……、
「きみは確か強度テスト部門の子よね？　わたしのこと知ってくれてるの？」
「え、あ、はあ……」
名前を知っていたことが伝わってしまい、咄嗟にごまかすように「あ、蝶々っ」などと言ってしまった。しかし彼女は、「え、どこ？　蝶々どこなの？」と指の指す方をキョロキョロと探していた。これはユーモアなのか……？
けれど彼女は僕のことを知っていた。それは心に花を咲き誇らせるには十分だった。
そのあとも僕らは、昼休みが終わったことにも気づかずに、おしゃべりを続けた。
「おい、先に行ってんぞっ」と他の課の仲間がそう声をかけると、慌てて走り去った。それで僕らはようやく時間に気がついた。
「いっけない！」
彼女はそう言うと片目をつぶり、朝ドラのヒロインのように慌てて雑誌を小脇に抱えた。その仕草がたまらなく可愛くて、また見とれてしまった。「いっけない」ってこういう時に使えば良いんだな。僕は変な所に感心していた。「いっけな……」さっそく練習をしようとした瞬間、
「いこうっ！」
彼女が声を上げると、僕らはロッカーへ走り出した。
新緑が萌える初夏の光が、彼女の頬に日差しと木陰を交互に映した。
「あなた来週の日曜日って空いてる?!」と彼女は走りながら僕に聞いた。
「あ、はひっ！」

舌を噛みながら答えると、僕らは走りながら会話を続けた。髪を揺らしながら走る彼女のボブカットの隙間からは、時折コケティッシュな瞳が眩しく覗く。そんな瞳に僕の胸はさらに締め付けられ、笑顔で走る彼女の姿を目で追いながら、「きゅうんきゅうん」と心の中で鳴き続けた。すると思わず口からも「きゅうん」と声が漏れた……。

「え、なに？」

彼女は走りながら聞いてきたが、僕は「あはは」と笑ってごまかした。

それから二ヶ月ほどが過ぎると、僕らは付き合いを始めた。

＊

「ぎゅっ」とバックパックの口紐を締め、その口を覆うようにヘッドバッグを垂らせ、黒いプラスチックのバックルで「カチン」締める。その固い音の響きが部屋中に行き渡る。ずっしりと重いバッグを背負うと玄関に向かった。

このインドへの旅の為に1ヶ月前から履き慣らしたコンバースのローカットのスニーカーを手に取り、丁寧に靴の紐を結んだ。バッグの重みを感じながらのしっと立ち上がる。その履き慣れた靴の感覚は、足の先から脳天へと綺麗に突き抜けた。「これなら、どこまででも歩いて行かれそうだ」僕は荒くて長い鼻息を吐き出した。

玄関の扉を勢い良く「ガチャッ」と開けると、外は光で溢れかえっていた。目を細めながら足を踏み出し、扉を静かに「パタン」と閉めると、ドアノブの感触を確かめながらそっと手を離した。靴の裏の感覚を確かめるように、ゆっくりと右足を前に踏み出す。右、左、右。としっかりとした足取りで旅は静かに始まっ……「ズコッ」と段差につまづきよろけ、「ぐえっ！」と汚い声が上がった。左足はぐりんと捻れ、その拍子で右腕は何故か天を指差し、左手で地面を支える無様なポーズに。バッグの重量がすぐにそのポーズを崩壊させると、派手に尻もちをついた。僕は尾てい骨を打ち、聞いたこともないような「ぎゃっ、ばっ」と奇怪に叫んだが、苦虫を齧って吐き出したような顔をしながらも、荷物の安全だけは死守した。必死に痛みを堪えながらピークが去るのを待つ。「あーもう」と小さな声で呻くと、ゆっくりとまた立ち上がった。しかし2、3分も歩くと、すぐに旅の興奮がよみがえり、尻の痛みなんて綺麗に消えていた。空はどこまでも青く、日は暖かく、

風はさらっと乾いていた。
　歩道の上の電線に止まるかわいらしい小鳥は、けたたましくぴーちくぱーちくと鳴き叫び、僕の旅を祝福しているかのようだった。僕は小鳥に向かい「行ってくるね」とくねくねと語りかけた。小鳥は狙い澄ましたかのように、僕の肩めがけて糞を落とした。僕は今まで一度だってしたこともないような広い角度に腰をひねらせ、ぎりぎりの所で糞を避けた。「あっぶね、この鳥めがっ！」と小鳥に向かい吐き捨てた。
　意気揚々の旅の門出で発した僕の言葉は、爽やかな「いってきます」などではなく、「あーもう」とか「この鳥めがっ！」などの濁った罵声だった。

「なんじゃこりゃ……」初めて来た成田空港のロビーは、桁違いに圧倒的な空間で、興奮した僕の目は恍惚に輝いた。搭乗手続きの為の、航空会社チェックインカウンターを探し歩いた。地図の説明を何度も何度も声に出して読んでみたものの、どこに何があるのやらさっぱりだった。
　キョロキョロしていると、「どうしましたか？」と声をかけられ無防備に振り返ると、そこにはインド人の男性がいた。突然現れた褐色のインド人に驚いて、僕は逃げ出してしまった。これから一ヶ月もインドへ行くというのに……。そのインド人は必死に僕を追いかけてくると、流暢な日本語で強引に地図を奪い、怯える僕に親切に説明した。
「あ、ありがとう」と言って礼を言い、体を「バキッ」とまっぷたつに折った。お辞儀をすると背負っていたバックパックの重さで思わずフラついた。インド人って親切なんだな。よしこれは旅の為にインプットしておくか。と、こめかみの辺りのメモリーボタンをぽちっと押した。
　インド人に言われた通りに歩いて行くと、目的の窓口があった。パスポートと航空券を受付のお姉さんに渡すと、「ついにここまで来た」とまだ離陸すらしていないのに、万感の想いが僕の目を潤ませた。
　出発ロビーの大きな窓からは、僕がこれから乗り込むボーイング７４７の巨大な機体が、ドッグに接岸されている姿が見えた。空を飛ぶ豆粒のような飛行機しか見たことがなかった僕には、これを本当に人間が作ったのか？　と、見れば見るほど信じられなかった。
　窓にへばり付き、その姿をじろじろと眺めた。機体には、大きく「AIR-INDIA」とい

う文字がデザインされいて、垂直尾翼には「コナラク・チャクラ」（インドのコナラクの神殿の車輪）が真っ赤に描かれていた。窓にはそれぞれに、可愛い装飾が施されていた。

僕は今からこれに乗ってインドに行く。あとはもう乗るだけだ。目を思いきりつぶり、胸の前で両方の拳を力一杯握りしめると、「よしゃっ！」と叫んだ。

しばらくすると１２４便の搭乗案内が始まった。待ち合わせていた乗客がカウンターに列を作り出す。僕もその流れに合わせ、慌てて列に並んだ。

チケットを睨みながら通路を進むと入口のハッチが見えてきた。そこに近づいたとき、「そうか、このハッチが閉まると、ここに見えている白い壁はすべて機体の外壁そのものなんだよな。細かなリベットも見える」と、とキョロキョロし職業柄すぐにこのリベットの強度を暗算した。

この外壁に上空の風を滑らせながら、機体は空高く飛んでいく。いよいよ僕は空を飛ぶ。そう思うと胸は高鳴り空いたお腹はギュルギュルと鳴った。すると後ろから来たインド人に「どんっ」と体を押され、僕はよろけながら搭乗への一歩を踏み出した。

「ナマステェ」

サリーを見事に着こなした、美しいインド人キャビンアテンダントが、胸の前で手を合わせながら挨拶をすると、よろけた僕を見てクスクスと笑った。

「なますてえ」と手を合わし苦笑いで機内に乗り込むと、自分の席に着いた。着席してからしばらくしても機内はガラガラだった。

「機は、あ〜、まもなく、あ〜、離陸、あ〜、しますー」

濃いグリーンの瞳をした、スタイル抜群のインド人キャビンアテンドが、流暢で「あ」を挟んだ日本語でアナウンスした。

ボーイング７４７の機体は、エンジン音を唸らせながら滑走路へと向かった。

＊

僕とゆり子は、お互いとても仕事が忙しかったから、デートのほとんどが昼休みの1時間か、会社のあとのコーヒーショップでのおしゃべり程度だった。コーヒーのお代わりが自由なこのお店で、僕らは夢中で話しをした。

僕らは二人で最高１３杯ものコーヒーを飲んだことがある。
二人が好きなドラマに、コーヒーを何度もおかわりをするほど長話をした。というシチュエーションがあって、二人で無理して飲んだことがあった。
ドラマの中では、彼女が「１２杯も飲んだね」というと、手の甲に正の時で数を記してあった彼が、それを彼女に見せ「ちがうね、１３杯！」と言って二人が仲良く笑いながら、ドラマは最終回の幕を閉じる。僕らもまったく同じことをしては、笑い合ったりした。僕らは時間を忘れて楽しんだ。僕もゆり子も、何よりこの時間を大切にしていた。
店の目の前の幹線道路には、沢山の車がヘッドライトを眩しく光らせながら通り過ぎる。その光と街灯できらめく窓の外と、店内の照明できらめくゆり子の顔を視界に入れながら、僕はこの時間の幸せに夢中になった。

僕らはいつも、二人並んで歩くときは必ず手を繋いだ。
僕が右側で彼女が左側だった。
ある日の駅までの帰り道、僕らはいつもと同じように手をつないで、止まらないおしゃべりを弾ませていた。駅のロータリーに向かう大通りに折れるところで、僕らは赤信号で止まった。会話は自然に途切れ、僕は信号機を見つめた。するとゆり子は、繋いだ僕の手をぶんぶんと振り出した。それに気がついた僕も、ゆり子の動きに合わせて手を振った。はにかむゆり子。浮かれる僕。信号が青になり、僕らは手を振りながら横断歩道を渡った。ゆり子は言葉を発せず、ただ手を振ながら、何かを考えていようにに見えた。
はにかみ女と浮かれ男は、言葉も交わさずお互いの心の声に耳を澄ませた。
「ねえねえ」と言うと、ゆり子は上目遣いで僕を見た。視線はもじもじと彷徨っている。
「ん？」
「いい……？」
「何が？」
「あ、ごめん……」と言ってゆり子は俯く。
「トイレ？」
「ち、ちがうよ」と慌てる。違うのか……。
僕に人の心のひだを読み取るなんて無理なようだった。
「どうしたの？」
「今度ね、きみの部屋……、見に行ってもいいかし、ら？」ゆり子はもじもじとしながら

も、とんでもない爆弾を僕に放り投げた。
「え?!」僕はびっくりして、爆弾を受け取ったものの、どうしていいかわからずに、右手に左手に行ったりきたりと渡す。
「だめ……かな？」とゆり子はそう言って、僕の目をちらちらと見た。慌てた僕は、咄嗟に爆弾を口に放り込んだ。そして
「部屋き、汚いけど、ゆり子が良いなら……」と僕は一度は断る。という情緒も忘れ、爆弾を起爆させてしまった。僕の両頬は「ばふんっ」と膨らんだ。僕はいとも簡単にゆり子の爆弾発言を受け入れてしまった。
「もちろん！　わたしお掃除は得意よ」とゆり子の表情が一気に華やいだ。
「え、え、掃除？！」
「あ、女に部屋を片付けられるってのは、もしや、おぬし嫌いなのか？　それともまた産まれちゃうの？」と言って、初対面の時の「今お産まれになったのですか？」の僕の膝を、からかった。ゆり子の目は、もじもじからいたずらっ子にチェンジしたようだ。
「う、産まれないよ！」
「ははは、くるしゅうない、わたしにまかせなさい」とゆり子は僕の肩をポンポンと叩いた。
「う、うん……」というだけが今の僕の精一杯の返事だった。
　僕は人にからかわれることを極度に嫌った。責められているような気がしてならないし、どうリアクションしたらいいかまったくわからないからだ。そんな時は家に帰ってまでぐるぐると思考の駒が止まらなくなる。しかしゆり子に対しては、不思議とその発作のようなざわつきは起こらなかった。僕は嬉しさを悟られないように頑張ったが、表情は露骨に色めいた。
「そうよね、彼女が部屋に来て掃除してくれるなんて嬉しいわよ、ねー？」とゆり子は語尾を伸ばすと僕の腕に抱きついた。その弾みで僕の腕はゆり子の胸にムニュッと当たった。え、意外と胸、大きい、の……。その感触は、僕の意識を銀河の果てまでムニムニと吹き飛ばした。
「あ、それともなんかしちゃうの、この手で？」とゆり子はさらに僕の手を持ってからかった。僕の脳みその処理能力は崩壊し、「わっ、わ、わー」としか言えなくなった。次第に意識は幽体離脱した。

……僕はジャズが流れるステレをのボリュームを静かに下げた。かすかに聞こえるジョン・コルトレーンの囁くような演奏。両手を彼女の肩にそっと乗せると、彼女は少しだけ俯いて、僕の胸にこめかみを当てるように身を預けた。
「いいよ……」彼女は小さな声で意思を伝えた。僕の心臓の音は、耳で聞き取れるほど鳴り響き、僕の体の一部のアイデンティティは荒々しく鼓動を始め……

「チョップーっ！」
ゆり子は僕の頭に手刀を振り下ろすと、触るように叩いた。僕の恋の極限状態は、胸の扉を派手に開け、妄想列車「網走一番号」を発進させ、流氷でも割りに行きそうな勢いだった。
「なに妄想してたの？　ねえ。ふふふ。どこ行ってたの？」
「え、うん、ちょっと網走まで……」
「網走？　なんで？　あはは。きみ今日も面白いわね」と言って、ゆり子はまたくりっとした子鹿の目をキラキラとさせた。
ゆり子のいたずらには心臓が止まるほど驚くが、僕のお花畑のマーガレットは、片っ端から咲き誇った。
「今週末はお互い土日は休みだもんね」
「あ、ああ……」と、聞き流したあと我に返り、
「ど、どにちい?!」と言って驚きを通り越した僕は、鬼の形相で斜め上からゆり子を睨んだ。
「ちょっと、こわい、こわいよう、きみー、あはは。……だめかな、土日？」
「え、え、あ、ああ……」
土日ということは……。どー、にちと指を折り数える。
つまりは連日……「えー！」再び妄想は暴走し、やっと鎮火したかに思えた「妄想網走一番号」のボイラー室は、また息を吹き返し轟々と薪を燃やした。
僕は裸のまま網走一番号から勢い良く水に飛び込み、片っ端から手刀で流氷を割った。
「そ、そうだ！　休みだ休みだ！　ばんざいっ！　わー」
僕は複雑に混ざりあった感情を爆発させると、現実に暴れた。大声で道路に向かって「トラックーっ」だとか「軽自動車ーっ」だとか取り乱し叫ぶと、そのあとに至っては「ほうれんそうーっ」だった。僕のボキャブラリーは崩壊した。

隣で体をくの字に折り曲げながら大声で笑うゆり子を見て、「妄想網走一番号」はさらにと薪を焼べ、盛大な汽笛を鳴らした。しばらくあとに絞るように「ぽめらにあーん」と叫んでからの僕の記憶は稀薄だった。ゆり子はただひたすらに笑い悶えていた。

稀薄になりつつある意識の片隅で、ゆり子が家に来る、ゆり子が家に来る！　と何度も何度も嬉しさをかみしめた。

僕が住む2階建木造アパートの一階の角部屋は、隣も上も静かなものだった。生活の物音が何もしなくて、本当に誰か住んでいるのか？　そう思い、2階に上がって電気のメーターを見たことがあった。しっかりと回っていた。

僕の部屋の窓の外には、護岸されボートでも通れそうな幅の川が流れていた。水は思ったよりも奇麗に澄んでいて、小さな魚が泳いでいたり、ときおり白い大きな鳥もやってきた。部屋が暑さに充満していても、テラスに出ると気持ちのいい風が吹いていた。僕は内覧をしたときにその川が気に入って、すぐにここを住処と決めた。

僕はビールと文庫を片手に、窓の外でフェンスに寄りかかりながらの読書をこよなく愛した。外にも小さいテーブルと椅子があれば良いな。と、想像しながらビールを飲んでいると、フェンスに良く分からない種類の小鳥がやってきては奇麗な声で鳴いた。

いよいよ明日は、ゆり子が僕の部屋に来る。そのために隅から隅へと、ゴミひとつ見逃さないように捜索隊を結成した。「隊長っ！　ここに何やらポテトチップスの破片のような物がおちておりますっ！　何っ?!　すぐに回収隊に連絡し、本部に運ばせろっ！　ラジャーッ！」と僕はノリノリだった。

明日のお昼にはここにゆり子がいる。そう考えるだけで、僕の胸ははち切れそうになった。そして胸を押さえながら、ニヤニヤと枕のカバーを交換した。

当日僕らは駅で待ち合わせをして、一緒にアパートまで歩いた。

僕らはいつものようにふざけながらはしゃいでいて、今日はゆり子も少し緊張しているのか、いつもより少しリアクションもオーバーだった。

歩道に落ちている空き缶を指差しては「君んちここ？　君んちここなのか?!」と缶に向かって話しかけては笑い、僕も僕でそれに合わせるように腕で輪っかを作り、そこから頭

を出しながら「ようこそいらっしゃい、ようこそいらっしゃい」とおどけた。
お互いが同じ気持ちなのだと、ゆり子の気配からそう感じた。
アパートに着き、玄関の前で鍵を出そうとしたが、なかなか見つからなかくて焦った。
「落としたのか？」しかし合鍵は家の中だ、もし失くしていたら二駅離れた不動産屋まで取りに行かなくてはならない。焦りに焦った。
僕がもたついている様子を見て、後ろから右手を大きく開きドアに向け、「今エネルギー送ってるから」とゆり子はまたいつもの小芝居をしていた。
僕はじたばたとポケットをひっくり返した。ない……。
「ない！　鍵がない！」
「えー、鍵がないの?!」
と言ってゆり子も小芝居をやめ、がさごそと僕のポケットを探り出した。その入り込む手の感触にドキッとした。
意識がふと、目の前に向くとと、ドアノブを見て愕然とした。
僕の目は死んだ魚のように真っ白になり、棒のように立ち尽くした。
それはまるで「鍵」という名の指揮官が、その後を群がる騎馬隊のような様相を呈したキーホルダーを携え、しっかりと鍵穴に刺さり燦然と輝いていた。
僕は普段から鍵を失くさないように、ありったけのキーホルダーをつけていたものの、浮かれたあまりドアノブから抜かずに家を出てしまったようだ。
「白目、白目！」とゆり子は、白目な棒になっている僕の肩を慌てて叩いた。
「鍵あった……」
「え、どこ?!」
「ここ……」
ゆり子はきょとんした後、声を絞るように「くくく」と笑い出した。
「なに、きみんち今セキュリティーゼロ？　セキュリティーゼロなの?!」
ゆり子はなぜか楽しそうだった。
「……」僕。
「でも、大丈夫よ、わ、わたしがついてるわ。くくく」
フォローしながらも必死に笑いを堪えるゆり子。
「これ取られ放題、取られ放題だわー。ははは」
結局笑いを堪えきれず、言いたい放題のゆり子だった。

「と、取られるもの、な、なにもないけどよね、えへ」と僕は、はにかんで応えるのが精一杯だった。

しかし何より鍵があって心の底からホッとしたした。

ドアを開けなきゃ。と刺さったままの鍵を慌てて回すと、勢い良くドアノブを引いた。

しかしドアは開かず、僕はノブを引いた勢いでドアに全身を「ごと」と鈍い音を出しながらぶつけた。ドアの鍵は最初から開いていて、それを回し今更戸締りをしたのだ。向かえに行く前、僕は本当に、ただ鍵を穴に挿しただけで出かけていたということだ。まったくその時の記憶はなかった……。

「何の新喜劇なのそれっ、わざと？　もうほんとやめてお腹いたいよ……。くくく」と言って彼女は俯きながらお腹を押さえると、僕の右肩を掴みながら体を支えた。

「ゆり子の手が僕に触れている！」と僕はドキっとし、全神経をその手が触れた右肩に緊急召集させる。

その後もゆり子は笑いの底からは這い上がれずに、僕の右肩を掴みながら「ツボ、ツボ」だとか「君天才？」などと大受けだった。

「はあ、さい先悪いな」と思いながらも、彼女の細い指が触れた僕の右肩は、ふんわりと熱を帯びていた。

「わたしこういうの、ほんとにツボで笑いがとまらないの、ごめんね。くくく。でもこんな笑えて、ほんと幸せ」

僕は喜んだらいいのか、落ち込んだらいいのかわからなかった。

「お邪魔しまーす」

僕は鍵ひとつのくだりで一日が終わるのかと思いながら玄関を上ると、ゆり子はあとから僕のと一緒に靴を揃えてから部屋に上がった。僕はその様子を見るともなく確認した。昔付き合っていた彼女は、決して自分の靴も、ましてや相手の靴なんか並べるような子ではなかった。僕はずっとそういうことが引っかかっていたけれど、何かを言えるわけではなかった。だからゆり子は気遣える人なんだと安心した。しかしすぐに「そんなの女なら当たり前だよね」と傲慢のスイッチが「カチリ」と入った。けれど僕自身に、その音は聞こえてはいなかった。

「ふーん、なかなかがんばったね、きみ。わたしの出番はなさそうね」

部屋に入ったゆり子はベッドに座ると、辺りを見渡しながら少し残念そうに言った。

僕と視線が合うとゆり子は微笑みながら首を傾げた。
ゆり子が……、ベッドに……。と僕は固唾を呑むと、乙女心は破裂寸前だった。そんな乙女が何をしたのかというと、やけくその演説のように、あのシミがどうのとか、昨日そこを蟻が通っただとか、どうでも良い日常を身振り手振りでまくし立てた。
「緊張してるの？」と言ってゆり子は微笑むと、身振り手振りのまま体は固まり、動けなくなった。
「え、あ？、そ、そうかなあ……」
「ふふふ」
「あはは……」
「大きな窓ね。明るくて気持ち良い」ゆり子が何もなかったかのようにそう言うと、僕の体は呪文がとけたように動き出した。
「出てみる？　川が流れてるんだ」
「うん！　ずっと見てみたいと思ってたの」
「そうだゆり子、ビールでも、飲むう？　の、飲もうよ！」
「それ良いね！　最高だね」
太陽の高さはまだまだピークを保っていて、日差しも注燦々と注いでいた。まだしばらくはぽかぽかしていますからね。と言ってくれているようなのどかな暖かさだった。
玄関から靴を取って、僕らはテラスの外に出てビールを開けた。缶を目の高さに上げると、「かんぱい！」といって缶を当てた。
経験したことのないような至福が四方八方からからやってきて、僕はどうにかなってしまいそうだった。「もう会社なんて辞めてやる」僕は取り返しのつかない妄想すら暴走させた。ゆり子はすでに頬をほんのり桜色に染めていて、それを見た僕は正気を取り戻し、「会社はぜったいにやめないぞ」と誓った。
暖かい日差しの中、心地良い風が吹き抜ける川の流れを眺めながら、ゆり子は嬉しそうにビールを飲んだ。
「このシチュエーション、これどんな極楽なのよ。おいー、答えて。きみ答えてよー」
酔いも回り始めたのか、ゆり子は陽気にきゃっきゃとはしゃいだ。
ゆり子の話し方は、わざと抑揚を消す声のトーンだったり、乱暴すれすれでも攻撃性がないそのボキャブラリーは、不思議とサブカルの匂いがした。その会話の振る舞いをとても気に入っていたし、僕のことを「きみ」と呼ぶことが僕は好きだった。ゆり子がそう呼

ぶたびに、僕の胸は甘く締め付けられた。
「一緒にいれてとっても幸せよ。きみの優しい顔を見ると、わたしは幸せを感じるの」
フェンスに乗せた腕に頬を置きながら川を見ていたゆり子は、顔だけを僕に向けるとそう言った。ゆり子は今まで誰も触れてくれなかった心の奥を、ゆり子は優しく包むように触れる。けれど僕はそれをどう受け止めていいかわからなかった。
「幸せ……って一体なんなんだろう」
「うん……。きみのその一生懸命生きている姿が、わたしはいちばん好き」
「そう……？　おれなんて、クズだから」
「そんなことないよ、きみは素敵だよ。前に、営業２課の前原さんが、受注数多く間違えて部長にこっぴどく言われてたでしょ？　あの部長柔道上がりですごい声じゃない？　会社中に聞こえてたの。その日の夜、会議室で前原さんときみが作業してるのわたし見かけたの。後で前原さんに聞いたら、あなたが『埼玉加工なら、余分な分はきっと引き取ってくれると思うから』って提案して夜中まで書類作ってたんでしょ？『いやあ、あれはほんと助かったよ』って言ってたよ」
「ああ、あれは僕が埼玉加工の営業さんと、ちょうどやりとりしてたから聞いてみただけだよ。向こうの受注のタイミングとたまたま合っただけなんだ」
「またそんなこと言ってー、きみモテるでしょ？　モテるだろこのやろー」ゆり子は赤らめた顔でそう言うと、僕の髪をわしゃわしゃとした。
「き、聞いてるのか？　だから……」
「もてないようにこうしてくれるわ、もてたらこまっちゃう」といってゆり子は話も聞かずに僕の鼻をギューギュー押すと「ブーブー」と言った。
「おれ小さい頃母親に、『そんな顔じゃ彼女もできないだろ？』って言われたよ……」僕は鼻を押されるがままの状態で言った。
「知らないの？　きみを狙ってる子いるんだよ」と悪戯げな目で僕を見るとビールをちょこんと飲んだ。
「はああ？」
「本当に気がついてないの？　なかなか鈍感なのね～」
「おれなんて、ブーブーだから」
僕は自分の手で鼻をぎゅーっと押して、苦い顔をした。
「ブーブーになっても、わたしはきみのことが好きよ」

僕は自分の鼻を押したまま、ゆり子に向けて「ブーブー」と言うと、ゆり子は「スキスキ」と言った。

フェンスに寄りかかり、川の流れを目で追うゆり子をぼーっと眺めていた。

顔を赤らめながら鼻歌を歌っていたゆり子は、手すりの上に置いた僕のビールの缶に手を伸ばすと、左右に揺らした。

「もう一本飲むかい？」

ゆり子はそう言って、僕が返事をするまでもなく、ちょこんと部屋に入り冷蔵庫から、新しいビールを持ってきた。「ぷしっ」っとプルタブを開けると、「はいどうぞ」と言って差し出した。ゆり子は根っからの世話焼きやさんだった。それも押しつけも無くきらきらと世話を焼く。受け取った新しいビールをまじまじと眺めると、「これが幸せなのか……」と感慨に浸った。浸りきった僕の目は、瞑りながら開けるような、無様な白目となった。それを見つけたゆり子は、

「ねえ、白目、白目よっ」

そう言いながら肩をトントンと叩いた。

「え、あ」慌てて黒目を呼び戻すと、誤魔化すようにビールを飲んだ。

「ねえきみ、付き合ってから今まで3回白目になってるのよ？　そして今日で4回目！あはは。どれだけポイント溜める気なのよ、そんなに白いお皿欲しいの？　それ春のなにキャンペーン？　くくく。ねえポイントカード見せてみ」

酔いが進んだゆり子は、指を4本立てて笑いを堪えながら、肘で僕の脇腹をぐいぐいっと突いた。「ははは……」と乾いた笑いでごまかしていると、突然僕の頭の上を「いーこいーこ」と優しくなでた。その暖かい手の感触は、一瞬で僕の全身に行き渡り、心の堤防をあっけなく欠壊させた。そこからは暖かい水が激しく溢れ出てて、僕はそれを「なーん」という意味のわからない言葉で表現した。その暖かさはまるで、南国の白い砂浜のビーチで小さな波が足元を洗うような、そんな感触だった。

青い海、白い砂。頬を染めたゆり子。

僕は人生の夏休みを南国ビーチで謳歌した。

ゆり子は「ちょっと酔ったかも」と言って部屋に入ると、ラグマットの上にごろんと寝転がった。

足を投げ出したゆり子は、頬の下に両手を置き、流し目のような視線でテラスにいる僕

のことを見た。
セーターの首元からは、膨らみを連想させるような白い肌が覗いていて、僕の視線は体のラインをたどると、足元に抜けた。それを一言で説明すれば、衝動。と言えるだろう。
その衝動は、僕らを下品にした。
「おいで」
ゆり子は、顔の前で手の先をちょこんと動かすと、悪戯げに僕を誘った。
「よ、よーし、じゃあおまえにもポイント押しちゃおうかな」お、押すぞ。へへ」
そう言いながら僕は、ベルトを外すようなそぶりでにじり寄った。
「やめて、そのポイント押さないで、押さないでー、あははー」
ゆり子は笑いながらベッドに逃げ込むと、背中を見せながら寝転がった。
「べ、ベッド……」ピンク色の小鳥が僕に囁いた。
その囁きに気を取られ、追いかけようとした足元がもつれた。そのままよろけると、背中を見せるゆり子に「ドサッ」と覆い被さってしまった。その瞬間僕は怯み、すぐに体を離そうとすると、ゆり子は僕の手を掴んだ。僕の心臓は一瞬で、ハーレーダビッドソンのように鼓動した。
ゆり子は手を掴んだまま動かない。僕は頭の中は、一瞬で無数の言葉で埋め尽くされた。
僕が選んだ言葉は「……い、いいの？」だった。
ゆり子はそれに応えるように僕の手を引き寄せると、僕とゆり子の身体はシーツの擦れる音とともに弓なりに重なった。僕は掴まれた手をそのままゆり子の体に深く忍ばせると、僕とゆり子の身体は強く密着した。首筋から、甘いゆり子の体の香りが漂うと同時に、あたたかな体温が伝わってきた。
「ねえ、腰に当たってるよ……、きみのすごいポイン、ト。お皿、貰えちゃうね」とゆり子は恥ずかしそうに言った。
僕のハーレーダビッドソンは、レッドゾーンへと振り切れた。
「じゃあ、ゆり子のお皿、貰おう、かな……？」
ゆり子の耳元で、愛のささやき……、ではなく、「ヤマザキ愛のパン祭り」をささやいた。ゆり子は小さく頷くと、「お皿、あげるね」と言った。幾つかの鼓動を数えたあと、僕はゆっくりと覆いかぶさり、それに合わせてゆり子も僕に顔を向けた。そして僕らはそっとキスをした。その日僕とゆり子は、唇でお互いのすべてに優しく触れあいながら、小

さなベッドで朝まで眠った。
僕のチェリーブロッサムは、華やかに青く解放され、自由に咲き誇った。ゆり子は僕のすべてを受け入れた。次の日も僕らは日が暮れるまで、小さな花の咲く、森の奥の木々の間で愛し合った。
まるで眠りから覚めた月の印がある熊のように、体中に草や花を付けながら転がり、木漏れ日を浴び春をよろこんだ。

＊

２Ｋの小さなアパートの実家で母と二人きりで暮らしていた頃、母は僕が引っ越すことに反対だった。
それは「寂しい」とか「僕のことが心配」などということではなく、母が僕を出したくない理由は、毎月入れる食費としての３万円がなくなるということ、ただそれだけだった。それは直接言われたので確かだった。
「家を出てもお金は渡すから」と言う理由で母を説得し、家を出た。実際食費と言いながらも、母は僕に関係なく、１人で作って１人で食べていた。
そんな母のそばではいつだって孤独だった。僕は心の奥の感情に目を向けることもなく、これが当たり前だ。と蓋をして生きるしか方法がなかった。僕の心の中のブラックボックスには、そうして孤独が埋め尽くされていった。
「お金は渡すから」そう言うと母はそれ以上は何も言わなかった。毎月お金を渡しても「ありがとう」などと言われることなどなく、むしろ少ない金額に不満な顔を見せた。機嫌が悪い時は「これだけ？」と露骨に言った。
しかし僕は家を出てまでお金を渡さなければならないことよりも、単純に母と離れて暮らせることの方がが嬉しかったのかもしれない。
久しぶりに実家に戻ると、僕の荷物は母にとって「要らないもの」としてベランダに積み上げられていた。ベランダの荷物を見た僕は「なにこれ？」とだけ母に言った記憶があるが、その先は全く覚えていない。母にはまるで感情がないかのようだったが、僕も自分の感情がわからなかった。

ある日母にゆり子のことを伝えた。僕はそれでも自分に彼女ができたことを、親に報告するという「喜び」があった。しかし「今つき合ってる子がいるから」と言うと母は少しため息まじりに、「なんで？　結婚でもするの？　お金なんか無いよ……」と面倒くさそうに言った。母は僕にできた彼女のことを厄介なこと。として処理をしたようだった。

二人は相変わらず、平日はいつものコーヒーショップでおしゃべりをした。

ゆり子が待つ日もあれば、僕が待つ日もあった。

たまにはゆり子の仕事が終わらなくて、1人でコーヒーを飲んで帰る日もあって、そんなときは胸の奥がちくりと痛んだ。

週末、僕の部屋に来る度に「ご飯、作ろうか？」と言うゆり子に、「うーん……、ご飯は適当に買って食べようよ」と僕が言うと「そうね」と笑顔で答えた。そうして僕らはいつもお惣菜やらテイクアウトなんかを買い、ビールで乾杯をした。

ある日二人で雑誌を読んでいると、揚げ物の特集が大々的に特集されていた。

和風から洋風、韓国風なんかも載っていた。見るからにさくさく感やふんわり感が伝わってきて、ぱかっと二つに切られた唐揚げからは、湯気まで写っていた。

「サクッてるねえ、うまそー！」と僕が言うと、ゆり子は、

「作ってあげようか？　ねえ？」とにじり寄って来た。

「ほんと？」とどちらでもいいような返事をすると、彼女の目は一段と輝いた。その目を見ると、彼女のことを愛しく思えたが、しかしベッドで過ご過ごす時間が減ることが惜しく思えた……。

ある日ゆり子は、雑誌に載っていたような唐揚げを作る。と言い、両手にスーパーの袋を下げて家にやってきた。

「買い物をして家に来る所から手料理は始まっているのよ、きみはおとなしく家で待っていなさい」という彼女らしい根性的な理論で武装し、僕はその指令通り家で待つことになっていた。

ゆり子は手際良く冷蔵庫に食材を入れると、料理のセッティングをはじめた。もちろんビールも冷蔵庫に並べられた。ゆり子は台所で、捩り鉢巻きをが見えてきそうなほど格闘していて、声もかけづらかった。

お腹も空いていたが、まだまだ完成は遠そうだった。それよりもまずはビールが飲みたかったが、「ゆり子が買ってきたビールだしな……」と自分からは言いづらかった。

僕らは会えばいつも乾杯をした。予定が合えば居酒屋なんかにも行ったし、二人で飲むビールは心の底から僕に安心をもたらした。

僕らは二人並べばひたすらにおしゃべりをした。レースのことだったり、金属加工の話だったり。とても甘い恋人同士の内容ではなかったが、僕らはいつでも会話を楽しんだ。相性がいい。そう思っていたが、それはゆり子が僕の話の聴き方がうまかっただけの話だった。

冷蔵庫には4本の缶ビールが入っていて、僕らがいつもの乾杯をするには十分な量だった。その銘柄もEBISUだとかGUIINESSなどの高級ビールだったから、それを見るだけでも今日の料理の本気度が伝わった。

ゆり子はまだ台所で必死だった。

僕は表情を少しずつ曇らせ、料理を作るのが遅くなるなら「先に飲んでる？」って聞くべきでしょ？　とイライラとした。

ようやくテーブルに食事が並び始めたが、それを見て僕は「ぎょ」っとした。お味噌汁がまず先にでてきた。「お味噌汁が先に出たら冷めちゃうじゃんかよ……」僕は眉間にしわを寄せながら不満を募らせた。その思いはすぐにゆり子に伝わった。ゆり子のほうも、なかなかうまく揚がらない料理に、珍しく少し機嫌が悪そうだった。

僕らはせっかくの食卓を無言で食べた。僕のイライラは相手にぶつかって壁に跳ね返り、角度を変えると鉄の玉となり、僕の頭の後ろのやや低めを奇麗にヒットした。

「痛っ、痛いじゃないか！」僕は荒げた声を出した。とうとう妄想と現実の境目すらなくした。

「何が」ゆり子は不機嫌にそうに答えた。

僕が放つ言葉は、もはや腐ったチンピラレベルの言いがかりだった。

「このみそ汁ぬるいよ」

「そお……」ゆり子の返事はさらに不機嫌になった。

「最初に出したらぬるくなるに決まってるじゃん」

「だめなの？」

イライラするゆり子の言葉に僕は怯んだ……。

「ぬるいみそ汁なんかみそ汁じゃない。なんでそんなにイライラしてるの！」

僕は声を震わせながら荒げた。イライラしてるのは他の誰でもない「自分」だった。
「してないってばっ！」
「揚げ物がうまく揚がらなかったからって八つ当たりするなよっ！」
腐ったチンピラは、前代未聞の言いがかりを浴びせた。
確かにゆり子は揚げ物に悪戦苦闘していた。技術者であるゆり子は完璧な仕上がりを求めていたのだろう。しかしゆり子は笑顔で料理をテーブルに並べていた。もはや僕の言いがかりは、見知らぬ人に「目が合っただろ」と言いがかりをつけて始まる、一方的なストリートファイトのようだった。
通行人だったゆり子の目の奥は、ただただ怯えていた。お互いのビールの泡はすでに消えていた。
「ごめんなさい……」
笑顔の消えたゆり子を初めて見た。
ゆり子は箸を置き、両手を膝の上に乗せながら目を潤ませていた。
僕のイライラは収まらず、口元だけの笑いを浮かべながら黙って台所へ行き、自分の分のみそ汁だけを鍋に戻して温め直した。
そして部屋にいるゆり子に聞こえるように、「あーぁ」と言った。
僕はゆり子の大きな心の器の中で、やりたい放題のルール無用の悪党だった。
二人しかいない密室では、誰も僕に反則負けのゴングを鳴らしてはくれなかった。
ゆり子は無表情で立ち上がると、そのまま荷物を持って静かに玄関に向かった。それを無視するかのように、僕は一人で温め直した味噌汁をすすっていた。一度だけ振り向いたゆり子と目がうと、そのまま何も言わずに出て行った。
僕は何も考えられず、ただただ味噌汁をすすり、そして飲み終わると「カチャ」と箸を置いた。ゆり子の帰り際の表情を思い返すと、足元からじわじわと不安がやってきた。ゆり子のいなくなったこの部屋の空気は、僕に息をすることを許さなかった。僕はテーブルに肘をつきながら、それに逆らうように必死に呼吸をした。
その苦しさに耐えられなくなると、部屋を飛び出しゆり子のあとを追った。ゆり子は帰り道の途中で、最終バスも終わったバス停のベンチに座っていた。
小走りで駆け寄って行くと、ゆり子は静かに泣いていた。僕は「ごめん……」と小さな声で謝り、ゆり子の手を取ると一緒に部屋へと戻った。そのままベッドへ連れて行くと、僕はゆり子の素肌に手を滑り込ませた。ゆり子は何も言わず、僕のすることにただ応え

た。片付けもしない部屋の中で、僕は今まで感じたこともないような、遠い距離を感じた。僕らはそのまま、抱き合いながら朝まで眠った。

次の日の朝、目を覚ますととすでに、部屋はきれいに片付けられていた。ゆり子はいつも通りの笑顔になっていた。

「おはよう、ごはん出来てるよ。起きたらお味噌汁温めるね」とゆり子は言った。

＊

ゆり子とのつき合いもちょうど1年になろうとしていた。

僕の愛情への渇望は、ますますゆり子をコントロールしようと必死になった。僕のことだけを考えてほしい、僕の思うように関心を向けてほしい、僕の思う通りに接してほしい。要求は日を増すごとに、針の穴を通すような精度を必要とさせていった。

ゆり子はいつも笑顔で僕を安心させようと奮闘し、喧嘩になっても二度と自分から部屋を出るようなことはしなかった。そしてどんな時も僕の味方だった。僕の興味のある物を心から楽しみ、僕が興味のある人と心から楽しんだ。そしてゆり子が興味のあることを、優しく丁寧に僕に伝えた。

合わせて欲しいことに合わせてもらえると、僕は途端に機嫌を良くし、「好きだよー」などと軽く言い、思い通りに合わせてもらえないと、途端に不機嫌になった。

ゆり子が思い通りに接してくれるほど僕の苦しみは大きくなった。僕はそんなねじれた心に気がつくこともできず、自分が被害者だと信じて疑わなかった。僕の心のひずみは、素晴らしい恋人との風景もギリギリとねじ曲げた。　しかしどこかで分かってもいた。この苦しさの原因は、幾重にも重い蓋をかぶせ、胸の奥にいる小さい自分の「声」を、聞こえないようにしていたからだ。その声が聞こえないということは、コンパスなしで荒れ狂う大海原を航海する、難破船と同じだった。

ゆり子は相変わらず、二人に何があろうと、きらきらと子鹿のような目で僕を見た。ゆり子は子鹿の「目」で、僕は子鹿のがくがくの「膝」だった。類い稀な「子鹿」の組み合わせの二人だった。

ゆり子は僕と一緒にいるのがとても楽しそうだったが、最近の僕は、楽しそうな彼女を

見ても心をざわつかせていた。常にゆり子への、順風満帆な人生への嫉妬のスイッチをオフにできなかったし、何でも僕に合わせてくれるゆり子を見ていると、自分の気持ちが無いのかとイライラとした。

彼女は忙殺されるほどの忙しさにも関わらず、つきあい始めた時から貴重な休みの予定は、必ず僕の予定を聞いてから決めていた。僕はいつものように当たり前に、「この17日の日曜日は、たかちゃんと彼女のりえちゃんが遊びに来るから、ご飯食べるんだ」と僕が言うと、「おっけー、17日の日曜ね。そこ空けておくわ。たのしみね」とゆり子はいつものように明るく弾むような声で言った。

「そうだね」

僕は当たり前かのように、平坦に答えた。

約束の日曜日、僕とゆり子はたかちゃんたちを迎えに部屋を出た。ゆり子はいつものようにニコニコと手を差し出して、それを僕が繋いだ。僕らは、それが当たり前になっていた。

いつからか僕は、ゆり子と手をつなぐことに興味を失っていた。だから何かに付けてはぐらかしていた。そんな僕の振る舞いに、ゆり子は一度も文句は言わなかった。ゆり子は自分がしたいことはするし、自分の望んだようにしてくれないときにも、不満をもつなんてことはなかった。

要は「察してほしい」という気持ちを持たない、健全な心を持っていた。僕は真逆の「察してほしい」の固まりで、そしてそれが正しいと信じて疑わなかった。

僕はこのとき、ある重大なことをゆり子に伝えようとしていた。

たかちゃんは僕の2歳年下で、ある音楽のイベントで知り合った。そして僕にインドへの興味を抱かせてくれた張本人でもあった。僕らは二つの県を挟んで暮らしていたから、お互いの予定をのんびりと合わせたりしていると、年に数度会うのがやっとだった。

たかちゃんはミュージシャンとしてとても繊細で美しい曲を作り、それを世界へと発信していた。その実力は世界中から声がかかるほどだった。たかちゃんの音楽は、空がどこまでも青く澄んだ夏の日にとてもよく似合っていた。「しゃれオツだけじゃ食べれないよ」がたかちゃんの口癖で、「しゃれオツ」という表現は、自分の音楽を「おしゃれ」とカテゴライズされていることへの揶揄だった。

たかちゃんの目指す音楽はクラシックで、本気で現代のモーツァルトを再現すると言っていた。

でも本人の佇まいは、さすがミュージシャンという出で立ちで、Facebookのプロフィール写真なんかは、どこから見ても極め極めにキマッていた。けれどたかちゃんの一番の魅力は、底抜けな優しさとユーモアだった。僕はたかちゃんとだったら何年でも大笑いで話し続けられる自信があった。

いつも僕らは、ファミレスでだらだらとくだらない会話をした。箸が転がっても笑うんじゃないかというくらい「あごが取れる、取れる」と言って、店内で笑いを堪えるのが大変だった。「ちょっとあご探しに行ってくる」が、たかちゃんがトイレに行くときにいつも言う台詞だった。おしゃれだけではなく、「シャレ」も利いていた。そんな唯一の親友だった。

ゆり子とつき合いはじめの頃、恋愛にずぶずぶと没頭しすぎて、「たかちゃん、おれゆり子のことが好きすぎて、考えただけで心が震えてしかたないよ」なんて気障なことを言っていた。「お、恋の振るえるマナーモードだね！　恋のマナー最高だね！」と、僕ののろけも上手く乗りこなすたかちゃんだった。

たかちゃんが来ることをゆり子もとても楽しみにしていた。ゆり子は僕の友達というだけで、その人も愛する対象となった。

「わたしは高山くんと一緒に、高山くんの友達と一緒にいる時間が何よりも好きよ」と僕に言ったことがあった。しかし僕は、ゆり子は二人でいることがつまらないのかと、少しふて腐れた。

「ねえなに、どこがスイッチだった？　わたしどのスイッチ押したかな？　ねえ？」

ゆり子はふて腐れる僕の心境をさも上手く乗りこなしているように思えたが、ずいぶん後になって、山のように心理学の本を読んでいることを知った。だがそれは僕のためだけではなかった。けれど僕自身は、その歪んだ心をあまりにも持て余しすぎて、全く気持ちのコントロールができなくなっていた。

「モロ出し！　見えてる！　本音見えてる！　ちょっとモザイク取ってくるー」

誰が見ても不機嫌だろう僕の表情を見て、茶化そうとしてくれたのだろうが、見透かされているようで少し不愉快だった。ゆり子は僕を和まそうと、ちら、ちら、っと胸元を肌けさせながらからかった。白い肌と下着が見え隠れする小芝居に、僕の機嫌などを無視し

た欲望がぴょこんと飛び出し、背中を蹴った。その勢いでゆり子ににじり寄ろうとしたところで、おでこをぴしゃっと叩かれた。ゆり子は何枚も上手だった。そして僕の不機嫌も綺麗に吹き飛んだ。

彼女は僕の心のメカニズムをきちんと把握していた。その上で丁寧に接してくれていたから、なんとか心もとない僕の自尊心を維持できていたのかもしれない。そうでなければこんな小さな器の男、何をするのかわかったものではない。

ゆり子の人を助けたいという深い愛情が、それをさせていたのかもしれない。だがそれだけではなく、僕の心のことについて必死に学んでいた。彼女の愛情はどこまでも深かった。それなのに僕は自分の不幸を武器にして、とんでもない間違いを犯して行く。けれどそれは、僕の人生を大きく前に進ませる洗礼でもあった。僕は、自分の心の箱の厳重な蓋を破ろうとしていた。

駅に着いてしばらくすると、快速電車がホームに入って来た。改札で待っていると、ホームに上がる階段から、たかちゃんと恋人のりえちゃんが現れた。二人は大きく手を振りながら、「うえーい！　みなみちゃーん！　ゆりちゃーん！」と僕らのいる改札に向かって走り寄ってくると、陽気にハイタッチをした。

そう、僕の名前は「みなみ」ひらがなでみ・な・み。高山みなみが僕の名前だった。

前にたかちゃんとランチミーティングをしたときに、「フライト」という旅行雑誌をお土産に持って来てくれた。9月号と書かれていたその表紙には、大きなゴシック体で「Dear INDIA」とデザインされてあった。

「鹿？　鹿とインディアンの話か？」インドの民族衣装を着た壮麗な女性が、頭に大きな樽を担いでいる写真なのに「インド」という発想を全く持てず、本気でそう聞き返した。

「なんだ？　鹿とインディアンが戦うのか?!　なあたかちゃん教えてくれ！」と暴走し、目の前のたかちゃんに詰め寄った。

僕の振る舞いは、天真爛漫というよりも、ただのめんどくさい男だった。たかちゃんは「落ち着いてってば」と笑いながら僕をなだめたが、僕が「何で？　何で？」とうるさかったのか、「もうーインドインド！　なますてーのインドよっ！」とやけに答えると、たまたまたその店にいたインド人が「ナマステ〜」と答えたのだ。

僕らは何が起きたんかわからずに「は、はあ……」と返すのが精一杯。そのインド人が店を出ると、笑いすぎて店員に怒られたんだ。その行を思い出す度に、二人で笑い転げた。その日を切っ掛けに、僕はインドを夢見るようになっていった。

たかちゃんに貰ったその「フライト」を毎日のように熟読した。それから僕はインドに心酔するようになり、色々な本を読んだ。ゆり子もあれもこれもと、インド関連の本をお土産に持って来た。

今でも手元にはその「フライト」の9月号があり、今日も部屋ではたかちゃんとその雑誌の話題で盛り上がった。二人で鹿とインディアンの顛末を思い返してはお腹を抱えて笑っていた。それを見たゆり子は「なに、なに？」と目を輝かせてそのエピソードを聞き出そうとしたが、僕は床に転がってばたばたと揺れ、船に釣り上げられた「マグロ」の物まねをしてかく乱させた。大成功だった。しかし僕がトイレに行っている間にすべてがばらされていた。僕は本気で恥ずかしくて、立ったまま得意の白目で棒立ちになり、知らんぷりをした。

たかちゃんは、来年に彼女と2度目のインド旅行を目論んでいると言った。彼女のりえちゃんと肘を張り、胸の前で手を合わせながら首をかくかくと動かし、僕らの目の前でぎゃっきゃとはしゃいでいた。

彼女のりえちゃんはの髪は、つるんとまっすぐなロングヘアー。ゆり子に負けない美人だった。

たかちゃんはりえちゃんのことを愛着を込めて「キューちゃん」と呼んでいた。あまりにも髪のキューティクルが奇麗だったからだ。しかしりえちゃんはそう呼ばれることが嫌いだったみたいで、それ本気でしょ？　と思うくらい、いつもたかちゃんの胸の辺りをグーで正拳突きをした。りえちゃんは空手初段だったらしい。

たかちゃんはその度にわりとリアルに「ぐぇ」と小さいうめきを上げた。僕はそのやり取りがとても好きで、いつもそれを見て「えげつな〜」と言ってはゲラゲラと笑った。

ゆり子とりえちゃんは同い年ということもあって、彼女達は僕ら抜きで会うこともあった。どんな会話がやりとりされているかなんて、恐ろしくてとても聞けなかった。すでに僕の不健全さハプニングは筒抜けだっただろう。女の世間話に、ルールは無用だ！

たかちゃんと彼女は、今では毎週のようにヨガの教室へ通っていると言った。僕はヨガと言えば頭にターバンを巻いて無茶苦茶なポーズを取る修行者たち。程度の知識しかなかった。「ヨガって色んな解釈が世界中にあると思うけど、おれが思うヨガって自分自身の

観察なんだよ」とたかちゃんは言っていたが、それとあのポーズはどう関係があるんだろう……。と僕にはあまりピンとは来なかった。しかし自分自身の観察という言葉は、何か自分の「未来」のような感覚を感じた。

インドで世界的に有名な川と言えばもちろんガンジス川だろう。

ガンジス最大のダシャーシュワメード・ガートは、巡礼者や観光客でごったがえす、世界中で名の通ったメッカとなっている。雑誌「フライト」には、大きな写真と共にガンジス川の記事がたくさん載っていた。僕はページを開く度に、食い入るようにそれを読んだ。

「たかちゃん、ガンガーってすごいな」

ヒンディー語でガンジスのことをガンガーと呼ぶ。たかちゃんがいつからかそう呼ぶようになり、僕も合わせてそう呼んだ。

「でしょ？　実際あの場所に立ったらもう何も考えられないよ。立った瞬間自分がインド人だ。って錯覚するよ。ガンガーのガートに座ると、ただただ川の流れの小さな音に耳を澄ませるのが精一杯だったよ」

たかちゃんは一度りえちゃんとインドを旅している。心が満たされる素晴らしいた旅だったようだ。いつもインドの話しをする時、目を瞑ってロマンティックに話をした。話すとしばらく無口になって何か考えたりする。よほどインドが心に染みたのだ。それはとても羨ましく思えた。僕の「インドが好き」は、何か大きなものを感じ始めてはいたが、まだまだただのミーハーだったからだ。

ゆり子とりえちゃんは普段よりも少しお酒を飲み過ぎたみたいで、二人で僕のベッドで重なるように寝てしまった。

「みなみちゃん、ゆりちゃん良い子だね」

「あ、うん……」

僕は曖昧な相づちを打った。

「みなみちゃんはこの先ゆりちゃんと結婚とか考えてるの？」

「どうだろう……」

と僕の表情が少しだけ固くなったのを感じたのか、たかちゃんはそれ以上は聞かなかった。

終電時間もぼちぼち近づいて来たころ、たかちゃんはりえちゃんの耳元で、

「ねえりえちゃん、そろそろ帰ろうか？」

優しく肩を揺らしながら言った。
たかちゃんは本当にりえちゃんのことが好きなんだな。そう思うと、また羨ましく思えた。時計はもう夜の１０時を過ぎていた。
外では名前も知らない虫たちが、ちりんちりんと鳴いていた。

１５分ほどの距離の駅まで、４人で一緒に歩いた。僕とたかちゃん、ゆり子とりえちゃん、なんとなくそんな組み合わになり、二組になって狭い歩道を歩いた。僕とたかちゃんはあまり会話もせず静かに歩いていた。後ろでは、ゆり子とりえちゃんがまだ楽しそうにきゃっきゃとおしゃべりをしていた。僕は振り返りちらっとゆり子を見て、またすぐに前を向いた。
駅に着き、僕らは「うえーい」だとか「いえーい」だとか言いながら「またねー」とノリ良く改札で別れた。改札のホームの見える窓に行って、二人が車両に入っていくまで僕とゆり子は手を振った。走り出してしばらくすると、電車は暗闇に吸い込まれ、テールランプだけが浮き上がっていった。そのテールランプも闇に吸い込まれて見えなくなるまで二人でその光景をじっと見つめた。電車を吸い込んだ暗闇は、今の僕の存在までも吸い込みそうな、黒くて濃い闇だった。
僕はゆり子のほうを見た。
「いこうよ」
ゆり子はそう言って、少し真面目な表情で僕を促すように歩かせると、そのうしろを自分も歩き出した。背中からはゆり子の異変が感じられた。というより、ゆり子が僕の異変を感じ取っていた。
改札を出て大きなロータリーを渡り、いつもの細い通りに出ると、ゆっくりと歩きながら僕の部屋に向かった。
帰り道、僕らは何も喋らなかった。ゆり子はずっと僕の後ろを歩いていた。そして僕は徐々に歩幅を狭め、歩きながらゆり子の隣に並ぶと、こう言った。
「好きな子ができたんだ……」
ゆり子は振り向きもせず、そのまま黙って僕の隣を歩きつづけた。その一歩一歩がとても長い時間に感じられた。
「……誰？」
ゆり子は前を向いて歩いたまま、小さな声でそう言った。

「ぼ、僕が昔つき合ってた朱里という子……の話し、覚えてる？　その子が……」
僕がそう言いかけていると、ゆり子は静かに立ち止まった。それを見た僕は慌てて立ち止り、ゆり子と向き合った。ゆり子はしばらく僕の方を睨むように見つめると、みるみる目に涙が浮かぶのが見えた。その涙はこぼれず大きな留まりとなって奇麗に澄んだ。街灯の明かりがその浮かんだ涙の中を照らすと、キラリと光った。とても悲しく美しい輝きで、その涙にはゆり子の魂のすべてが詰め込まれているような気がした。ゆり子が静かに目を閉じると、その涙は大きな雫となって流れ落ちた。その瞬間、人目もはばからず声を出して泣いた。
僕は何も言えず、ただただ見つめることしかできなかった……。遠くで、救急車のサイレンが小さな音で鳴っていた。それは、肌寒い秋の終わりの頃の夜だった。

＊

１９歳のとき、生まれて初めての彼女ができた。その頃僕は、ミニバイクが走る小さなサーキットでアルバイトをしていた。そこには家族連れでサーキット走行を楽しむ人たちが大勢訪れていた。
その家族の中で、一組だけ気になる女の子ライダーがいた。その子は朱里（あかり）と言って、僕より３歳年下の高校生だった。彼女のスムーズで無駄のない美しいなライディングフォームとテクニックは、すでに熟練の域に達していた。
男性ライダーでも彼女より速く走るのはそう簡単な話ではなかった。
レーシングスーツを脱ぐとまだまだあどけない高校生で、その日は学校の用事のあとにサーキットに来たらしく、めずらしく制服姿だった。膝よりもだいぶ短いスカートからは、しなやかですらっとしたした足が延びていて、足元には紺色のラルフローレンのソックスがピタリと履かれていた。
朱里はポケットバイクの世界では名を馳せた女子ライダーで、中学に進学すると５０ｃｃのミニバイクを与えられていた。背も高かったから、体格的にももうポケットバイクでは無理があった。
今ではミニバイクレースの世界でも、その速さと見た目の端麗さもあり、一目置かれる

女性ライダーだった。その容姿からは想像もつかない技術の高いライディングとスピードで、日本各地のレースで連戦連勝を繰り返していた。

朱里は一重で切れ長の目をしていて、一瞬怒っているようにも見える時もあったが、この歳でアジア人特有の神秘的な美しさを魅せていた。何に対しても物事をはっきりと言うし、相手の年齢なんかも気にすることもなかった。それでも不思議と人を引き寄せる魅力を放っていて、いつも人に囲まれていた。

彼女はなぜか僕にとても懐いていて、走行が終わると僕が座る受付の前に来てはよく話しかけられた。僕は彼女ほどのタイムは出せなかったが、ライディングの観察の目は優れていた。僕のアドバイス通りに走行ラインを調整すると、大抵のライダーはタイムを上げたし、マシンのセッティングについても定評があった。

朱里の父も昔はライダーで、かなりの腕前だとオーナーから聞いたことがあった。僕はいつも「たまには走ってくださいよ」と言っても、昔、筑波サーキットで両足を折る大けがをしてからは一切乗ってはいないらしく、「むりむりっ」と言ってははぐらかした。それでも朱里がバイクを乗りたいと言い出したときも止めなかった。

「自由にさせてやりたいんだ」が彼女の父の口癖だった。けれど彼女が危ない走りをした時は、まわりが引くほどに厳しく叱った。

朱里がミニバイクに乗りたての頃、走りながら他のマシンのテールを手で掴んでふざけていた。それを見つけた朱里のお父さんは、ヘルメットの上からとはいえ、本気で何度も殴っていた。朱里の父の仲間のライダーが、同じような行為で死亡事故を起こしたことがあったようだ。

朱里の父は、僕にも優しく厳しくアドバイスをくれる良き先輩ライダーだった。

「娘に手を出すなよ」が朱里の父のもう一つの口癖だったが、僕はその忠告を破ることとなる。

サーキットのオーナーが、身近な人を集めて食事会をするというのがこの職場の習わしだった。いつも集まりやすいこのサーキットを会場にして、ケータリング料理なんかでパーティーをした。

食事会当日、僕は会場設営やら物資の購入搬入に奔走していた。スタッフが足りなくて、今回は朱里の家族や常連達が朝から準備に加わっていた。

大きなワンボックスのハイエースに乗って、朱里が父とともに現れた。荷台にはいつも

なら2台のマシンが乗っているはずだが、今回は屋外用のテーブルやら椅子やらで満載になっていた。
「おはようございまーす」
運転席にいる朱里の父に挨拶をすると、今日の予定なんかの話をした。すると助手席に乗っていた朱里も運転席側にやってきた。
「いえいっ」
と朱里とハイタッチをする。なんとなくのいつもの挨拶だったが、朱里の手のひらに触れる度にいつもドキッとした。
「誰かと一緒に酒屋まで飲み物取りに行って来てくれないかな？　けっこう量があるからさ」
荷物を会場のピットボックスまで運んでいると、オーナーに買い出しを頼まれた。
「りょうかいです！」と僕は小気味よく返事をすると、朱里を見た。
「まじですか……」朱里の声のトーンを低かったが、なんだかにやけていた。
サーキットの軽トラックに乗り、山から降りてすぐの小さな酒屋に、ビールやらジュースやらを取りに行った。
「あらお似合いね」
入口を入った途端、酒屋の女将さんはそう言ってウインクをした。
「そ、そお？」
「……」
朱里は後ろで無表情で立っていた。
「わらっとけよ」と言うと、「ふふふ」と朱里は照れ臭そうに笑った。
サーキットに戻るとまだ準備も半ばだったが、ピット前はすでに馴染みの人たちで盛り上がっていた。ビールの箱を抱えて戻る僕らを見たおじさん連中は、早く来いと手招きをした。
おじさん連中は、氷の詰まったクーラーボックスにビールをどかどかと入れ、その側からもう飲み始めている。お調子者グループのライダー達は、すでにビールかけなんか始めていて、全身をびしょびしょに濡らしていた。
一通りの準備が終わると、いつも通り受付に来て、いつも通りの席に座った。僕は人ごみやら人の盛り上がりの場が苦手だった。なので、いつもの落ち着く場所で、アルミの皿に乗った焼きそばとウーロン茶で1人で宴を楽しんだ。

僕はこのサーキットにいると、一人でいても寂しいとかの気持ちは湧かなかった。ここに走りに来るライダー達は、みな広い心を自由に謳歌する人種の集まりだったので、サーキットはいつも個性を尊重する空気に満ちていた。オーナーも「社会には全く馴染めない」といつも言っている風来坊な性格だったから、仕事さえしていれば何も言わなかった。

しばらくして食べる物もなくなったから、その辺にあった雑誌をパラパラとめくった。外では相変わらずのどんちゃん騒ぎで、みんな楽しそうだった。

窓の外から「トントン」というノックが聞こえた。覗いてみると朱里がいた。

「みなみさーん、1人ですか？」

「そうー」と答えると、朱里はスタッフ側の扉から入ってきて、僕の宴の痕跡をジロジロと見た。

「寂しっ！」

「いいんだよ、おれ、やっぱりああいうの苦手でさ」

「あかりもです！」と言って朱里は敬礼のポーズをとっておどけた。

「おまえも、かーい」

そう言うと、朱里は「あははは」と笑った。そして、「これ食べよう」と言って、山盛りの料理を持ってきた。ウインナーやら野菜やら焼き鳥などが不恰好に守られていた。

「え？　これ朱里が盛ったの……？」

「わるいー？」

「いやいや悪くないけどこれ……」

「じゃあ食べなくていい、あかりが全部食べるから。もう」

「うそうそ、食べる食べるよー」と言うと、朱里は「はい」と言って、照れ臭そうにお皿を僕の方に寄せた。そのはにかんだような表情はまるで、森の泉から現れた女子高生アイドル。などというお粗末な表現しかできないほど、眩しくきらめいていた。

食べ物を二人でつつきながら、バイクのことやら学校のことなんかのおしゃべりをした。

「来月の筑波選手権の開幕、出るんでしょ？」と僕は言った。

「うん、出るよ。3ヶ月ぶりの本コースだからちょっと気合い入ってるけどね」

「エスハチだよね？」――Ｓ８とは、１２５ccのロードレース用マシンに、２サイクル８０ccのモトクロッサーエンジンを乗せ換えたマシンで争う、Ｓ８０（エスハチジュウ）と

いうクラス。ミニバイクコースでは最強のハイパワーマシンで、そのパワーは誰もが扱える代物ではなく、純粋なレーシングマシンというカテゴリーだった。このクラスはその高性能からも、大型サーキットでもレースが開催されていた――

「みなみさんそれちょっと聞いてよ」

「どうした？」

「お父さんバカだからさ、勝手にどっかから型落ちのＲＳ１２５を買って来てさ、今回はそれで出ろって言うのよ。『ビリでも良いんだから』なんて言ってさ」

「えーまじか?!」僕はそのマシンのパワーの恐ろしさを知っているだけに本気で驚いた。

「ほんと無責任でしょっ？　でさ、そのＲＳ、慣らしもしてない２年落ちの未使用車なんだけど、見たら前後にオーリンズ入ってんの、お父さんどこにそんなお金があったのかしら。きっとあれ借金よ。ほんとにさあ、あんな気難しいオーリンズなんて、時間ないのにどうセッティングするっていうのよ。ねえ、みなみさん？」

怪訝な表情で朱里は話していたが、その目は十分気力に満ちていた。

ＲＳ１２５と云う、公道では乗ることが許されない純粋なレーシングマシンは、ミニバイクレーサーだったら誰もが憧れるマシンだった。

しかも前後のサスペンションには、高価で高性能なオーリンズのサスペンションまでもが装着されていると言う。まともに買えば、ＲＳ１２５の車体そのものの値段とそう変わりはないはずだった。夢のようなマシンに乗れる。嬉しくないはずが無かった。

「それにもうエントリーもしちゃってて、『朱里っ、おまえのはじめての１２５のレースのゼッケンは８番だ！　末広がりだ、縁起がいいぞ。がははは』なんて言って、もうゼッケンも貼られてるのよ」

「やば、もう逃げれないな」

「そうなの」

「でもおまえ、ＲＳ乗ったことあんの？　２サイクルのガチレーサー、マジでヤバイぞ？」

「あるわけないでしょー。まぁＳ８はＲＳの車体使ってるからなんとなくはイメージつくし、コースも走り慣れたものだけど……」

「おれ一度だけここで乗ったことあるけど、あの加速は狂ってるよ……。もちろんここじゃ２速だってまともにエンジン回せないけどさ。おれあの加速はもうお腹いっぱいだよ」

「まじか……。あの羽のように軽い車体に、４３馬力のエンジンだもんね。ほんと狂って

るとしか思えないわ。正直ちょっとビビるわ。けどまあ慣れたら簡単よ。もう自棄ね。あはは」
「自棄って、おまえさあ」
「けどまあ、一番このマシンに憧れてるのは、実際はお父さんなんだけどね」
「ああ、あの怪我のこと？」
「そう。お父さんが怪我したのはあかりと同じ、筑波のＳ８だったけど、優勝できたらチームがＲＳ１２５用意してくれるって言ってくれてたみたいなの。それでお父さん予選で気合い入り過ぎちゃって、タイヤもまだ温まってないのに、最終コーナーでかなりやばいことやろうとしたらしいの。いくらお父さんが速かったからってそりゃ無茶よって言いたくなるくらいのことよ」
「なにやったの？」
筑波サーキットの最終コーナーは、単純に止まって加速するというストップ&ゴーではなく、二つのコーナーが複雑に組み合わさるような、難解な超高速複合コーナーだった。
けれども筑波攻略はこの最終コーナーにかかっていると言われていて、数多の勇猛果敢なライダー達が、タイムアップを計る為に無謀なトライを繰り返していた。朱里のお父さんもその一人のようだった……。
「あかりが聞いた話だとお父さんはさ、最終コーナー、６速全開で膝を擦りながら入るんだけど、お父さんギヤも落とさずにそのまま回ろうとしたんだって。エンジンブレーキも足らない状態だからかなりスピードも出てるし、旋回力も足らないからコースアウトするよね、普通ね。だからフロントサスを沈める為だけのブレーキで、キャスターを立てて旋回力を上げようとしたって。それでコースアウトは免れたけど、次にアクセルを開けたその瞬間、マシンのリヤタイヤがスライドを始めたらしいの、かなり長い時間よ。ギヤも落としてないからタイヤの加重が抜けてたのかもしれないけど、筑波では非力な８０ｃｃのマシンでそんなスライドするわけないのよ。だけどそれだけあり得ないスピードだったのね。普通ならそこでハイサイドでぶっ飛ぶか、滑って終わりよ。非力と言ったって最終コーナー入り口で１５０ｋｍは出てるからね。でもお父さんはそれ以上だった……。そこからお父さん無理矢理ハンドルをアウト側に抉って、なんとかイン側のライン付近までマシンを戻したらしいの。さすがお父さんよ。それでなんとか立ち上がれたけど、スピードが出すぎてるから、アウト側のゼブラの外にリアタイヤがギリギリ落ちちゃって、そりゃもうひどいクラッシュ。それでもうすべてが終わったわ。お父さん、そのクラッシュの間の

こと全部詳細に覚えてるんだって」
「え、ええ……」と僕は言葉を失った。
だが、朱里の話し方は、どこかお父さんへの尊敬も感じられた。
「普通そんなクラッシュしたら記憶が飛んでもおかしくないでしょ？　だってヘルメット割れてたらしいのよ？　信じられる？　よく生きてたわよ。マシンもお父さんもばらばらだって。なにせコンクリートウォールに沿ってそのままマシンと一緒に滑って行っちゃったんだからね。考えただけでぞっとするわ」そう言うと明かりは肩をすくませた。
「けどお父さん、酔っぱらうと笑いながらその時の様子再現するの、実況しちゃってさ。最後は写真まで見せて来て。へんなトラウマ植え付けんなよっ。っていつも蹴っ飛ばしてるわ。まったく」と言って朱里は呆れた。
「蹴っ飛ばすって……、はは。けどそれじゃぶっつけじゃん？　練習、何本走れるの？」
「通常のが２本で、うまく予約が取れれば３本かな、それと金曜日の公式練習で２本でしょ、あとは土曜の予選。で、日曜の決勝。言う通りぶっつけね。無謀……かしら？」
「いやいや、朱里ならそれだけ乗れれば予選くらい通るんじゃない？」
「予選?!　えー、それは無理よ絶対に。だって聞いたら３００台以上エントリーがあるらしいのよ?!　予選１５組だって、信じられる?!　決勝が３２台しか走れないって言うのにさ……。最低でも予選で組３位以内には入らないと決勝は無理ね、タイムで言ったらトップから１秒落ち以内かしら。厳しいわ。無理ね、むりむり」
そう言うと朱里は俯いて目を瞑りながら、軽く手のひらをひらひらと振った。その素振りがまるで、酔っ払いが「もうー飲めない」って言ってるように見えたから、
「オヤジかよっ」と小声でつぶやいた。
「まったく、オヤジにもなっちゃうわよ」
「噂は聞いてたけど、そのエントリー数……、１２５やばいな」
「そうよ全日本選手権のＧＰ１２５なんか、トップ走れたらそのまま世界ＧＰでトップ走っちゃうくらいのレベルなのよ。知ってるでしょ？　地方選手権なんかそりゃ、あっちあちの戦いよ。でもあかり、みなみさんに話してたらなんだかわくわくしてきた。自分がどこまで速く走れるか試してみたい」
そう話す朱里の目は、どこかをまっすぐに見据えた力のある視線だった。朱里は本気だ。その分僕は心配でならなかった。
「みなみさん絶対見に来てよ。グリッドのサポートお願いね。今回はプラススピードから

のエントリーだけど、でもあかりたちはパーツも人手も全部自分持ちなの。だからメカはお父さんでサポートはお母さんなんだから。ね、心配でしょ？　お母さんなんか初めて筑波サーキットに来るのよ。もう笑うしかないわね」そう言って朱里は「あはは」と軽く笑い飛ばした。

「いくよ、絶対行く！」

「うん！」

「そうだ、まずは俺に乗って練習しろっ、そうだそうだ、な？　な？！」

「なっ？　じゃないわよもう、何よそれ……、下ネタあ？　バカッ。でもみなみさんありがとう」

朱里と初めてというくらい長い間話をした。

そのあと僕らはバイクの話題ではなく、世間話なんかを延々とした。

「じゃあ、あかりもう行くね、ほら見て、お父さんが呼んでる」そう言われて窓の外を見ると、周りからビールを頭にかけられながら手招きをしている朱里のお父さんが見えた。朱里は「まったくもう……」と呆れていた。朱里が空のお皿を持ちながら「じゃっ」と言って立ち上がろうとしたそのとき、「待って」と言って引き止めた。

「なあに？」と言って朱里はお皿を持ちながら首を傾げた。

「あかりっ、あのさ、忙しいと思うけど、今度横浜でも一緒に遊び行かな、い？」

「なに突然？」

突然ではなかった。僕は前からずっと誘うタイミングを探していた。

「ほら、前に中華街行きたいって言ってたじゃん？」

「そうだっけ？」と言って明かりは

「そうだよ、ほらオーナーがすんごいうまい餃子の店があるって……」

「ああ、あれね。みなみさんの奢り？」

「え、も、もちろん！」

「ん……考えときますっ」

朱里は少しだけニコっと笑うとすぐに振り返り、扉を肩で押し開けると、そのまま出て行った。

外に出るとすぐに、「もう、お父さんのバカッ！」という声が聞こえた。

朱里のお父さんは、すでにベロベロに酔っ払っていて、服を全部脱いでいた……。

翌月、朱里のスケジュールのタイミングをぬって、僕らは横浜へ遊びに行った。シーバスに乗ったりショッピングをしたり楽しんだ。普段着の朱里は危なっかしいミニスカートで、長い足をこれでもかと世間に見せつけていた。朱里の自信にあふれるモデルのようなスタイルは、一緒にいるだけの自分も、優越感に浸れるほどだった。

その日の帰り際、山下公園を通って駅まで戻る途中、僕は朱里に、

「ね、ねえ、おれ、えっと、おれたち、つき合わ、ない……？」

としどろもどろに告白をした。

「良いですよ、付き合おうか」

さっぱりと素っ気のない返事で僕は戸惑った。だが、朱里は確かに付き合おうと言った。僕は嬉しくてふわっと体が浮かぶようだった。けれど僕はこの手で掴んだ朱里の気持ち、確かに掴んだはずなのに、どこか実体のないような感触だけが胸の奥でザラザラとしていた。

付き合ってると言っても、朱里にはなかなか会えなかった。単純にお互いの家が少し離れていたことと、花の恥じらいも吹っ飛ばしそうなほど、エネルギッシュな女子高校生を過ごしながら、毎週末のほとんどを筑波サーキットへ行っていたからだ。

僕が働くサーキットにも、朱里は練習走行に来ていたことで、ちょくちょくとは言えないまでも、会うことはできた。おかげで僕のハートの禁断症状は、ぎりぎりのラインで堪えていた。

僕らがサーキットで会った日は、そのまま僕のスクーターに乗り二人で出かけたりした。朱里のお父さんはそれは気に入らないようだったが、朱里は自分がしたいことは誰に何を言われても行動を変えないということを、お父さん自身が一番良く解っていた。以前僕と朱里がサーキットから出ようとするところを捕まえて、

「お前に何言っても無駄なのは父さん、いっちばんわかってんだけどな……」

そう言うと朱里のお父さんはどこか寂しそうだった。僕はなんだか気まずくて、二人から視線をずらした。しかし次の言葉は、

「みなみ、妊娠だけはさせんなよっ！　がははは」だった。

「す、するわけないですよっ！　もう！」

僕は顔を真っ赤にしながらムキになった。しかしそれは半分は図星だった。お父さんは

僕を見てにやりと笑うと、それ以上は何も言わなかった。
僕らはたいてい、サーキットから３０分ほどにある海岸に遊びに行った。浜辺を歩きながら、なんとなくくっついてみたり、手をつないでみたり、キスをしたりした。その海岸に行く目的は、海を見るためだけではなかった。その海岸にはいわゆるなホテルがいくつも並んでいたから、カップルが集まることで有名だった。
僕らはそんなホテルに、いつもオートバイでタンデムしたまま入っていた。朱里にいたっては制服の時さえあった。
今日も朱里は制服を着ていて、スカートはいつもよりさらに短かった。気の小さい僕はヒヤヒヤしていたが、朱里は「へいきへいき」と後ろのシートから、手のひらをひらひらと振り、そしてスカートの裾もひらひらとさせながら、僕をチェックインへと進ませた。
頭の中は欲で腫れ上がり、部屋へと上がるエレベーターに乗り込むと、朱里の手を取り後ろから抱きよせる。僕の手のひらが、制服の上からでも目立つ、胸の膨らみの中に入り込む。しっとりと手にまとわりつくような肌の感触をたどり、その先にある固くなった部分を指の先で触る。朱里は俯きながら僕の腰のあたりをつかむように撫でた。部屋に入ると朱里は自分からスルスルと制服を脱ぎ捨て、照明を消すことなく裸になった。白くて美しい肌に包まれた朱里の姿を見るたびに、絶対にこれを手離したくない。そう強く思った。
そんな付き合いがしばらく続いたが、ある頃から急に朱里がよそよそしくなったように感じていた。サーキットでいつもの海岸に誘っても、はぐらかして車で帰ったり、電話をしても、おそらくは居留守だろうというお父さんの対応を感じていた。今までも朱里の気分で態度が変わるなんていくらでもあった。しかし何か今までと違う僕への接し方は、体の一部が奪われていくような感覚を覚えさせた。

寂れた建物の地下に作られたガレージを開けると、ＦＵＡＮ社が満を持して作り上げた真っ赤なマシンが煌びやかに佇んでいる。僕はタバコを燻らせながら、その艶めかしい肢体を眺めた。指でタバコを弾き捨てながら近づき「グッ、バイブレーション」とマシンに囁くと、コックピットに乗り込んだ。リモートキーのスタートボタンを押すと、ガルウイングされたステアリングシステムが、静かに降ろされる。運転席のモニターには、制御マッピングが表示され、マシンは自動で暖気モードに入り、ヒュルルーン、ヒュルルーンと静かにモーターのコイルを温めた。

このＦＵＡＮ社のFUAN-SEKAIICHIというフラッグシップマシンは、社運をかけて世に放たれた最新型のネガティブモーターバイクだった。僕はコイルの温まったマシンのスタンド解除ボタンを押すと、後ろ向きに発進させた。そして後ろ向きのまま、猛スピードで高速道路を突っ走った。ヒュルルルというモーターのコイルの音は、僕の不安を増幅させた。そう、このFUAN-SEKAIICHIというマシンは、世界中の選りすぐりのネガティブ野郎だけに送られる、名誉毀損なモデルだった。僕は世界トップクラスのネガティブの称号を獲得し、不安の沼にヒュルルルと沈んでいった。

朱里の素っ気ない態度を目の当たりにするようになると、それに合わせるかのように僕はぎこちなくなり、話せばどもり、目が合えばまばたきが増えていった。

朱里は誰にでも分け隔てなく気さくに距離を縮める。特に男性との距離は近く、それは見た目の会話の距離だったり、少し相手に触れながら話すその仕草なんかは、ちょっとした牙の生えた小悪魔。というところだ。サーキットで、常連の坂本くんのお父さんと、バイクを挟んで楽しそうに話しをしてる朱里を見つけた。近づいてみると、一瞬僕の姿をはっきりと確認したあと、すぐに坂本くんのお父さんとの会話に戻った。そんな態度を目の前にすると、僕は何もできずに「何も用事はなかった」とごまかすのが精一杯だった。

僕が想像していたような甘いつき合いというものはあっという間に過ぎ去り、朱里のよそよそしさは日に日に増していった。常連のお客さんからも、「最近朱里ちゃんツレないんじゃないの？」と言われるほどだった。

二人で会えない日は２ヶ月以上続いていた。その間は、朱里が来ない平日のサーキットのアルバイトに熱中してみたり、部屋で太宰やハルキを読んでは、気を紛らわせていたが、心のよりどころになるはずの読書も、ページをめくっては何を読んだのかわからなくなってまたページを戻し、また同じページをめくった。

１０代の終わりかけに生まれて初めてできた彼女……。僕は気持ちのすべてを朱里へと注ぎ込んだ。僕は毎日だって会ったり話したりしたくてうずうずしていたが、朱里はどうなんだろう。会いたいのは僕だけか。僕だけだなあ……。そんなしょぼくれで膨らんだどす黒い風船が、僕の胸から次々と飛び出して、しばらく飛んだところで「パンッ、パンパンッ」と弾けた。地面にはみっともなく伸びた風船のゴミだけが散乱した。

勇気を出して受話器を持ってみたものの、その先で待ち受ける朱里のそっけない態度がありありと浮かび上がり、最後の番号を押す指は全力で拒否を……、「わっ！」気がつく

と受話器からはコール音が鳴っていた。僕の本能が勝ったのか……。
「あ、みなみさん?!」
だが、電話に出た朱里はご機嫌だった。僕の不安は一瞬で吹き飛んだ。
久しぶりの朱里との会話は弾みに弾み、干し椎茸が水を吸って元に戻るように僕の自尊心を復元させ、心の中に芳醇な出汁を染みわたらせた。完全復活の干し椎茸は勢いを見せると、棘のあるバラのような朱里と次の日曜日のデートの約束を手に入れた。電話を切るとすぐに、夢中で干し椎茸とバラの料理のレシピを検索した。しかしそこに表示された検索結果０の文字が、僕に風雲急を告げた。

約束のデートは、サーキットから一日だけ軽トラックを借り、伊豆の下田の海までドライブに行こうということになっていた。朱里はお弁当を作ると張り切って、僕に好きな食べ物を聞いた。
そのふるまいは、また新しい干し椎茸にぐんぐんと水を与えた。すでに僕の頭の中では、きらきらと光る夕日をバックに朱里と波打ち際を走っていた。「まてよー」「つかまえてみてー」「あははは―」ともちろんそれはスローモーションで再生された。
ガレージに佇む僕のマシンSE-KAI-ICHIを眺めながら、「今回はどうやらおまえの出番はないようだな」そう言って僕はマシンのキーを引き出しにしまい込んだ。もう出てくんなよ。
朱里の期末テストも無事に終わり、成績は進学校ながらも及第点を楽々クリア。トップクラスと言っても良いほどだった。朱里のバイクを操る感性は、きっと鋭い思考から来ているのだろう。バイクのレースはフィジカルが全てに思われがちだが、頭脳を駆使しないとトップクラスのタイムは到底出せない。マシンを速く走らせる為のセットアップは、吸排気のバランスに始まり、サスペンションの調整でタイヤをいかに路面に押し付けるか。それはまるで難解なパズルのようだった。朱里の頭の回転の良さはずば抜けていて、それはずる賢いとも言っていいほどだった。

待ちに待ったデートの日がやってきた。１時間半をかけ、約束の場所の自動販売機が並ぶ商店の前に到着した。約束の時間は６時３０分。そして時計は６時５分と表示していた。
練りに練ったナビルートは、まだ夜明けが始まったばかりの朝もやの中、順調に待ち合

わせ場所まで運んでくれた。
朱里の姿はまだ見えていなくて、僕はホッとした。「とても張り切ってたから、きっと時間より早くきちゃうぞ。朱里より早く着かなきゃ」そう思いながら車を走らせてきたからだ。「それにしても、さすがにまだちょっと早いよね。そうだ、何か飲むかな」そう言って車を降りると、目の前の販売機で暖かいミルクティを買った。
僕の頭の中は、会った時にキスをしようかどうか、それだけが問題だった。
ミルクティーは空になり、車の時計を見ると6時３２分と表示されている。僕は携帯電話を取り時間を確認した。画面にも車の時計とぴったり同じ、６時３２分と表示されていた。
しかしキョロキョロしても朱里の姿はなかった。「お弁当に卵焼きを入れ忘れたのかな？」僕はできるだけ現実を考えないように、まずは入れ忘れた卵焼き。のカードを引いた。
時計を見ると6時３７分から３８分へと変わるところだった。そうだ、道路に行けばもう朱里がこっちに歩いている姿が見れるだろう。きっと僕の姿を見たら慌てて走り出すぞ。僕は笑顔の準備をして、路地に行った。
朝もやも晴れたその路地は、遠くの突き当たりまではっきりと見えていたが、人の気配は何もなかった……。
「あと5分出てこなかったら家まで迎えに行こう」と道路の先を眺めた。
そして5分が経った……。
「……あと3分出てこなかったら迎えに行こう」
僕はこんな現実、全く予想してなんていなかった。約束の時間には、僕と朱里はキスのひとつでもしているだろう。それ以上だって……。僕は、あきらめるなんて選択はできなくて、何度も何度も時間を延長した。
時計は7時３０分を過ぎた……。けれど僕の欲望はしぶとかった。執念と言ってもいいだろう。しかし朱里の姿はいつまでたっても目の前に飛び込んでは来ることはなかった。キスをするどころか、会うことさえできないのでいた。
これはおかしい、何か重大なトラブルがあったのだ。家の玄関の段差でつまずいて大けがをしているのでは。しかし朱里はそんなドジではなかった。人を振り回す性分ではあっても、朱里が望んだ約束を忘れたり遅刻などするわけがなかった。
僕は少しでも何か確かめたくて、朱里の家に向かった。だがこんな朝早くにチャイムな

んて押すわけにはいかない。それに携帯もない、近くに公衆電話もない、あってもとてもかける勇気もない……。僕はそんななないない尽くしを片っ端から捕まえては、八つ当たりのようにゴミ箱に投げつけた。

路地を歩いていくと、車庫に押し込まれたワンボックスカーのある家があった。それは朱里がいつも乗ってくる見慣れたハイエースだった。表札を見てもやはりここが朱里の家のようだった。外から見える部屋には明かりはついていない。今まさに玄関を開けようとしているのか？　僕はまだ会えることを諦めきれないでいた。家のフェンスの前でふらふらと体を動かしながら、部屋の様子を伺った。

携帯を開くと、時間はもう８時をすぎていた。諦めてとぼとぼと車に戻りながら、何度も振り返った。車で少しの間うなだれると、ようやく車のエンジンをかけた。車を路地まで移動させると、最後にもう一度朱里の姿を探した。さっきと同じ、誰もいない閑散とした路地だった。

昨日の夜は興奮してなかなか寝付けなくて、幾多の羊が柵を超えた。朝待ち合わせに行くと朱里は来なかった。そして帰りは渋滞に捕まり、睡魔と闘いながら２時間３０分かけて帰った。

朱里はこの日、「家には嘘をつくから、遅くまで遊ぼうよ」と言っていた。それを聞いた僕の欲望は、朱里の肌の感触を思い出し身悶えた。しかしいざ蓋を開けてみれば、僕は１時間３０分かけて迎えに行き、さらに１時間３０分待ち、朱里の家の前をうろついて、最後は２時間３０分かけて家に帰って来た。車で行って車で帰ってきた。車で行って車で帰ってきた。それは立派なドライブだ。しかしこんな寂しくて悲しいドライブは、もう二度と走りたくはなかった。僕はこんなとき泣けたら楽だと思ったが、なにも涙は出てはこなかった。

部屋に戻り上着も脱がないまま布団を被り、「こんな絶望なんてもう嫌だ」と呟くと、僕はすぐに眠りに落ちた。次に起きたのは真夜中の２時だった。起きた途端、再び胸が押しつぶされそうな苦しさに襲われた。

母はもうすっかり寝静まっていた。電話があったのか聞こうかとも考えたけれど、そんなことはもうしなかった。台所に行き冷蔵庫を開けると、バドワイザーの缶が２本並んでいた。部屋に持ち帰りやけ気味に二本続けて飲み干した。初めて飲んだビールの味はとても苦かった。すると「ゲファアア」と大きなゲップが出た。

その次の週サーキットに現れた朱里は、駐車場に僕を呼び出した。僕はドライブの一件以来電話はしていなかった。
「この前はドライブのことごめんね」朱里は誤っているのに、どこか不機嫌そうだった。
「どうし……」と話そうとする僕を遮るように、朱里は話を続けた。
「あの日みなみさん、家の前まで来たでしょ？　あかり見てたの。みなみさん家の中覗いてたでしょ？　お父さんもみなみさんに気がついて『おい変なのがいるぞ』って散々言われたわ……」
僕は頭が真っ白になった。何が起きたのか、一体いま朱里に何を言われているのか、僕はまるで理解ができなかった。僕の自慢の子鹿の膝は、今日は心細さで震えていた。そして、お父さんが言った「変なの」という言葉にも僕は敏感に反応した。僕は自分の存在を『変なの』という生き物に一気に変換していった。
「な、なんで……？」と絞り出すようにそう聞くのが精一杯だった。
「あかり、やっぱりみなみさんと一緒にいるより、地元で友達と一緒にいる方が楽しいの……レースにも集中したいし……」
「……あ、のピアスの友達？」
前に見せてもらった耳や唇にたくさんのピアスを付け、舌をべーっと出した男の写真を思い出していた。
「……」朱里は何も言わず腕を組んでいた。
「もう、無理ってこ、と……？」僕は声を震わせながら言った。
「ねえどうしてそんな声が震えてるの？　もっとしっかりしてよみなみさん、あかりそういう弱々しいの本当に嫌いなの！」
朱里は眉をひそめながら、僕を突き放した。
「もう無理……」
そう言うと朱里は、うなだれる僕を無視するかのようにピットに戻っていった。
僕はがたがたと心を震わせながらその後ろ姿をただ眺めた。

朱里は僕の気持ちなど、まるで無い物かのように振り払っていったのに、それでも僕は惹かれ続けた。何をするにも「朱里がいれば……」とその喪失感は、僕の背骨を抜き取ったかのように、体に力を入れることを許さなかった。朱里との関わりのない生活に人生の

喜びはなかったし、生きる意味さえないように思えた。
付き合いが始まったときは、どんな甘い恋愛が待っているのか、どんな風に僕の気持ちを満たしてくれるのか。それはまるで予約が一杯のレストランのように期待を膨らませた。しかしある日突然なんのためらいも無く大事な約束を破り捨て、僕を傷つけ去っていった。僕の「朱里への期待」という名のレストランには、予約された客が来ることは無かった。どうして僕を突き放したのか。そもそもどうして僕と恋愛をしようと思ったのか。聞きたいことは山のようにあったのに、朱里の胸の内は何も聞けず、僕の想いは破り捨てられた。
朱里への思いは、結局は時間が忘れさせていった。そして社会人となり、人生に張りも出た頃、ゆり子と出会い恋をした。身も心も震わせた実態のある恋だった。朱里との時とは違い、手を伸ばして相手に触れると、きちんと実感が持てる恋だった。しかしそんな本物の恋を、僕の心の歪みは許さなかった。自分勝手に気持ちを踏みにじり、苦しみの全てを相手のせいにした。
そんな僕とゆり子との間にできた溝を見計らったかのように、再び朱里は現れた。そして巧妙に愛情を見せつけていった。今まで傷つけられた気持ちなど一瞬で吹き飛び、ただただ犬の尻尾のように雑に心を震わせると、分別もなくゆり子を切り捨てた。「これが、ほんとう、の、こい、だ」と勘違いして……。
しまい込んでいた朱里への想いは、その紐を解くと昔の頃の気持ちのまま、触れないほどの熱を保っていた。そして今ベッドの上には、２４歳になった朱里が僕の隣で気持ちよさそうな寝息を立てていた。
朱里は国内ライセンスのアマチュアレースで頭角を現わすと、数え切れないほどの優勝を重ねた。いくつものチャンピオンに輝くと、次の年には、全日本選手権へと参戦の駒を進めていた。朱里のライダーとしての才能は、類い稀なものだった。すぐに初表彰台も獲得し、シリーズをかき回す台風の目となっていた。最小排気量とはいえ、全身をくまなく使うオートバイの競技では、女性というフィジカル面でのハンデは大きかった。それも朱里の持ち前の気持ちの強さでトレーニングに明け暮れ、すぐにハンデではなくなった。朱里は、話題の美人女性ライダーとしてだけではなく、タイトル争いまでも想像できる、トップライダーとして、レース界で注目の存在だった。
ミニバイクに乗っていた頃の朱里の活躍を見ていれば、日本最高峰の全日本選手権の戦績も不思議ではなかった。男より速く走る女。まるで違和感はなかった。朱里が連戦連勝

を重ねていたミニバイクレースでの下積みは、レースの組み立てやライン取りなど、プロのレースでもその全ての経験が直接的に反映できた。日本最高峰のレースといえど、スピードにさえ慣れてしまえば一気に成績が出る。それは、過去のミニバイクから上がってきたライダーたちを見ても、それほど珍しいことではなかった。朱里は常にトップグループに喰らい付くしぶといライーダーとして恐れられ、優勝はもう目の前だった。

そんな朱里が営業のためにスポンサーの元を訪れた。僕が勤める「日本加工社」だった。目の前に置かれた会社案内をペラペラとめくると、そこには作業を指示する僕の姿が役職紹介の欄に写っていた。朱里はそのパンフレットを鞄にしまい、スーツの裾を直した。

そうしてある日朱里は、再び僕の目の前に現れた。目を奪われるほどの壮麗な大人の容姿とともに。

社屋のロビーのソファーに座る朱里を見つけた瞬間、僕はその場で足を止め、手に持っていた書類を落とした。僕は動けないまま、ただその視線の先を見つめた。朱里は立ち上がると僕の前に来て、落ちていた書類を拾い「はい」と差し出し、黒くて長い髪を耳にかけた。

「みなみさんひさしぶり、あかりだよ」と言って微笑んだ。

もう思い出すこともなくなっていた朱里が、今僕の目の前にいた。

ベッドで眠る朱里の顔には、深海の底のように青黒く、艶のある長い髪で覆われていた。その髪の隙間からは形の良い鼻筋と、切れ長で美しい眠る目が覗く。朱里の細くしなやかな指は、しっかりと僕の指と絡められていた。朱里のきめの細かいするりとした肌の感触に見守られながら、僕は深淵の湖の底へとゆっくり沈んでいった

＊

ゆり子と別れてから半年が過ぎていた。僕は職場で地道に昇進を重ね、入社5年目で小さなチームを任されるほどになっていた。ゆり子とは社内ではたまにすれ違うことがあった。ゆり子は今でも僕を見るとニコッと小さく手を振った。けれど僕は頷く程度でごまかした。ある日、ゆり子のチームから仕事を依頼され、僕のチームとミーティングを行っ

た。そこで見たゆり子の仕事ぶりは、やはり会社の中心人物なのだと見せつけられるものとなった。

依頼された仕事は、新しく採用された金属の強度を実験する依頼で、通常はチームのやりとりはすべてはオンラインで済んでいた。だがある日トラブルがあって、リーダーの僕がゆり子に呼ばれた。

「ごめんね、忙しいのに」とゆり子言った。

「ううん、いいんだ。それでトラブルって何？」

僕は会議室の一室で、そのトラブルの説明を聞いた。書類がたくさんあって、テーブルはいっぱいになった。ゆり子がトラブルの箇所を指摘したり、僕が新しい対策を考えたり、話は順調に進んでいた。すると廊下を何人かが話しながら歩いている声が聞こえ、ふと開いた扉の向こうを見ると数人のスーツの人間が見えて、その中に朱里がいて、目が合った。僕はすぐに書類に視線を戻し、あたふたと上ずった。

「どうしたの？」ゆり子は気がつかなかったようだった。

「なんでもないよ、じゃあ、この改善案をまた週明けにでもチームのアカウントフォルダに送信しておくから」

そう言うと僕は自分の書類をそそくさとまとめ、「じゃ」といって慌てて会議室を出た。遠くに朱里がいる集団が見えたが、すぐに廊下の角を曲がって見えなくなった。

時折朱里は僕の仕事のことを聞いた。そのたびに、会社でゆり子といるところを見られたことを聞かれないかとそわそわとした。

「みなみさん、仕事楽しい？」

「そうだね、いろいろ責任も出てきたけど、楽しいよ。なんで？」

「別にい。そうだ、あかり、みなみさんとドライブしたい。下田行こうよ」

「おい、それよく言えんな、もうあんなすっぽかし嫌だからね」

「あはは、そうね、朱里もあんな変質者みたいなみなみさん見たくないもん」

「こんにゃろー」と言って僕は朱里の脇をくすぐった。

「やめろ変質者ー」と言って朱里も僕の脇に襲いかかった。

「ごめん、ごめん、ゆるしてー」と本気を出した朱里に、僕はいいようにくすぐられた。

ふざけて笑い合ってはいたが、僕はあの時のことを思い出すと、心から笑えるわけではなかった。しかし、僕の壊れた翻訳機は、これは朱里の愛の囁きなんだと訳すと、グーグ

ルカレンダーにドライブの予定を書き込んだ。
ゆり子と別れてから、会社を辞めることを考えていた。会社でゆり子の顔を見るたびに、責められているような気もしたし、社内でも僕らのことは噂になっていた。ゆり子を狙う男性社員が多いことも知っていたし、食堂に行けば一つや二つではない威圧感のある視線が僕を貫いた。
仕事は面白かったし、ようやく慣れた僕の唯一の社会でもあった。会社以外で僕の生きる場所はなかったし、やりたい事も行きたいところも会いたい人もいなかった。朱里だけが僕の人生だった。朱里と過ごし朱里に触れられることだけが僕の世界だった。
日に日に会社での居心地は悪くなり、とうとう僕は会社を休んだ。いい大人になっているのに、ずる休みをした。そして僕はそれ以降会社には戻らなかった。会社からはあらゆる批判と同時に残るように説得も受けた。一度だけゆり子から着信があったが、僕はそれを無視した。
会社を辞めたことで僕は自由な思いを感じていた。ゆり子の気配を気にせずに、朱理のことを思うことができる。僕のとって、不安を背おうことよりも大事なことに思えた。

それから一ヶ月ほどすると、久しぶりにサーキットのオーナーから連絡があった。1週間後の日曜日に、大会のスタッフを頼めないかと頼まれた。「必ず行きます！」と大声で返事をした。それをきっかけに、退職した事情を話すと、今ちょうど人が足りないから、バイトするかい？　と誘われた。僕は二つ返事でまたサーキットへと戻った。
サーキットに戻った一番の理由は、仕事もそうだが、朱里が走りに来ることだった。朱里とはほとんど音信不通状態だったから、ここで働いていれば確実に会うことができるからだ。大きなサーキットはいつでも予約満杯の状態で、プロのレーサーも一般ライダーと同じ予約を取らないとサーキット走行は出来なかった。だからミニバイクでの練習走行といえど、貴重なトレーニングだったから、定期的に朱里は姿を見せた。だからと言って昔のように、練習が終わったらバイクでピュ〜ってイチャイチャしに行けるわけでもなく、練習が終われば朱里はスタッフと一緒にすぐに引き上げてしまった。
「あーぁ……」
ある寒い日曜日の午後、久しぶりにバイトも休みで出かける用事もなかったし、当然朱里はどこで何をしているのかなんて一切わからなかった。

珍しく昼間から、飲み干したビールの空き缶を床にいくつも転がし、ベッドでゴロゴロとしていた。思い浮かぶの朱里への愚痴ばかりだった。

ゴロゴロと転がるたびにフラストレーションは加速し、ついにピークに達した。「あーもう！」と叫びながらグルンと大きく体を転がすと、石油ファンヒーターに足が当たり、自動ストップがかかった。すると得も言えぬ不快な不完全燃焼の匂いが部屋に充満した。

換気のため窓を開けると、桜も散り始める頃なのに、季節外れの冷たい風が優雅にカーテンを揺らす。その冷たい風は、僕の鼻毛をそよそよと揺らした。ぷちっ。とその鼻毛を抜くと長さを確認し、ふっ、と息で飛ばした。僕は切る派、ではなく、抜く派だ。と、どうでもいいことを考えていると、本棚にある「フライト」に目が止まった。

いつの間にかインドへ想いを馳せることもなくなっていたし、インドへ行くなんてもはや他人事だった。それよりもいつだって頭の中は朱里のことだけでレッドゾーンだった。しかし今このめくるめくインドの喧騒を改めて見直すと、何かの思いが激り始めた。熱い、何かが熱いぞ！

インドに燃えていた頃、とりあえず旅費を貯めようと豚貯金を始めた。いつしか何のために貯金をしているのかもわからなくなっていたが、小さいころからの習慣で豚だけは増えていた。今ではかなりの大きさの豚が3体満タンで並んでいて、「インドに行けブヒー」とでも言い出しそうな、異様な気配を漂わせていた。僕は豚を見つめた。まじまじと。すると何かが僕の背中を「ばちーん」と叩いた。

「いってー！」

と大きな声でのけぞって叫んだ。部屋中をキョロキョロとすると、部屋の天井の方に登っていく、頭に蛇を乗せた誰かが見ていた。シヴァだ、インドの三大神の一人、シヴァ神だった！

「いけ、いくのよ〜」とシヴァ様は、手を合わせながらエールを送った。

「シ、シヴァさぁぁー」と僕は泣きながら天高く拝んだ。

僕の中の眠っていた何かが目覚めた！　あぐらをかいて前後に体を揺すった。そしてブツブツ言いながら頭を上げて目を見開くと、

「よし行くか、インド！　行くかインド！」

と僕の目の中はメラメラと赤く燃えた。

インドのことは、あらゆる場所をチェックをしていた。フライトに挟まっていた付録のインドの地図を開き、あごをさすりながら考える。まずはガンジスの夜明けを見る、これ

は旅の要だ。インド最大の宗派であるヒンドゥー教徒の聖地バラナシ、そこを流れるガンジス川はインド人の魂が宿る場所だ。そこを見ないでなにがインドの旅だ！　徐々にインドへの熱さが蘇りだすと、僕の心の中のパソコンが「ジャーン」と鳴り、突如起動した。

「そうだ！　ガンジスの夜明けと共に、1人読書にふける。ってのはどーでい?!　おおー。きた！　なんかピンときたぞ。それにはもちろんハルキだな、太宰はやばいからやめておくか。すごい！　ガンジス川でハルキを読む。なんだそれ、どんな組み合わせだ。すごいぞ、その為だけに行っても良いくらいだ」

僕は突然降りてきたインスピレーションに、がたがたと嬉しさで揺れた。

「よし、行こう！」と僕は叫んだ。

興奮した僕は、なぜかシャツを脱いで上半身裸になり、右手を腰に当てながら、左手の人差し指を天井に突き上げ「ぴゅーっ」と口笛を吹いた。

こんなにも胸が躍るような感覚はいつぶりだろうか。すると、僕の人生のレールのポイントが「ガチャン」と切り替わる音が聞こえたような気がした。

＊

インド行きがいよいよ来月に迫った。旅の準備もあるというのに、猛烈に大掃除がしたくなり、珍しく2日ほどの連休を貰った。僕は頭にタオルを巻き、古風なハタキであちこちの埃を落とすところから始めた。吉幾三のＣＭの曲の「すみなれた～。このまつで～」と歌いながらハタキを振り回していると、壁に掛けてあった鞄がフックごと取れて落ちてしまった。慌ててつかみ損ね、その勢いで鞄は宙を舞った。落ちた鞄からは財布が床に落ち、レシートや会員カードやらがばらまかれた。

「ああ、もう、まったく……」

散らかったついでに、仕方なく要らないものを処分した。使う物だけ財布に戻そうとすると、カード入れにまだ何かが入っていた。引き出してみると、それはゆり子の写真だった。僕は立ったままその写真を見つめ、その時のことが思い返した。

その写真は、僕とゆり子が茂木サーキットにMotoGP日本グランプリを見に行ったときに、僕が撮った一枚だった。僕らは土日の予選決勝を見る為に、泊まりがけで出かけてい

た。サーキットに着くと二人とも興奮してありとあらゆるものを見てははしゃいだ。そのゆり子の様子を思い出すと、センチメンタルな思いに駆られた。

1周のラップタイムで争う土曜日の予選で、ゆり子の父親が指揮するヤマハレーシングチームのエースライダー、バレンティーの・ロッシが圧倒的な速さのラップを刻み、ポールポジションを獲得した。予選2位のライダーに0.7秒も引き離す大差だった。日曜日の決勝は、誰もがいつも通りのロッシの圧勝劇を想像した。この最終戦の茂木でロッシが優勝すれば、文句なしに今年度の年間シリーズのタイトルを獲得する。優勝できなくても10位以内に入ればロッシにタイトルが決まる。ロッシにとってはプレッシャーの無い、チャンピオンを受け取るためだけの最終戦だった。このMotoGPクラスで世界タイトルを手にする。それはオートバイで世界最高の称号を手にするということであり、世界一強いライダーと言う証明だった。

そんなタイトル獲得をかけた最後の一戦がここ日本で行われる。僕らは半年前から、ホームストレートのしかも間近でマシンが見える特別シートを確保していた。僕らはCS放送で、開幕戦のカタールのナイトレースで始まったシーズンを、一戦も欠かすことなく二人で追いかけてきた。僕らにとってここでタイトルが決まる。そしてその運命の日に僕らはこの目でそのドラマを目撃する。それは日本のバイクレースのファンにとって、空前の出来事だった。

僕らは、お互いがここまでのシーズンを振り返るように、この地に足を踏み入れた。

日曜日は雲一つない快晴だった。風もなく気温も午後は20度と予想されていて、タイヤにも負担の少ない良いレースになるだろう。とレース前の場内放送で解説者が話していた。

MotoGPクラス決勝は、大方の予想通りスタートからロッシが独走状態を築き、後続を大きく突き放していた。観戦シートに座っていることもできないほど緊張したゆり子は、フェンスにしがみ付き、手にも届きそうなほど近いコースをじっと見ていた。

ゆり子の目の前を、耳をつんざく大音量で世界最高峰のレーシングマシンが駆け抜けて行く。マシンがコーナーを過ぎ去る加速は、例えようのない異次元のスピードだった。ファンだったら一瞬で心を奪われるような贅沢な観戦シートだった。

ゆり子の横顔の髪の間から覗く真剣な瞳は、目の前を走り抜けるマシンに釘付けだった。その様子を僕はコンパクトデジカメで撮影した。それが財布の中から出て来た写真だ

った。

昼下がりの午後の決勝も終盤を迎え、翳り行く日差しがゆり子に優しい光を落としていた。光は顔の陰影を淡く現し、こみ上げる楽しさに満ちあふれた表情だった。自分の前世はカメラマンか？　自画自賛にカメラのプレビュー画面に見惚れた。突然砂利を掻き回すような耳障りな音がした。クラッシュだ！　振り返ろうとしたのと同時に、ゆり子は僕の肩を思い切り叩き、「ロッシが転んだっ！」と叫んだ。

慌ててフェンスにしがみつくと、目の前の砂利の上に、ロッシが横たわっていた。鈍く起き上がったロッシは、鮮やかだったブルーのレーシングスーツを、冷めた砂色のフィルターに覆わせていた。

「え、何?!　なんで?!」とゆり子に叫んだが、ゆり子はコースを見ながらただただ呆然と立ち尽くしていた。

ランキング1位で挑んだロッシの茂木グランプリ。予選では優勝以外は考えられないだろうというスピードを見せていた。

決勝でもそれを裏切らないロッシの独走劇。誰もがロッシの優勝とシリーズタイトルの獲得を信じて疑わなかった。しかし僕らの目の前でその悲劇は起きた。

その転倒のせいで優勝はおろか、世界タイトルまでも逃す前代未聞の転倒だった。ポイントは大差だったが、ロッシをしつこく追いかけてきたランキング2位の、ホンダレーシングのエースライダー、ニッキー・ヘイデン。ロッシがいなくなったあと、ニッキーは独走状態でホームストレートに現れた。マシンから立ち上がり、高らかなウイリーを決めると、何度も腕を突き上げながら悠々とゴールラインを割り、優勝と逆転シリーズタイトルを決めた。

ピットロードでは、ホンダレーシングのクルー達がフェンスを乗り出さんばかりによじ上り、ゴールラインを割るニッキーに歓喜を浴びせた。それとは対称的にヤマハレーシングのクルー達はピットロードで呆然と立ち尽くしていた……。

日本人が埋め尽くすサーキットは歓声に溢れ、アナウンサーも声を枯らしていた。しかし世界最高峰のレースの年間タイトルを、日本のメーカー同士で争うような競技は世の中他には無いだろう。それほど日本のオートバイに対する技術は突出していた。

ゆり子は泣いていた。一年間ずっと父の存在を感じながら追いかけて来た今シーズンのMotoGPの年間タイトルの行方。ロッシがまさか自分の目の前で転倒し、チャンピオンの可能性が途切れるなんて夢にも思っていなかっただろう。僕だって転倒なんてあり得ない

と思っていた。
そしてコース脇の巨大なオーロラビジョンには、転倒するロッシの姿がリプレイで写ったあと、すぐにゆり子の父「芹澤義男」の悔し涙が映し出された。ゆり子の父はそれを隠すこともなく腕を組みながらピットボックスのモニターを見つめ、堂々と顔を上げながら涙をこぼしていた。傍らで泣き崩れるクルーとは対照的な、威厳のある姿だった。
チームは、どれほどの労力でグランプリに挑んでいるのか、父の背中を見て育ったゆり子には、当然自分のことのように感じていただろう。
ゆり子はその場に座り込み、ひとしきり泣いたあと僕の手を取り「高山くんのことがすき」そう言ってまた静かにむせび泣いた。
コースサイドのオーロラビジョンには、ピットボックスへと戻るロッシが映し出されていた。ヘルメットを取ったロッシは、笑顔で観客に手を振っていた。
僕は泣き止まないゆり子を抱きしめながら、レースの終わったコースをいつまでも眺めた。

日本グランプリでのゆり子の情景を、昨日のことのように一しきり思い出すと、僕の中にじりじりとした想いが蘇ってきた。僕は写真を持ったまま携帯電話を手に取った。十字キーをこちこちと押すと、アドレス帳から「セ」の行を探した。芹澤ゆり子。まだ残っていた。携帯電話の画面に写った芹澤ゆり子のページを、僕は長い間みつめた。思い切って電話をしてみようと思ったが、押す勇気はなかった。
その次の日、午後のバイトが終わると、また僕はゆり子の電話番号を眺めた。しばらくためらったが、僕は発信ボタンを押した。
ゆり子はすぐに電話に出た。
「もしもし、高山くん？」

＊

初めて体感した飛行機の離陸は、信じられないほどの加速、という現実を僕に突き付けた。「これは神に背いた文明だ。しかしおれが乗っているから大丈夫だ、安心してその翼

に揚力を溜め込み、空へと羽ばたくのだ」僕は目の前のシートのヘッドレストの先端を両手で強く握りしめながら、ぶつぶつと呟いた。その後さらに飛行機は、今までとは桁違いの加速を見せ、急激に機体の角度を上げて行った。

「なんだこの加速は！　我々の技術は３０年は遅れているぞっ！」

加速が僕の体をシートの背中に押し付ける。

「わっ、なんだ?!　オレを宇宙にまで連れて行く気かっ?!」

両方の肘掛けを必死に握り、うるさく喋っていると、気配を感じた。横を向くと、隣の席のインド人と目が合った。しかし約２秒間ほど気まずく見つめ合ったが、またお互い自分の目の前に視線を戻した。

飛行機は、凄まじい加速を僕に味合わせたあと、とんでもない高度まで一気に飛び上がった。

機体が安定した高度で飛び始めると、僕は広がる上空からの光景に目を奪われ。

日本列島の真ん中を、馬ノ背のように盛り上がる山並みを見下ろしながら飛行機は飛び、しばらくすると急激にインド大陸の方向へ機体を傾けて行った。

改めて機内を見渡すと、ほとんどがインド人で、乗客はそれほど多くもなく閑散としていた。しかしキャビンアテンドは右に左に、前に後ろにとせわしなくドリンクなどを配っていた。

「ナニ カ ノミモノ ハ？」と聞かれたので、リンゴジュースにした。ビールといきたいところだったが、初めての飛行機、緊張感を欠かないように控えた。

しばらくすると、暖かそうな湯気を出した機内食が目の前に用意された。包装のアルミシートを外すと、黄色く炒められた野菜と、トマト色のチキンカレー、それと見たことも無い長い形状の米のご飯が湯気をたてていた。その湯気を吸い込むと、僕の脳みそはスパイスに染まった。華奢ですぐにでも折れてしまいそうなプラスチックのスプーンを手に取り、まずはチキンカレーをすくい、口に放り込んだ。

「ん？」

なんだ？　ほろ苦い失恋感が僕を襲った……。もう一度、今度は多めの量をすくい、チキンと一緒に口に放り入れた。

「んふー……」

とやる気のない鼻息を立てると、僕は表情を雲らせた。塩味以外あまりしなかった。冴えない味に思わず俯いた。

日本のインドカレーのレストランで、僕は何度もカレーを食べた。看板には「本場インドの！」と書いてあったし、シェフはインド人だった。出てくる料理はフカフカのナンに濃厚でバターの利いたうまみたっぷりのカレー。ボリュームのある柔らかいお肉。日本でこれなのだ、本場のカレーなんか一体どうなってしまうんだ。僕はレストランのテーブルで両手を組み、神妙な表情でインド本土のカレーを想像したのだ。

機内食と言えど、インド人が食べる本物の食事のはず。それはもう脳天を突き抜けるような濃厚なうまみ満載に違いない。どんなものが出て来てしまうのか、一体僕はどうなってしまうのか、そう思っていた。

しかし、日本のレストランで出てくるような濃厚なカレーを、現地インド人が頻繁に食べることなどは無かった。目の前のありカレーは、インド標準のご飯ということだった。

「そうか、きっとこれが現地のカレーなんだろうな……」と僕はしょんぼりし、期待値ツマミを少しだけミニマムに回した。

容器の隅々まで舐め尽くしたあと、僕は目をキラキラとさせていた。食べ始めはあまりにも想像と違ったが、食べ進めると僕の味覚の何かが変わった。さらさらのカレーは口に入れるほど癖になり、お米と一緒にするっと喉を通る。粘り気の少ない特性の長いお米は、このカレーにぴったりだ。スパイシーな香りはさらに食欲を増幅させ、気がつけば一気に完食をしていた。なんだこれ、魔法？僕は腕を組み、空になった器を睨んだ。ここまで一気に食べさせるインドカレー……。今度は左手を右肘の下に当て、垂直に立てた右手の親指と人差し指であごをつまみながら「んー」と唸った。唸り終わると僕は一気に機嫌を取り戻し、インドの旅で出会えるカレーに胸を躍らせた。

最後に、ヒンディー語の並んだパッケージのリンゴジュースを飲み干し、「ふーっ」と一息つくと、前のほうの席で立ち上がっている人が目に入った。自分と同じような年齢の日本人の男性だった。

デリーまであとわずかになると、目下にはヒマラヤの山並が現れていた。さすがにエベレストという名前くらいは知っていたが、どれがそうなのかはさっぱりわからなかった。空から見た雄大なヒマラヤ山脈は、そこが地球とは思えないような複雑な造形をしていた。あんなところを登ったり降りたりするために世界中から登山家が集まっている。それはいったいどんな心境なのだろう。これからインドを旅する僕のこの心境と、何か近いものがあるのだろうか。

機内で上映されていた、カラフルで派手な映画が画面から消えると、案内表示へと映り変わった。あと２０分で目的地、インディラ・ガンディー国際空港なのだと画面は伝えていた。

滑走路が見えてくると、機体は急激に高度を下げ、ランディング体制に入った。そしてまっすぐ揺らぎ無くアスファルトにタイヤのゴムを接触させると、機体は表情も変えず「いつものことですから」と言わんばかりに、華麗なテレマークを保持しながら着陸した。

徐行する滑走路の脇では赤茶けた畑が無造作に続き、そこで従事する人々がこちらに向かって手を振るのが見えた。その光景を見た瞬間、僕は不思議と「懐かしい」と感じた。それは僕がまだ子供の頃の、ずっとずっとむかしの記憶が刺激されたような、そんな感覚だった。

ボーイング７４７の巨大な機体は、到着ロビーのドッグへ速度を落としながら進み、そして静かに接岸した。想像していたよりも優雅な着陸ショーは、長時間のフライトで眠った旅する細胞を、再び揺り動かすには十分な体験だった。

ようやく目的地に到着したエアインディアは、長旅で疲れた両翼の熱を冷ますように佇み、次々と到着ロビーへ乗客を吐き出した。飛行機のエンジンは静かにアイドリング運転を続けた。

「よしっ！」

と言っシートベルトを外し、颯爽と席を立ち上がったが、よろけて肘掛に手をかけるとそこには隣のインド人の手があって、僕らは再び目を合わせた。僕は逃げるように荷物を抱えると、出口に向かった。

＊

「もしもし、ゆり、子？」

「もしもし……、た、高山くん?!　どうしたの?!」

「うん、久しぶりだね。ごめんね急に電話しちゃって……」と僕は申し訳なさそうに言っ

た。
「ううん、いいのよ。びっくりしたの。ねえ元気なの？　ほんと久しぶりよね」
「うん、元気だよ……」ゆり子の以前と変わらない声を聞くと、さらに自分の身勝手が身に沁みていき、罪悪感でいっぱいになった。
「ちょっと、疲れてる？　電話なんか、何かあったの？」
「ごめんね、電話しちゃって、はは……」
「仕事……？」
「ん……、今またサーキットで働いてるんだ。けどほとんど休みが無くてさ」
「サーキットに戻ったのね。急に会社辞めちゃうから心配したのよ」
「うん、あの時はもう何も考えられなくてさ、わー。ってなっちゃって」
「彼女とはうまくいってるの？」と聞いたゆり子の勘は、おそらくは当たっていた。
「ど、ど、どうなんだろう」
動揺が隠せなかった。
「ちょっとどうしたのよ、ふふふ、いいのよ話しなさい」とゆり子はお姉さん節で言った。
「う、うん……。彼女は今度大きなスポンサーと契約ができたからさ、それでホンダのスペシャルマシンを借りれることになったんだよ。メカもホンダのスタッフがしてくれるみたいでめちゃくちゃ張り切ってるよ。でもチームの監督が独善的みたいで、現場ではいつも喧嘩ばかりしてるみたい。とても気が強い子だから……。いつも忙しくて全然連絡も取れなくてさ、なかなか会えていな……、あ、ごめん……」
後頭部をスリッパで思いきり叩かれたように、僕はしゃべりすぎたことに気がついた。
「いいのよ。高山くん、でもそれでさみしくないの？」
「うん、寂しいけど、でもそういう子だからなあ……」
「わたしなんかあまり良い感じ受けないな。朱里さん……だっけ、その子？　最近雑誌でもよく見かけるし、ライダーとしてはとても優秀なんだろうけど、なんか気難しそうよね。でもそんなマシン借りられるなんて、やはりホンダからも期待されてるんだね。でもわたしなんだかその子が高山くんの彼女。ってどうしても思えないの。高山くんはもっと優しく包み込んでくれて、それでいてユーモアのあるような子が良いと思うの。ほら、あのドラマに出て来る女の子みたいなさ」
ゆり子の勘は当たっているが、僕はその正解を飲み込み切れてはいなかった。

「そ、そう思う？　たしかにあのドラマの女の子と比べたら彼女はまるで正反対だよ……。でも、すごく良い子なんだよ、気が短いからめちゃくちゃなときもよくあるけどさ」
「そう、高山くんが好きならそれが良いと思うけど……」
ゆり子の優しさに、朱里の話しをするほど息が苦しくなっていった。
「そうだゆり子、おれインドいくことにしたよ！」僕は根性で話題を変えた。
「え！　ほんとに?!」会話の空気はがらっと変わった。
「うん、来月の終わり頃だけど、デリーに入ってバラナシとかアグラとかその辺りを回ろうと思っててさ」
「すごいねー！　高山くんにとってインドはきっと何かあると思うよ。わたし応援してるね！」
「お、おう！、おう！」ゆり子とのキャッチボールは、ビシバシと僕のミットに良い球が入った。
「行くまであと一ヶ月もないけど大丈夫？　持って行く荷物の買い物とか、大変だったら手伝おうか？」
「あ、もう大体終わってるし、だいじょうぶだよ、あ、ありがと！」ゆり子は僕のハートのストライクゾーンにどんどん良い球を集めていった。
どんなにドジでのろまなスライムくんだったとしても、このゆり子の言葉の球筋を見ていれば、まだ僕のことを好きでいてくれている。それは胸が痛むほど明らかだった。しかし朱里への恋心は、ますます燃え盛る青い炎として、苦しいくらいに僕の胸ぐらを焦がしていた。
「出発まで体調とか気をつけてね」
ゆり子は当たった勘を確認するように、少しだけ言葉のトーンを下げた。
「あの川に来ていた足の悪い小鳥はどうなった？」
「あの鳥はゆり子が置いていった餌をいつも食べに来ていたけど、いつの間にか来なくなったよ」
気がついたら1時間以上も話をしていた。僕は満たされていた。朱里に奪われたエネルギーを、また昔のようにゆり子の想いでチャージをした。
そしてゆり子は最後に、僕にこんな挑戦をした。
「高山くん。一回しか言わないからよく聞いてね」ゆりこは神妙なトーンでそう言った。

「うん……」
「もしその恋が辛かったら、もし辛いんだったら、戻って来ても良いのよ。わたしの所に」
「え、なに？」その言葉の衝撃は、僕の脳天からおしりの穴までをも、一瞬で貫いた。
「ふふふ、一回しか言わないって言ったわよ」とゆり子は優しく僕を諭した。
「う、うん」
ゆり子は僕が電話をした理由を当てた上に、とんでもない豪速球を僕の胸元に投げ込んだ。それはゆり子に取っても、投げたこともないような、肩をも壊しかねないピッチングだった。しかしエネルギーをチャージできた僕の頭を巡ったのは、やはりどうしようもない朱里への想いだった。
「またいつでも電話していいからね」とゆり子言った。
「ありがとう」
「じゃあ切るね」
ゆり子は少しだけ寂しそうに言った。
「うん、またね」
僕は小さな声で言った。
電話を切ると僕の胸は朱里の想いで焦がれていた。すぐに朱里に電話をかけようと携帯を手に取った。履歴からリダイヤルしようとして、発信履歴のボタンを押した。そこにはほとんどが朱里の名前で埋まっていた。それをしばらく見つめてから今度は着信履歴のボタンを押した。そこにはバイト先からの着信がほとんどで、そのうちの一件が母親で、もう一件が姉からだった。朱里の名前はどこにも見当たらなかった。登録されていた日付を見ると、それは二ヶ月分の着信履歴だった。
僕は後ろ髪を惹かれながらも携帯を置いた。

＊

インディラ・ガンディー国際空港の到着ロビーから外に出ると、そこはもう人のるつぼだった。インド人の他にも、色々な国の肌の色が見て取れる国際色豊かな空港だった。

ごった返す人々の中で、たくさんの人が手書きのプラカードを掲げ客人の到着を待っていた。僕は人ごみの中、へらへらしながら沢山の人の中を移動をした。しかし僕に不安はなかった。僕には綿密に手配した、日本語が話せるガイドさんが迎えに来てくれる手筈になっていたからだ。

「みなみさーん、高山みなみさーん！」

僕の名前を呼びながら、何かを振り上げているインド人が見えた。僕が依頼したガイドのクマールさんだった。満面の笑顔で僕の名前が書かれたプラカードを振り回していた。それを見つけると「わあっ」と気持ちが弾んだ。

バックパックを片方の肩にかけながら、クマールさんを目指して駆け出した。しかしそのクマールさんまであと５ｍという状況にも関わらず、日本人と見るやあちらこちから無数の魔の手が伸びてきた。客引きだ。しかも皆の形相は、獲物を逃してはなるものかという鬼のようだ。「こえー」と密かな声を出しながら、前屈みになって走った。

「ど、どうも～」

「はい、みなみさん」

やっと会えたクマールさんは中肉中背の、日本で言う所の中間管理職のくたびれた中年のような肉体で、生命力あふれそうな濃い眉、濃い目に、濃いーひげ。の三拍子そろったこれぞ褐色のインド人。というスペックだった。

「は、はじめまして、高山です」と混乱し、まだ遭遇した本気の客引きの恐怖は拭えないでいた。

「ああ、びっくりしましたか？　あれは危ないですから、日本人は気をつけないと」

クマールさんの日本語は、期待通りに流暢だった。クマールさんは僕の肩をパーンと叩くと、あははと笑った。

まずは到着最大のミッション、クマールさんに会う。をクリアーした。

インド行きを決めたあと、たかちゃんに何人かのインド旅行経験者を紹介してもらった。恐怖の初対面におののきながらも、必死の聞き取り調査を行うと、ほぼ全員一致の意見があった。「空港を降りた所が第一関門だ、あれは素人はやられるぞ。空港に迎えに来てもらえる日本語達者なガイドと、初日の宿は確保してから池。いや行け！」何のことかわけのわからないまま、経験豊富な猛者の識者達の意見を丸呑みし、ＨＩＳでガイドさんと宿を手配してもらっていた。大正解だった。

しかしクマールおじさんは、そんな空港の客引きなど「日常よ」とでも言いたそうに、

「どうでしたか、飛行機は？」と堪能な日本語で会話を続けた。
「初めての、飛行機、ひょっと緊張しまひら！」
客引きと、インドに着いたという現実が、僕の日本語を破壊した。
「日本語慣れませんか？　かかか」と高笑いで、からかわれた。
慣れた場所をスタスタと歩くクマールさんに必死に着いて行く。そしてガラスの扉の前でクマールさんが、「最初の一歩の記念に、お先にどうぞ」とクマールさんが申し出た。
「え、あ？　はい！」
と僕は目を輝かせながらガラス扉の取っ手に手をかけた。取っ手はなぜか温かくなっていた。僕は誰かがここでずっとこの取っ手を握っていたんだな。と疑わなかった。
……彼女を置いて国を離れなければならない彼が、搭乗ゲートに向かうために扉の取っ手を握る。それを止めようと彼女は背後から彼に抱きつき必死に止める。
「いかないで！　アジェイっ！　私を置いていくの?!」
「ゆるしてくれシャーミー！、僕はいかなくては！」
「やめて、私を置いていかないでー！」
と押し問答を繰り返し、彼は取っ手から手が離せなかった……

完璧な現場検証を終え、手のひらを拳の腹でぱちんと叩き、「うん、これだ！」と確信を持つと、取っ手を握り力を込めてドアを引いた。
僕の人生の歴史に燦然と輝くであろう、インド一人旅の第一歩が始まる。僕は万感の想いを込め、扉を引いた。じわじわと扉が開いていく刹那……その隙間からは高熱の熱波が吹きすさんだ「あちゃちちちーっ！」と仰天し全力で扉を閉めた。「一瞬で目玉焼きができるのではないか?!」というような灼熱の熱波が、隙間ゆえに風速を増し、瞬く間に僕の身体を焼こうとしたのだ。
どんな本にも書いてあった、夏期インドの４０度を超える殺人熱波。僕はエアコンの効いたフロアにいたことで全く油断をしていた。日本なら確実に自然災害として大々的に報道されるであろう熱波を今僕は体験した。僕は目の前の窓越しに揺らぐ陽炎とクマールさんを交互に見た。
「な、なにこれ?!」
「くくく」悪戯げに笑うクマールさんだった。

「日本人、みんなこれびっくりするよ！　さ、いきましょ」
外に出ると、そこは耳を塞ぎたくなるような喧騒と、サウナの中にいるような熱波だった。全身が一気に汗ばんだ。
クマールさんは窓を全開にした車に僕を乗せ、猛烈なスピードで走り出すと、「パーッ」っといきなりクラクションを鳴らし出した。どこにも危険などないように思えたが、まるで楽器でも楽しむかのように、リズム良くクラクションを叩いた。
出発で「パーッ！」、他の車と並んで「パーッ！」、両手が塞がればおでこで「パーッ！」とクマールサンは陽気に鳴らしまくった。それがおかしくて、僕はゲラゲラと笑った。クマールさんは、僕が笑う声に合わせてクラクションを鳴らしながら、インドの喧噪の街へと車を滑らせていった。
「ぱっぱぁー」

＊

ゆり子に「好きな子ができた」と伝えたあの日の夜。泣き続けたゆり子は荷物も取らず、「帰る」と言って駅に歩き出した。一度うちに帰ろうと言っても返事もせず、歩くのをやめなかった。僕は仕方なく「荷物取ってくるから」と一方的に伝え、家までのおよそ３００ｍを全速力で走った。
ゆり子は改札の前で俯きながら立っていた。僕が大きく息を切らせながら荷物を持ってくると、ゆり子は目も合わさずバッグを取ると改札に入っていった。僕はゆり子が階段を降りるまで見送り、そのあとすぐにホームが見える窓まで走った。
途中で酔っぱらった学生かなにかと肩が当たったが、僕は無視して走った。遠くでは何か文句のようなものが聞こえていたが、今の僕にはそんなことどうでもよかった。
窓に着いても僕はまだ息が切れていて、肩を揺らしていた。ホームを見るとちょうどゆり子がとぼとぼと降りて来て、僕がその窓に来ることが分かっていたかのようにこちらを見た。ゆり子は涙が流れる頬の辺りを指で拭っていた。
僕らが３０秒程目を合わせていると、ホームに電車が勢い良く流れ込んで来て、ゆり子の姿を消し去った。僕は長い時間、そこから動くことができなかった。

それからしばらくが経っても、僕ら3人の関係は曖昧だった。ゆり子とは別れた。というわけではなかったから、朱里に「付き合おう」という言葉など交わせるわけがなかった。

朱里とは家も遠くてなかなか会えなかったが、毎日のように僕に電話をかけた。前はそんなこと絶対になかったから、今度は本当に僕のことが好きになったんだと、ただただ浮かれた。

「みなみさん、誰か付き合ってる人いるの？」と聞かれた時は、僕は「彼女がいるよ」と伝えた。朱里は「ふーん」と言った。そして「もう別れたいと思ってる」と僕が言うと、「そうしたらまた一緒にいられるね」と朱里は言った。その一言だけで、僕は簡単に朱里に忠誠を誓った。

ゆり子の態度は、それからも変わらなくて、僕に会えばニコニコとし、休みの予定を僕に聞いた。泣きながら帰ったあの日なんてなかったのかと思わせるほどに。

会社でも頻繁に顔を合わせていたし、僕らは少しずつ以前のように一緒の時間を過ごすようになっていった。ゆり子はことある毎に僕をコーヒーショップに誘ったり、部屋に遊びに行きたいと言っては一緒にご飯を食べた。けれどゆり子に触れることはしなかったし、ほとんどの誘いは断った。僕の中でそれは筋が通っていた。好きな朱里と好かれるゆり子に対し、それは清廉潔白な振る舞いだと信じて疑わなかった。

朱里への気持ちは日に日に僕の胸を締め付け、ゆり子との付き合いがいよいよ邪魔になっていた。かすかに残っていたゆり子への愛情も、最後にはすべが朱里の元へと集められた。

ある日ゆり子からの誘いがあると、僕はその日を利用して別れを切り出そうと考えた。ゆり子が僕に会いたいと思う気持ちを利用して、彼女の気持ちを崖から突き落とそうというのだ。そんなことを思い付いた自分の本性を恐ろしくも感じたが、すぐに朱里への忠誠心がそれをズタズタに切り裂いた。

約束の日、ゆり子の姿が見えてくると、僕がいつも似合うと言っていたデニム生地の、踝丈のロングスカートを履いていた。小さな街だったが、それとは関係もなく今日もゆり子のセンスは目立った。雑誌に出て来るような出で立ちのゆり子は、大げさに主張するも

のを避け、全身をシンプルで纏めながらも小物で刺し色を利かせていた。ゆり子の全身に、僕は思わず見惚れてしまう。朱里には到底出来ない芸当だった。

ファッションはゆり子の大きな魅力の一つだった。今日も僕に会うために一つ一つを選んだのだろう。そしてそのファッションよりも最大の魅力は優しさだった。なぜ僕は、こんな素敵な女性がここまで寄り添ってくれているのに、向き合えないのだろう。そんな思いが一瞬頭をよぎったが、すぐに「俺には関係ないもんな」とテーブルの上に埋め尽くされた花々を、伸ばした腕で車のワイパーのように一気にかき落とした。

ゆり子は僕の前まで来ると、いつものように優しく微笑んでいた。今から自分がすることを想像すると足が震えた。

僕らはいつものコーヒーショップのテラス席に座った。別れ話をするために、店内を避けテラスに誘った。言い訳のできない、計画的な犯行だった。

いつものようにゆり子からの世間話を、油の切れたぎこちないロボットのような、空虚な相づちで応えた。そのぎこちなさにゆり子は気になったのか、優しく僕の顔を覗き込むと、「どうしたの？　お腹すいた？」と言った。

「ゆ、ゆり子」と呼ぶと、僕はとうとう始まってしまったという恐怖で言葉が震えた。

「な。なあに……？」

そう答えると、ゆり子の顔から表情が消えていく。僕はただただゆり子を見つめるしかできなかった。するとゆり子の奇麗なシャツには、縦横無尽に次々と切れ目が入り、僕が何も言えないでいると、その切れ目はみるみる深くなった。

「どう、した、の？」とゆり子は僕に言ったが、その声はスローモーションになって、僕の鼓膜を殴った。

ゆり子の胸元からは、切れ目に沿って押し出されパーツが、バラバラと地面に落ちだした。そのパーツは勢いをつけながら次々に飛び出し、僕の胸元を貫いた。全てのパーツが飛び出すと、そこには吸い込まれそうな真っ黒な空間が広がっていた。

ゆり子はこんなにも真っ黒いものを作るほど、自分を責めていたのだ「私が悪かったから」きっとゆり子は自分の悪いところを端から端まで沢山並べ、ひとつづつクリアしようとしたのだろう。ゆり子の取り組みが痛いほど伝わって来た。けれどそんなにも黒いものを溜めながらも、ゆり子は僕に問いつめるようなことは今まで一度だって無かった。だが、今僕の脳裏に浮かぶのは朱里の姿だった。

「おれ、好きな子ができたって、言った、でしょ？」

そう言うとゆり子は顔を強ばらせた。僕は声を震わせながら話を続ける。
「昔、つき合っていた彼女で、あか……」
「もういいよ、高山くん、もう言わなくていいよ……」
ゆり子は冷静に僕の話を遮った。
「え、あ、だから……」
「もうやめて……よ」
ゆり子は顔を手で覆うと泣き出した。僕は何も言えず、ただただその姿を見ることしかできなかった。泣き声は次第に声にならないような静かな嗚咽となった。指の間からは筋のような涙が流れた。
僕は目を瞑ると「これでいいんだ、これでいいんだ」と朱里の姿を無理やり思い描いた。
「高山くん……？」
ゆり子が涙交じりの声で話しかけると、僕は慌てて目を開けた。そこには目に涙を溜めたゆり子が、見たこともないような悲しい顔で僕を見ていた。
「高山くん、幸せになってね……」
子鹿のようなくりっとした目は、今日は涙に濡れながら太陽の光を反射させていた。
「うん……」と僕は俯いた。
そのあとしばらくの間、ぽつりぽつりと言葉を交わしたが、何を話したかは覚えていない。すると会話が途切れ、沈黙の時間が続いた。その沈黙を使い、ゆり子は僕との関係を必死に断ち切ろうとしているかのようだった。しばらくゆり子は思考を巡らしたあと、静かに立ち上がり何も言わずに立ち去った。僕は席に座りながら、ただただゆり子の後ろ姿を目で追い続けた。

ゆり子と別れたその日に、僕はすぐに朱里と会う約束をした。忙しくてとても会う時間が取れないと言うので、僕が朱里の家の近所まで、真夜中バイクを飛ばした。1時間ほどの巡航中の間ずっと朱里のことだけを考えていた。会えると思うと胸が張り裂けそうになり、自分の心が破裂するんじゃないかというほど体中が泡立った。
ここを抜ければあと少しで約束の場所、という所で突然車の流れが止まった。渋滞の列の脇をゆっくりと進み抜けようと思い、渋滞の先頭まで出ると完全に通行止めになってい

た。酷い事故だった。
僕は焦った。ちょうど陸橋の真上辺りだったから、歩道もなくUターンもできなかった。かといって反対車線に出るにも、中央分離帯には隙間がなかった。八方ふさがりだった。
バイクを来た方に押してじりじり下がることもできないことはなかったが、警察やら消防があちこちにいて気が引けた。時計を見るともう２０分は立ち往生している。事故処理もとても終わりそうな気配はなかった。
「こんな時に……」仕方なく朱里に電話をして事情を話した。もうすぐの場所なのにとても進めそうにないと。すると朱里は「バイクをそこに置いて、歩いて戻ってきて、その陸橋の手前まであかりが行くわ」と言った。
すぐにバイクを止めて、騒ぎに紛れながら橋を戻った。あとでどんな処分があってもいい、とにかく朱里に会いたい。ただそれだけだった。
僕は車の脇を縫うように全速力で陸橋を降りようとしたが、思うように進めなくてじれったかった。だがもうすぐ朱里に会えるんだ。そう思うと今まで感じたことのないような生きる力を感じた。
僕は正しい。これが僕の生きて行く道だ。そう思いながら走った。
陸橋を降りると朱里もちょうど自転車で着いた所で、笑顔で手を振っていた。僕は駆け寄り、自転車に乗ったままの朱里を、しっかりと抱きしめた。

しかし朱里は、時間が経つに連れて電話や約束などを次々に破った。朱里は仕事中やサーキットにいる時には決して電話には出ないし、だからと言って自分からマメに連絡するような性格でもなかった。僕にできることはただ待つことだけだった。
一ヶ月ほど途絶えていた連絡がついたある日、僕は朱里に打ち明けた。
「朱里……、朱里は忙しく飛び回っていて大変かもしれないけど、いつ来るかも分からない連絡を待つのは苦しいよ。電話の時間が大幅に遅れるなら一度連絡をくれたら嬉しいけど……」言った瞬間僕は後悔した。自分で話していながら、朱里が一番嫌がる言葉を並べていたからだ。
「……みなみさん、重いよ、朱里は遅れてもちゃんと電話をするから待っていてほしいの。電話くらいでそんなこと言われたら、あかり押し潰されちゃう」
期待通りの、期待を裏切る言葉が返ってきた。

＊

軽快にインドの空の下を走ると、僕らはニューデリーの外れまでやってきた。車はすいすいと細かい道を進み、小さな店舗が軒を連ねる通りで止まった。

知り合いのお茶屋さんがあるからとついて行くと、そこにはインドの名産の紅茶がひな祭りのように並んでいた。インドでガイドを雇うということは、もれなくお土産屋さんも付いてくるということだった。

店に入り、一番奥のテーブルに案内されると、窮屈だったがバックパックをすぐ横に置いた。すると、「狭いから、荷物こっちに置いていいですよ。」とクマールさんは僕の荷物を持ち上げて、3テーブルくらい離れた入口付近に勝手に置いてしまった。

僕の置かれた荷物の周りには、沢山のお客さんが行き交っており、すぐに僕の荷物は人々の影で見えなくなった。僕は焦った、ヘッドバッグには鍵がしてあるが、何をされるかわかったものじゃない、「あ、こっちでいいです」と荷物を戻した。

クマールさんは「？」な顔をして「そうですか」と言った。ちょっと気まずかったが、識者たちの「荷物は肌身離さず持て！」の言葉を信じた。気を取り直そうと小指を立ててティーを飲んだが、僕は親切を踏みにじったのではないかと動揺していた。カップの水面も僕の気持ちと連動しながら揺れた。なんとなく気まずくて、「マサラチャイ」と書いてあったブレンドの茶葉を購入したが、それがいったい何のお茶なのか全くわからなかった。

次にクマールさんは、待望のカレー屋に僕を連れて行った。舗装もされていない裏路地をのんびりと車を走らせて、やはり小さな軒のカレー屋さんに到着した。どんなカレーが食べられるのか僕の期待の針は振り切れていた。

出てきたカレーは、日本のインドレストランで食べるような濃厚でクリーミーで、フカフカのナンが付いていた。「うまい！　あの機内食はなんなんだったんだ」僕は機内で食べた食事がイマイチで、「本場のカレーなんてこんなもんか」とがっかりしていた。夢中でナンをカレーに付けてむしゃむしゃと食べた。一番驚いたのは、ナンだった。いまこのテーブルで焼いたのか？　というくらい軽くてふわふわのあつあつ、端はサクサクだっ

た。思わず「おー」と唸った。
しかし一食７００円。インドでは破格の高さ。高級料理だった。
それからもぐるぐるとお土産屋を転々とした。両手にはよく分からないインドの名産でいっぱいだった。クマールさんは宿の前に車を止めると、「明日は、８時に 迎えに来まーす」と言ってクラクションをけたたましく鳴らしながら帰っていった。

案内された部屋は、旅行代理店でばっちり手配した安心の宿だった。安くはなかったが、艶かしいインドの雰囲気を兼ね揃えた部屋で、なかなかのムードだった。まずはじめに、古めかしいエアコンのスイッチを入れた。「ぶーん」と耳障りな音が響くと、冴えない風が吐き出された。しかしそれすらもこの旅のムードを演出した。
バッグから携帯電話を取り出すと、朱里のページを開いた。僕はこの旅のために、とても高い通話料金定額国際電話旅行らくらくパック、という舌でも噛みそうなプランも契約していた。その為に機種端末も変更したし、思った以上にお金もかかった。もちろん朱里と話したいがためだ。
しかし朱里の身勝手が思い起こされると、僕はなんのためにここまで旅に来たのか。いっそ電源を落として日本にでも送り返してやろうかとも考えたが、それもまたできなかった。
自分を試すような一世一代の旅ですら、万全の準備で電話を用意してしまう。そして当然メールひとつ届いてはいなかった。
携帯電話のアドレス帳を開き、画面を指で触りながらページを送った。「せ」のページまで送り、芹澤ゆり子と表示されている箇所で指を止めた。ゆり子のナンバーをしばらく見つめた。名前の下に配置された赤い受話器のアイコンをしばらく見つめると、指でコツンと触った。
いつもと違う聞いたことが無い「ツー」という音の後に、聞き慣れたコール音が３度鳴ったあとゆり子が電話に出た。
「もしもし、ゆり子？」
「高山くん…、よね？　この番号…、えー！　今どこ?!　なんで?!」
ゆり子は着信番号を見て慌てていた。その声を聞いた途端、どこまでも平和な日向ぼっこが脳裏に浮かんだ。

「今デリーだよ。ぜんぜん連絡できなくてごめんね」と自信ありげに伝えた。
話しながらベッドの脇まで歩き、窓のカーテンを開けた。そこには街頭の明かりや街並を歩く人々が小さく見えた。
「そんなのいいのよ、高山くんが無事だったら。デリーってことはインドよね？」
「うん、インドに来たんだ」
「えー、すごい！　私今ちょっと感動してる。一人旅なの？　それともツアー？」
「一人で来たよ」
「すごい！　言ってた通りの一人旅なのね。すごいわ。ほんとうにすごいよ！」
「あ、ありがとう」
想像以上の賞賛を浴びると、ゆり子といるときはいつもこんな感じだったんだなと、思い返していた。ゆり子の一つ一つの言葉は、子どもが欲しがるクリスマスプレゼントのように、僕の胸を打っていった。
「自分でも自分の行動にちょっとびっくりしてるけどね。へへ。今日デリーに着いて、今宿でのんびりとしてるところだよ」
「えー、宿?!　すごい、うわあ、ほんとにそこはインドなのね」
「まあね」と言うと、僕の頬は緩んだ。
「どう、インドは暑いの？　人のるつぼ？　また何か産まれちゃってる？　ははは」
ゆり子との心地いい会話に、僕の涙腺は震えた。
「もうぽかぽか産まれちゃってるよ、どうしようこれ止まらないよ、ははは。一杯産まれてるからメールで送ろうか？」
「あはは、送って送って、何が産まれちゃってるの？　もうおかしい。ははは。ねえ、添付して、メールに添付して送ってよ。こっちでプリントして飾るわそれ、ははは、もうおかしい、お腹痛い」
まるで付き合ったままの二人が、昨日楽しかった会話の続きをするかのように、ゆり子はいつでも僕に対して心を開いた。しかし僕は、そのゆり子の器の預金残高を、自分の趣味嗜好で乱れ使うヒモ男のようだった。ゆり子はそんなヒモ男の、旅の道程を詳しく知りたいと言った。
「気楽な個人旅行だから、あくまでも予定通り行かないと思うけどさ」とヒモは良い気になって、伸びきった前髪を大げさにかきあげるように言った。
「オッケー、もちろんよ。いいの、把握してるだけで安心だから。こっちでもパソコンで

辿ってみる。一緒に旅行してるみたいじゃない？　また気が向いたら電話してね」
ゆり子の６０００キロメートル離れた言葉の抱擁は、僕のハートを優しく包んだ。
「うん、通話料金定額で契約したから、またかける……」
あ……、言わなく良いことまで言ってしまった。ゆり子に癒された僕の節穴は、マッコウクジラだって通しかねなかった。
「そっか……」ゆり子は気がついた。
「彼女は、元気……？　まさか一緒に来てるの？　来てないわよね、来てたらそんな高いプランにしないもんね？　ふふふ」
「そそそ、そんなことないよ、一人だよ、旅は１人でするもの、だから！　だからー！」
ガラス越しに見るくらい、今の僕の本心を確認するのは簡単だったのだろう。
「そんなに慌てないでよ、ふふふ。いいのよ高山くんが誰と一緒でも。元気で幸せだったらわたしは嬉しいから」それはゆり子の嘘偽りない本音に聞こえた。
「いっしょじゃ、ないってばっ！」
今、目の前に豆腐の角でもあれば、頭の一つでもぶつけてやりたい心境だった。
「でも彼女とうまくいってるみたいね、悩みでもあれば聞きたいくらいだったけど、そんな必要もなさそうね」
黙ってしまった。ゆり子の優しさに、僕の本音は徐々に制御を失っていった。
「うまくいってるかわからないよ、向こうはほんとに勝手だし、いつも振り回されてるよ」
「そうなの？　そうか……やっぱりね。わたしなんか嫌な予感がしていたの。その人の話を聞いたとき、高山くんにはなんか合わない気がしたの、あ、ごめんね……」
「いいよ、全然。うん、それはそうかもしれないよ、本当にすごく疲れるよ……」
「高山くん」
「ん、なに？」
「前にも言ったけど、今なら……、今ならまだ、戻れる、よ？」
「……」
不意打ちのような再びの告白に、僕の脳は揺れた。しかし僕の本音は、煮え切れない「間」を作った。
「ふふふ、通話料定額なんでしょ？　もっとインドの話聞かせてよ」
ゆり子に空港の有象無象のことや、灼熱のガラス扉事件シャーミー&アジェイの顛末

や、クラクションの無駄打ち話など、ノリノリで話した。なぜか僕の目には涙が滲んでいた。

「もう、あはは、何言ってるかわからないから、インド人意味がわからない、ははは。高山くんもおかしいよ、あー、お腹いたい、腹筋割れるじゃないのよ、もうー」

「でさー」

「いやいや、もうやめて、言わないでお腹痛い、あはははは」

「なにも言ってないから、あはははは」

「あはは、しわが増えちゃうよー」

結局2時間夢中で話をして、僕らの腹筋はヨレヨレになった。

そしてゆり子の近況を聞くと、どうやらヤマハレーシングチームへの配属の話も出てきているようだ。エリートとしての道を歩むゆり子のことがまた眩しくて、少しだけ胸がちくりとした。

そしてゆり子はこんな話をした。

「そうだ、ちょっと聞いてよ、この前会社の友達にね、わたしが元気が無いからって言って、行きたくもない飲み会に無理矢理連れて行かれたの。高山くん、多香美って覚えてる？　金属加工の2課の同期の子なんだけど」

僕は「元気が無い」のワードに心を重くした……。

「覚えてるよ。あのちょっと太目なのに、やたら速く動くうるさい子でしょ？」

「あはは、ひどいこと言わないのよ」

しかし多香美の機動性は事実だった。以前多香美と会議の準備をしていると、信じられない大きな声で「その書類取って！」と叫んだ。慌てて書類を渡すと、その体の脂肪量からは想像もつかないほどの速さで、右に左にクイックにテーブルに書類を配置した。

その動きはとてもデ〇の動きじゃなかった。書類の配置が終わると、意味の分からない「おうっ！」という声まで上げていた。僕は違う意味で、その動きに釘付けになった。

「動ける〇ブ」の称号がぴったりな多香美ちゃんだった。

「それでね、多香美が連れて行ってくれたその飲み会にさ、ある男の子が来てたの。わたしと同い年なんだけど、いきなり『君は何がすき？』って詰め寄るの。びっくりして、その子が何がって言うから『私はバイクのレースを見るのが好きよ』って言ったの。そしたら『違う、そうじゃなくて、わかんないかなー、誰が好きなのかってこと！』なんて言うのよ、ほんとに失礼でしょー？　自分で何がって聞いておいて誰が、とか言ってさ。ちょ

っと苦手なタイプよ。前にばっかりでてくるタイプ！」
「それで、なんて言ったの？」と言いながら、僕はよくわからない不安に肩を叩かれた。
「もちろん高山くんって言ったわ、あ、誤解しないでね、わたしがただ想っているだけだから。高山くんは気にしないでいいのよ」
「あ、う、うん……」
もちろん僕は、壁に頭をぶつけてしまいたいほど気にした……。
「そもそも多香美なのよ」
「なにが？」
「多香美がね、その男の子にわたしのこと話したみたいなの、『ちょっと元気づけたい子がいるから男の子揃えてよ』なんてさ。多香美がなんて言ったかまでは聞かなかったけど、その彼すごい前のめりでわたしに聞いてきたの。でも、片思いです。って言ってやったわ。あ、言ってやったって何よね。ははは」
「あははは……」と僕は極めて軽薄な笑いを浮かべたが、なんて答えていいかなんて、今の僕にわかるわけもなかった。
そのあとも僕らは会話を楽しみ、日本が日付を回ると僕らは電話を切った。
そのあと僕は、思い切って朱里に電話をかけた。しかしコール音が虚しく鳴るだけだった。僕は12度目のコール音を聞いたあと一度電話を切り、ふた呼吸ほどおいてからまた電話をかけた。今度は5度目のコールで電話を切った。手に持った携帯を、「ぽとん」とベッドに落とした。

次の日の朝、窓の光がまぶしくて目を覚ます。しかし一瞬自分がどこにいるのかわからなくてキョロキョロとすると、奇妙な模様の壁紙が見えて、「ここはインドだ！」と思い出した。
朝の光は、昨日の夜の電話をめぐる群像劇など、綺麗さっぱり吹き飛ばした。その気分のまま、着替えもせずにホテルの中を遊歩した。昨日の夜にはわからなかった、あちこちに建物をつなぐ渡り廊下があって、そこを歩きながら辺りの様子を見て回った。遠くにはガイドブックで見たインド門が見えていて、すぐ下を覗くとホテルの前は3車線の大通りだった。ここはかなり都心のようだった。
街の様子を見ていると、胸が踊るような思いが湧き上がり、僕は後ろに手を組み、「これが旅ねえ、これが旅なのねえ」とニヤニヤくねくねと闊歩した。

約束の時間になるとまた重い荷物を担ぎ、ホテルを出た。目の前の大通りを渡った所にある、黄色い看板のオートバイ屋さんの前でクマールさんを待った。しばらくすると、クマールさんが元気に手を振りながら現れた。

「おはようございます。お待ちいただけましたか？　朝の気分はどのような模様ですか？石の上にも三年ですか？」

今朝は昨日にも増して流暢で、日本語に潤滑が効いていた。

今日はデリーの街を歩いて案内してくれるということで、さっそく繁華街に向かった。まだ朝も早かったが、気温は３０度を優に超えていた。朝のインドの空はどこまでも青く濃く広がっていて、僕は大きく深呼吸をした。

ここはインド。正真正銘のインド。どこを見ても上を見ても下を見ても、純度１００％のmade in INDIAだった。クマールさんを見ると、陽気に歌を歌っていた。どこかで聞いたことのありそうなインド独特のメロディーで、この澄んだ青い空にとてもよく似合っていた。僕はクマールさんの口ずさみに耳を傾けた。

＊

「今日は雨だからお客さんは少ないな」

厚い灰色の雲を見ながら思った。

通勤に使うスクーターの、ヤマハシグナス１２５のシートに半身で腰をかけると、キーを差し込みイグニッションをＯＮにした。片手でブレーキを握りながらセルスターターのスイッチを押すと、一瞬でエンジンはかかった。少しだけアクセルを煽っていると、エンジンは安定したアイドリング状態になった。

そのままエンジンを温めながら、僕は雨具を上下しっかりと身に付けた。足元はゴアテックス素材でできたノースフェイスのトレッキングシューズを履いた。溝もしっかり掘り込んであり、砂利への追従性は素晴らしかった。山奥のサーキットの雨の日の仕事では、このような靴が必須だった。

以前雨の日に、ぺらぺらのスニーカーでコース脇の植え込みを登ろうとして、滑り落ち

てしまったことがある。勢いよく茂みに突っ込むと、太ももに枝を突き刺してしまった。大した傷でもなかったから、絆創膏でも貼って済まそうと思ったが、オーナーはきちんと病院へ連れて行ってくれた。その時ピットにいた、知り合ったばかりの朱里も駆け寄ってくれて、「他は大丈夫？」と気遣いながら、オーナーのワンボックスで一緒に付き添ってくれた。

「あ、やば、もう出なきゃ」

時計を見た僕は、慌ててバイクにまたがり家を出た。山道にさしかかると雨はさらに強くなった。土砂降りの中、鼻歌交じりで軽快に飛ばした

赤信号で止まり、空を見上げた。山の峰の向こうの暗雲を見つけると、ヘルメットの中から、「あっち行け」と言って、フーフーと吹き飛ばした。しかしその暗雲は、このあと僕の頭上で雷雲を轟かすことになる。

出勤時間を少し過ぎ、ようやくサーキットに到着した。コース上では、同じく朝一のシフトだった慎ちゃんが、すでに清掃作業を始めていた。

「しんちゃん、ういーっす」

「ういー」

僕と慎ちゃんはいつものように気だるい挨拶をした。僕らは同い年でレース好き。数少ない友達の一人だった。慎ちゃんとは、サーキットを走ればお互い同じくらいのレベルだったから、二人でよく、ジュースをかけてタイムアタックなんかをした。勝敗は１２勝９敗で僕が勝ち越しだ。今日もやる予定だったが、この土砂降りでは……、なしだな。

オープン作業も終わり、ピットで雨宿りをしていた。

「今日はこれ、誰もこないっしょ」

アスファルトに雨が勢い良く落ちる様子を見ながら、慎ちゃんはラッキー、というニュアンスで言った。

「だよね。ひとまずおれ、下のヘアピンの泥見てくる。この雨じゃやばいでしょ？」

「ういー、しくよろー」

ここのサーキットは、高低差があるのが特徴だった。登ったり下ったりというコースは、特にブレーキの技術で勝敗が決まる。ブレーキの技術を磨くために、はるばる遠くからやってくるライダーも珍しくはなかった。

一番低い箇所にあるヘアピンには、山から流れ出る水が泥を運んできてしまう。それを取り除かないと、コースはオープンできない。雨の日の厄介な仕事だった。何度もスコッ

プを振るい、泥を崖の下に捨てていると、すぐに体からは湯気が出た。
泥の掃除が終わり、息を切らしながら無線で「ＯＫ」と伝えると、「さあ、みなみ選手のタイムアタックです」と慎ちゃんは走って戻れと挑発した。
息を切らしながらピットに戻ってくると、慎ちゃんが受付の窓から指を指している。その方向を見ると、朱里のワンボックスが止まっていた。朱里はすでにマシンを下ろしていて、走行の準備をしていた。「朱里だ！」まさか雨の日にこんな場所で朱里に会えるなんて。お父さんも隣にいて、僕は小走りで駆け寄った。しかしピットボックスは重苦しい雰囲気だった。
「よおみなみちゃん！」
「どうしたんすか？　今日平日ですよ？　この雨、走るんですか？」
「こいつさ、先週の全日本で千香がいきなり優勝しただろ？　結果見た？」
お父さんがそう話すと、朱里はこちらも見ずにむすっとした。
「は、はいネットで……、でも朱里も表彰台に立ったんだからすごいっすよ」
「うるさいっ」朱里が小さく怒鳴った。
「え、あ、ごめん……」
「まあ、こういうことだ」と言うと、朱里のお父さんは、やれやれと両手をひっくり返した。
「どういうことだよ……」
僕には理解できなかった。
朱里はそのレースで３位表彰台を獲得し、それだけでも快挙なことだった。しかし今シーズンから朱里と同じ、全日本選手権１２５ccクラスに参戦を始めた後輩の千香が、朱里を差し置き初優勝を果たしたのだ。それはレース界では事件になっていた。話題の女性ライダーと言えば「朱里」のはずだった。だがその後輩の千香が優勝を果たした瞬間、マスコミも朱里は過去の人、という扱いになっていた。朱里の普段からの鼻に着く言動もあり、特にネットでの誹謗中傷は酷いものだった……。
「朱里の奴千香に負けて、しかも優勝までかっさらわれたもんだからよ、暴れちゃって大変だったんだよ、『あんな膝も擦れなかった千香に負けるなんてあたしもうおしまいよ！』つってさ。今日はみなみちゃんに任せるから話聞いてやってよ」
朱里はレースで負けたその晩、レース関係のニュースを見ていたパソコンを投げ飛ばし、お父さんに詰め寄って泣きじゃくったそうだ。

「聞くって言ってもあれじゃあな……」と朱里を見ると、人を寄せ付ける気は全くなさそうだった。
「もう手に負えなくてよ、そういう時は走るしかないじゃん？　で、みなみちゃんとこ走り行くか？って聞いたら『行く』っつーからさ」
「え、そうなんです……」か？　と言い切る前に「じゃっ」と言ってお父さんは逃げるようにバス小屋の中に入っていった。
その話を聞いた単純星からやってきた、一か八か単純郎（市川團十郎）は「ここは俺の出番だ」と、雷が降り注ぎそうな歌舞伎を、舞切る決意をした。
朱里は今では、押しも押されぬ日本屈指のトップライダーだ。雨の日のミニバイクコースを走ったところで、朱里に得られる物などあるはずはなかった。しかし、筑波サーキットの練習走行枠は、常に満員でパンク状態。特に朱里が乗るような、シビアにチューンされた１２５ccのマシンを走らせるには、専属のメカやチームスタッフの帯同が必要だった。
朱里はこれから乗るＮＳＲ５０に火を入れると、険しい表情でアクセルを回し、「ブ、ワーン、ブ、ワーン」と、エンジンを暖めた。
その様子を眺めていると、朱里と目が合った。エンジンをかけたまま、睨むような目つきでこっちに来る。僕の心臓はダムダムダムと鼓動を始めた。「よーし、一か八か……」と念じ、着てもない着物の胸元をぎゅっと締めた。
「みなみさん？」
「は、はひー！」一か八か単純郎の初舞台の幕が上がった。
「何でそんなおどおどしてんのっ、イラつくわ……」と朱理が腕を組みながら凄む。
「いや、何でもない……よ」僕の一か八か単純郎の襲名は、わずか1分で終わりを告げた。
「こんな雨の日にどうしたの」
「関係ないでしょ……。チッ」朱里が露骨に舌打ちをすると、僕は着物の袖を噛みながら、梨園を飛び出した。
「今日ラップマシンこの雨じゃ動かないでしょ？」
「そうだね……」
「あかりのタイム計ってくれる？　で、どこが悪いか教えよ。みなみさん見るの得意でしょ？　走るのは得意じゃなくても」

「う、うん……」
その言葉に、プライドが小刻みに反応した。朱理の持っているコースレコードには及ばないが、僕だってこのコースでは、トップ争いもできないわけでもなかった。
「下の泥は取ったけど、最初は気をつけて。雨が深いから、できるだけコーナーの入り口ではインについて、マシンは立てたままくるっと旋回させる。あとはアクセルを開けられるだけ開ける。いい？」
「んなの分かってるっ！」そう一喝すると、朱里はマシンに跨った。
僕も少しムキになり、分かりきっていることを言ったのだが、朱里の怒鳴り声に、「ひゅん」となった。そして雨の中、先に逃げた一か八か単純郎のあとを追った……。

この雨の中、朱里は全日本の本番で使うレーシングスーツを着ていた。スーツには埋め尽くさんばかりのスポンサーロゴが貼られており、お尻の当たりにはアルファベットで大きく「ＡＫＡＲＩ」とプリントされていた。ピンクとイエローで複雑にデザインされた、オリジナルペイントのヘルメットを被り、レインコンディションではつけないような濃いスモークシールドが装着されている。「カシャンッ」と勢いよくシールドを下ろすと、朱里の表情は何も見えなくなった。荒っぽくギヤを1速に入れると、コースへと向かっていった。その背中からは攻撃的な集中力が沸き立っていて、その気迫は、先週の全日本選手権の続きを走ろうとしているかのように見えた。
今サーキットにいるライダーは朱里だけだった。朱里は後続車の確認もせず、コースインした。コースに出た途端、アクセルをフルスロットルにし、思い切りの良い半クラッチを当てた。マシンは甲高い排気音を響きわたらせながら、ロケットのように1コーナーに向かっていった。リアタイヤからは激しい水しぶきが上がった。
朱里は土砂降りの中でも、恐ろしいスピードでマシンを切り返し、あらゆるコーナーを弄ぶかのように、路面をタイヤで掻きむしった。朱里の性格からは想像できないような、スムーズで正確無比なマシンコントロールを駆使し、コーナーとコーナーを最短距離で繋いでいった。長い間レースを見てきた僕の目ですら、恍惚とさせるライディングだった。
しかしいきなりのこのハイペースは、電気で直にタイヤを温めるタイヤウオーマーを使っているとはいえ、無謀なペースだった。雨の日の一周目とは思えないようなスピードで、最終コーナーをレッドゾーンまで回しながら立ち上がると、朱里はホームストレートを通過した。

「やってんねー。朱里ちゃん。大丈夫かあれ？」と言って慎ちゃんは呆れた。
「やばいねあれ……」
慎ちゃんと目が合うと、二人で両手を振り下ろしながら、朱里にペースダウンのサインを出してみた。けれどそんな僕らのサインなど無視するかのように、朱里は中指を立てながら通り過ぎ、ますますペースを上げていった。ストップウオッチを見た僕は「うわっ」と思わず声を上げた。朱里の今通過したタイムが５５秒３だった。ビギナークラスのライダーなら、ドライコンディションでも出せないようなタイムだ。いくらグリップの良いレインタイヤを履いているからといっても、めちゃくちゃなスピードだった。実際あちこちのコーナーでタイヤは滑り、何度もバランスを崩していた。そしてさらにラップタイムを更新した次の周、最もスピードの出る高速コーナーで、朱里の体は宙に舞った。そしてちょっとまずいことになった……。
朱里以外誰も走っていないコース上で、高らかな排気音を響かせていたＮＳＲ５０は、Ｓ字コーナを右、左と華麗に切り返したあとの高速コーナーを深いバンク角で巡航していた。コーナーの立ち上がりでアクセル開度を大きくしたその瞬間、タイヤのグリップは許容範囲を超え、大きく滑った。
朱里は倒れそうなマシンを膝で支え、なんとか体勢を立て直そうと粘りに粘った。しかし朱里ほどのライディングセンスがあったとしても、この異常なスピードで超えてしまった許容範囲を、もう元には戻せなかった。
滑っていたタイヤは、失っていた意識を取り戻したかのように、急激に路面に喰らい付く。その反動でマシンは、フレームのしなりと、サスペンションの反力が合わさり、恐ろしいほどの力を発生させた。しっかりとハンドルを握っていた朱里だったが、何度もマシンを縦に揺らすその反力は、最後は恐ろしいほどのモーメントを発生させた。必死に両膝でガソリンタンクを挟んだ朱里だったが、最後はその力には逆らえず、大きく身体を真上に浮かせると、次のマシンの反動で激しく突きあげられた。朱里の体はいとも簡単に宙を舞った。
５０ccのミニバイクとはいえ、ここまで大きくなった挙動を押さえつけることは不可能だった。朱里の体は肩から激しく路面に叩き付けられ、アスファルトを転がった。インフィールドにいた慎ちゃんが「あっ！」と大きな声を上げると同時に、僕は走り出していた。
その瞬間、唯一咆哮を上げていたマシンのエンジンは止まり、一気に静寂がサーキット

に広がった。聞こえていたのは路面を叩く、雨音だけだった。
朱里は頭から落ちたように見えた。僕は手に持っていた掃除用具を投げ捨てながら、慌てて走り寄った。近づくとマシンは芝生の上で倒れていて、濡れたエンジンからは蒸気が上がっていた。フロントタイヤはまだ虚しく回転を続けている。そして転がっているマシンからかなり離れたところで朱里はうずくまっていた。
「よう、だいじょうかようー」
僕が着くとすでに、慎ちゃんが朱里に声をかけていた。
「朱里大丈夫?!」
「ああ、くっそー！」朱里は倒れたまま、僕の声を無視するように叫んだ。叫ぶと激しく痛がった。
「慎ちゃん？　これ?!」
僕は朱里と慎ちゃんを交互に見ながら慌てた。
「大丈夫だよ。みなみちゃんも落ち着いてよ」
「う、うん……」
「けどこれ、鎖骨……かもな」と慎ちゃんは言った。
「そうか……」
「朱里ちゃん、起きれるか？」
慎ちゃんは、体を起こすのを手伝うと、わなわなしている僕に、「大丈夫、大丈夫だって」と言った。
レース経験が豊富な慎ちゃんは、ライダーが動いていて、ヘルメットに損傷が無い場合、むやみに焦ったりはしない。慎ちゃんが言うように、朱里は幸い頭は強く打たなかったようだが、やはり左の肩を抑え苦しそうにしていた。慎ちゃんが支えると、なんとか歩き出した。
「痛っ！」慎ちゃんに支えられ、左腕を抱えるようによろよろと歩き出したが、その痛み方は尋常ではなかった。後ろから肩の下がり具合を見ると、鎖骨を折ったことは間違いなさそうだった。
ピットで待っていた朱里のお父さんも特に慌ててはいなかった。自分自身も、何度同じように吹っ飛ばされて怪我をしたかわからない。今の朱里に起こっているすべてを把握していた。しかしもちろん朱里は、冷静でなんていられなかった。
「お父さんっ、朱里次いつ走れる？　いつ?!　いつなのよっ?!　これじゃ次のレース走れ

ないよっ！」と、左腕を抱えながら叫んだ。
「朱里、今は病院に行こう、大丈夫だか……」と話しかけようとすると、
「うるさいっ！　みなみさん、なんであかりのペース見ててくれなかったのよ！　もう……」そう言うと、睨んでいた僕から視線をそらせた。
「え？　そ、そんな……」
僕は何も言えず、ただ怒りを撒き散らす朱里を見ているしかなかった……。
ハイエースに朱里を乗せて、病院に運んだ。僕は自分のバイクで、後に続いた。
ヤマハのレースドクターの高橋先生が開業している「高橋整形外科」に向かった。「レースの怪我ならここ」と言われるくらい、日本中から怪我を負ったライダーが集まった。サーキットへの復帰率の高さは日本一、と言われる名スポーツドクターだった。しかもその病院は、サーキットと同じ山の中にあって、お父さんと一緒に迷わず選んだ。
病院に着くと、すぐにレントゲン室に運ばれた。
「ポッキリ逝っとるわい。えっと、すぐバイク乗りたいんか？」診察室で、レントゲンを見た高橋先生は、軽い口調で言った。
「来月レースがあるから、すぐに乗りたい」
「じゃあ、手術になるけど良いか？　乗らないなら、コルセットで安静で一ヶ月」
「手術してください、すぐに乗れるの?!」
「まあ根性があれば、2週間ってとこか」
「先生お願いします。乗れるならなんでもしますから……」
「アメリカの梅本は知ってるな？　あいつはヘリで飛んできて、骨繋いで5日後にはレース出てたからな。ふっふっふ」
「お願いします……」
「よおし、じゃあまずはスーツを切るか」
話が終わると、すぐにレーシングスーツはハサミで切られた。ジャストサイズに作られたスーツを脱ぐには、鎖骨を折った状態では不可能だったからだ。しかし切ったからといって、スーツを脱ぐのは簡単なことではなかった。先生は慣れた手つきで、皮切りばさみを使って切っていった。
呻きながらスーツを脱ぐと、診察台の上に乗せられた。痛いのは肩だけじゃないようだ。朱里は、体にフィットするインナースーツ姿のまま、身体をしならせながら身悶えていた。それによってくびれた腰はより強調され、ほっそりと伸びた手足は、筋肉なんてな

いんじゃないかと思うほど華奢だった。それなのにあんなにも軽やかにレーシングマシンをコントロールしているのかと思うと、僕は尊敬よりも先に「欲」が疼いた。この呻いている艶かしい体が、マシンを自在に乗りこなす姿を想像し、「欲」を感じたのだ。

ほっそりとした身体に反発するかのような大きな胸は、息苦しそうにインナースーツの中にしまわれていた。僕はもう、いつからその体に触れられていないのだろう。その想いが僕の全身を欲で包んだ。

「みなみさん……」

「え、なに?!」

朱里に呼ばれると、すぐに口元まで近づいた。

「あかりは大丈夫……、入院だから、みなみさん帰って」

「え、でも……」

僕の心の中の、小さな愛の砂山は、さらさらと形を崩していく……。

「見られたくないの、こんな姿」

「でもなにか手伝うこと……」

「いいから、帰ってっ！　痛っ、もう！」

僕は肩をびくっと怯ませて立ちすくんだ。僕の愛の砂山は、みるみるとその形を失っていった。

朱里のお父さんが僕の目を見て小さくうなずいた。出番を失くした僕にできることは、帰ることだけだった。診察室から駐輪場までの通路をのろのろと歩いているうちに、ずっと疼いていた欲は姿を変え、怒りとなって僕を追い詰めた。

駐輪場で自分のバイクを見つけ、ミラーに刺してあったヘルメットを抱えると、気だるく股がった。見上げると、空はまだ黒い雲で覆われていて、雨もまだ当分止みそうにないだろうと、嫌気がした。そして帰ろうと思いハンドルを握った瞬間、僕の何かが弾けた。

「朱里といるといつもこうだ！　朱里は僕のことなんて必要じゃないっ、なんでだ！　僕はこれほど朱里を必要としているのに、朱里が、朱里が……」

ハンドルを叩きながら、何度も叫んだ。近くを病院の職員が通るのが見えると、僕はすぐに叫ぶのをやめ、そのままハンドルのメーターパネルに身を伏せ悔しさをかみしめた。顔を上げると、もう雨具なんか着けるのも面倒臭くなり、ヘルメットだけを被ると、そのままバイクを走らせた。

サーキットに戻ると、ずぶぬれの僕を見つけた慎ちゃんが声をかけてきたが、僕は何も

答えられず、荷物だけを取ると、再びバイクに股がり家に帰った。山沿いのいくつものカーブを走り、交差点の赤信号で止まると、ふと我に返って自分の身体の感覚が蘇った。
「パンツまで濡れてるよ……」と僕は赤信号に向かってつぶやいた。
雨で冷たくなったお尻の感覚は、少しだけ朱里のことを忘れさせてくれた。

＊

荷物を纏めたバッグを担ぎ、デリーで1週間ほどお世話になったクマールさんと、駅のホームを目指して歩いていた。
「どうでしたかデリーは？」
「カレーも美味しかったし、とても楽しかったです！　帰りも寄りますから！」
「よかったです。　バラナシもとっても楽しいですよ」
「はい、はしゃいじゃいます」
僕はインドにも少し慣れてきて、もうどこへ行っても、なんとかなるような気がしていた。
「でも体には気をつけてくださいね」
「はい」僕はゆっくりと頷きながら言った。
僕はバッグパックの脇に刺してあったペットボトルの蓋を「ペキ」っと開け、ごくごくと飲んだ。
「インドの水、本当汚い。この先も、ペットボトル以外の水は飲まないように、ね！」と言うと、ニコッとウインクした。
「はい、もちろんです」
そんな当たり前のことは、もう頭の中にこびりついていた。
帰りのデリー滞在では、クマールさんとガイドの契約はしていなかったが、タイミングが合えば訪ねてみようと思った。するとクマールさんは、「戻ったらここに電話してくださいね」と言った。僕は目を輝かしながら、「はいっ！」と返事をした。
クマールさんの名刺には、プライベートな電話番号が書かれていた。僕は小さい肩掛けの鞄の中に貰った名刺を大事にしまった。

ホームに着くと、バラナシ行きの列車はすでにホームでスタンバイしていて、あちこちのドアからインド人が乗り込んでいた。僕はクマールさんに握手をして別れた。

しかし、しばらくすると、

「みなみさーん！」

クマールさんが手に何かを持ってゆっくりと走ってきて、僕の手に「はい」と言って渡した。それは一見、太いキュウリのようなものにも見えるが、野菜なのか果物なのかもわからないようなものが、半分に切られていた。それはとても瑞々しく、これでもかというほどに、太陽の光をキラキラと反射していた。僕はそのキラキラの光を手で隠すような身振りでクマールさんに、「キラキラがハンパない！」と言った。

「それ、電車で食べてくださ……」

クマールさんがそう言いかけたところで、扉は閉まった。数えきれないほどの人を乗せた列車は、汽笛を上げながらゆっくりと動き出した。クマールさんは窓の外で、僕に向かい両手を胸の前で合わせていた。僕はその何かわからないものを持ちながら、それに応えるように何度もうなずいた。

クマールさんが遠ざかって小さくなると、目の前には、僕の手に持った物と同じ物を売っている屋台が見えた。並べられたキュウリのような物に、上半身裸の兄ちゃんが、バケツから水をばっしゃばっしゃと勢い良く浴びせていた。「ははーん、あれはあのキュウリのような物が乾かないように水をかけているんだな、そうかこのキラキラは、あの水だったんだな、ほほー」と言って僕は得体の知れない食べ物に「がぶりっ」と齧りついた。そしてこれが信じられないほどの美味さだった。瓜科独特の瑞瑞しい食感の中に、メロンのような風味も漂う。この熱波地獄のインドでは、最高のご馳走だった。

「はーなんだこれ、うめー、インドのなんだかわかんねーこれ、ほんとうめーな～」

僕は最後の一口を「ゴクリ」と飲み込むと、ほわ～とした気分になった。車内は心地よくエアコンも効いている。しばらくは熱波ともおさらばだ。

呑気なアホ面をぶらを下げ、インド長距離列車の窓の外に向かい、

「さぁ、すっぱーつ！　すんーこー」

と吉幾三風に叫ぶと、拳を小さく振り上げた。

シートに深く座り込むと、本格的な旅の始まりに想いを馳せた。

手を頭の後ろで組みながら、「ふふふん」と走る列車の音に耳を澄ませた。僕は有頂天

だった。有頂天のあまり、頭にバンダナをくるっと巻いてカッコをつけた。そしてこれはもう、どこからどう見ても旅人にしか見えない。ということにしようと思ったが、変だった。

列車が街を外れると、外の風景は同じような田園風景が続いた。外を見てるだけでは飽きてきてしまった。そこで思い出す。「そうだ！」と言って、バックパックの口を開くと、そこにあったハルキの文庫を取り出した。

憧れだけでは終わらせずに、僕はインドにハルキを持って来た。感無量を噛みしめると、ゆっくりと一枚、そしてまた一枚と、神妙にページをめくった。

一枚ずつ恍惚と読み進めていくと、徐々にハルキの孤独な世界が浮かび上が……。

「え？」突然僕の身体に異変が起きた。どこからかともなく騒がしい音が聞こえてくる。え、何？　何この音？「キョロキョロ」おれ？　誰？　何？　しかし周りを見回しても僕以外乗客はいない。「はっ！」と次の瞬間、僕は腹に猛烈な違和感を覚え、頭を垂れた。

そう僕だった。突如僕の腹で、夏祭りでも始まったかのような騒ぎが起きた。いやおかしい、昨日の夜から変な物なにも口にしてな……。「ぅぁあ！」そ、そうだ……。ホームでクマールさんがくれた、あれ……、あの屋台の兄ちゃんがかけていたみ、ず……。あの水、かあ……？

「どこのチンピラだっ?!　ぅ……」と、突然僕は、歌舞伎町の街中で、チンピラに刺されて倒れるヤクザになっていた。ひざまづき手のひらを刺し口に当て、その手を顔の前に持ち上げる。「な！　なんじゃこり…」と言いかけた時、血など付いているわけも無い手の平を、表や裏にくるくると返しながら「おかしいな？」と言っていた。当たり前である。水あたりで血は流れない。

やばい、本気でやばいぞおれの腹……。

インドの旅、最重要項目。どんな危険を冒してでもこれだけは絶対に守れ！　と識者たちから苦言を呈されていた「水」だった。「インドの水はマジでやばいぞ、当たると死ぬぞ」と、まるで銃で撃たれるなよ。とでも言い出しそうなほど、識者達全員が忠告をしていた。すっかり忘れ、気前よく食べたあのキュウリみたいなもの。で、結局なんて食べ物なんだよ、あれ……。

あまりの激痛に、一体なにが起きたのかパニックになった。気の弱い僕は、本気で死まで予感し始めた。しかし心配は要りません、ただの水あたりですから。僕は「もーなにこれー」と言って列車のトイレまで内股で急いだ。

内股の僕の頭の中は「死」で一杯だった「これは新種のコレラか？　新種の熱病か……？」何度も言うが、ただの水あたりである。僕はトイレを見つけて慌てて走り込み、勢いよく扉を開けると、勢いが良過ぎてまた扉が閉じそうになったところを、腰を預けてねじり込んだ。

「い、いかん、燃料が、もれ、る……」全身の筋肉を尻の穴に集結させ、ようやく空母「インドープライズ」に燃料ぎりぎりで着艦した戦闘機（おれ）は、汗だくでパンツを下ろした。便座前の計器は激しく鳴り響いている。僕はそのあと、経験したこともないような推進力を経験し、お尻の中心から愛を叫んだ。

ひとしきり愛を叫ぶと、なんとかお腹も落ち着き、席にもど……れない！　戦闘機は再びインドープライズへ華麗にインメルマンターンを極めた。を数度繰り返すと、ようやく座席に戻ることができた。僕は応急処置として持っていたミネラルウオーターの水を1本、ほぼ一気に飲み干した。しばらくすると悪寒がやってきて、僕は毛布に包まった。

インドに来て、初めて朱里と電話が繋がったのは、バラナシへ向かうこの苦しみの列車の中だった。

デリーで電話に出なかった朱理。そのあとはこちらからも電話はしなかった。どこかで意地になり、どこかで心配して欲しい気持ちがそうさせた。

本格的に熱が出て来たようで寒気が止まらない。快適なエアコンも、今では邪魔になっていた。

僕は身を震わせながらも、朱里の声が聞きたくてたまらなかった。

僕は何度かためらったが、発信のアイコンに触れた。

「だれ……？」

9度目のコールで朱里は電話に出た。警戒するような声。僕だと気がつかないのか……？

「もしもし、朱里?!　みなみだけど」

「あ、みなみさん？」

朱里は、「もぐもぐ」と何かを食べながら話しているようだった。

「そう、今デリーからバラナシまで電車で移動してるんだけど、水にあたっちゃって大変なんだよ……」

「え、よくきこえない」
強い口調で聞き直されて、僕は怯んだ。
「え、だから、水に当たっちゃって……」
「えー、具合悪いの？」
「うん、最悪だよ……」
「あははは、おもしろい、いきなり水に当たるなんて何やってるのよ」
「う、うるさい」
朱理らしい先制パンチを浴び、方膝をつきうなだれた。
「まったく、なに食べたのよ？」
「ガイドさんにもらった食べ物がさ……」と言って悲劇の顛末を話した。
「まったく、なんでそんな警戒心ないのよ。ウケる」
「え、なんで、ほんと大変だったんだよ」
僕のイライラが漏れる。
「そっか、今はどんな感じなの？」
「ちょっと落ち着いたけど、寒気がしてる」
「温かくしてね。大変だったね」
朱理の優しい言葉が現れて、僕の自尊心に火が灯った。
「まさかここまできついなんて思わなかったよ。エンジン焼付くなんて……。クランクもダメんなった」
「やばいねそれ、そこじゃエンジンばらせないもんね。あはは」
「ばらせないからドレン抜いたよ、もうオイルだだ漏れだよ、お腹ピーコンピーコン鳴っちゃって」
「ひゃー汚い！」
バイクが僕らを繋いでくれる、共通言語だった。
朱理との繋がりを感じ、心が充電されていく。
「そう言えば、みなみさんもうインドに着いてたんだね、あかり忘れてたよ」
忘れてた……。朱理は僕の心の充電コードを、片手で簡単に引き抜いた。
朱里は僕の地雷をことごとく踏んだ。地雷から地雷、またジャンプして地雷に着地。
天才か？　天然か？
僕は何度も朱里に、インドへ出発する日などを伝えていた。朱里も「気をつけてね、あ

かりも応援してるよ。電話もしてね」と言った言葉を真に受け、高額な海外の通話プランも契約した。しかし、僕がインドに着いてることすら知らなかった口ぶりだった。すると都合よくゆり子の姿が浮かんだ……。

「朱里い、メールに書いたじゃんよ〜？」と僕はくねくねと媚びた。

「あ、そうだ、そうだった！」

「次はガンジス川よね？」

「そうその通りだよ、知ってるじゃーん。あはは」とから笑いをすると、僕は「期待」と書かれた鎧をどさっと下ろした。しかし、期待を手放した僕にサプライズが起きた。

「そうだ、みなみさん？」

「な、何かね？」思わず課長のような口ぶりになった。

次は一体どんな技で僕を葬り去ろうとするのかと、「課長 島みなみ」は身を構えた。

「何かね？　って何よその言い方あ」

「あ、あ、でどうしたの？」

「そう、あのね、インドのブッダ・インターナショナル・サーキットって知ってる？」

「ブッダ？　ああ、確かライディングサウンズでスーパーバイクの高宮さんがレポートしてたよね？」

「そう。そこよ。再来週そこでね、急遽マシンテストすることになったの」

「へー、インドで？」そう答えると、何だか話が興味深いことになってきて、僕は携帯を逆の耳に持ち変えた。

「うちのチームがインドの「IDM」というメーカーのパーツを使うことになって、挨拶がてらそこでテストしようっていうことになってるの。挨拶がてらって軽く言うけど、チーム全員できてほしいって言ってるらしいの。旅費やらマシンの輸送費やら全部そのメーカーが持つんだって。完全招待よ。もうマシンは送ってあるし、インドって景気良いのかしらね？」

「すげえなそれマハラジャか？　大富豪の息子かなんかじゃない？」

「知らないわ、でもなんか楽しそう。あかりインド初めてだし」

そっかあ、朱里インドに行くんだ、インド楽しそうだ……。ポヤンポヤント考えていたが、あれ？　っと何かに気がついた。

「でね、そのサーキットからデリーまで車で1時間くらいらしいの、来週の終わりにはデリーに入って、テストが終わったあと一週間くらい観光やらで滞在するの。でね、そのと

き抜け出すから、みなみさんに会いに行っていい？」
「へ？」
朱里と会う？　朱里が会いに来る?!
日本にいてもほとんど逢えなかったのに、イ、インドで会える……？　朱理に引き抜かれた充電コードが、僕のヒマラヤ山脈に突き刺さった。そして本当に会えたら……。充電は２０００％と表示され、僕のインド象が「パオーン」と盛大な咆哮を響き渡らせた。
「……なみさん？」
「……」
「みなみさん？！」
「あ、は、はい！」
慌てて自分の意識をかき集める。
「ねえ、もう、聞いてるの？　朱里会いに行ってもいいの？」
「も、もちろんだよ」と僕は何度も言い続けた。
「ああ、しつこい！　もう。そういうの嫌い」
「わかった、ごめんごめん……」
もしかして地雷を仕込んでいるのは、僕の方なのではないだろうか。
「もう。その頃みなみさんどこにいる？　デリーじゃないならやめておこうかな」
「ま、待って待って、その頃はたぶんデリーにいる予定だから……、えっとえっと」僕は頭の中で自分の旅の予定を最大パワーで検証した。
「大丈夫！　その時ちょうどデリーにいるよ！」僕は二つほどの予定を、アクアポリスの丘の向こうに吹っ飛ばした。
「ほんと？　あかり、みなみさんに会いたい！」
「おれも、会いたいよっ！」
「じゃあまた連絡するね。みなみさんも、また電話してね」
そう言うと朱里は一方的に電話を切った。
僕の体調はそのあとさらに悪化した。ひたすら毛布に包まってうずくまったが、今の僕は希望に満ち溢れていた。僕は包まりながら、「あかりい〜」と、にゃんにゃんと萌えた。
僕はお腹との親密なコミュニケーションをとりながら、命からがらガンジスの聖地、バラナシ駅へ到着した。

バラナシ駅に到着すると、もう既に真夜中だった。しかしホームでは、こんな時間でも大勢の人が行き交っていて、いたるところで荷物に丸まって眠ったり、休んでいる人たちも沢山いた。

よくわからない文字の案内板を見ながら、なんとか駅の外に出ることができた。外はこの時間でも４０度はありそうな熱気で、手負いの僕の体力を奪った。

クマールさんからは、ガイドさんを紹介してもらっていた。駅前のロータリーで待っていてほしいという約束だったが、駅の構内と違い、ロータリーは人がまばらだった。しかし見渡してもそれらしい人はおらず、街灯も少なかったからなんだか心細かった。

ロータリーの広いアーチ状の階段に座って待つことにした。時間もちゃんと伝えてあるし、心配はいらないだろうと思った。

周りに目をやると、いたるところがゴミの山で、、ときおりギョッとするくらい大きなネズミが姿を現すと、小気味好い加速で僕の目の前を通過した。きっとネズミにとって夜は掻き入れ時なのだろう、がんばれねずみくん！　と僕はエールを送った。しかしエールを送られたいのは自分の方だった。

それから３０分くらい経つと、「ほんとに来るのか？」と不安が襲った。あんなに良くしてくれたクマールさんの紹介だから、きっと来るはずだ。

少し離れた場所に、燦々と明かりが付いる露店が見えていた。喉が乾ききっていて、あそこなら何か飲めるだろう。と、重たい腰を上げた。ずっしりと肩に食い込むバッグを背負いながら、明かりが付いている露店を目指した。

近づいてみると、それは日本でいうところのキオスク。といったところだろうか。沢山の新聞が並んでいたり、よくわからない派手な色の品物が、天井からぶら下がっていた。

狭いお店の中で、若いお兄さんがせわしなく動いていた。店の脇に冷蔵庫があって、ガラス扉の中を覗くと、そこには見たこともない色をした、瓶入りのファンタ並んでいた。しかし、この色は一体なんだ？　何味だ？　僕は眉をひそめながらその瓶を睨みつけた。

お兄さんに――「コレ、イクラ？」と声をかけた。

「ファーイブ、ルピー」と店員の兄ちゃんはすぐに答えた。

財布から５ルピーをチャリンと鳴らしながら渡した。兄ちゃんはにこっとすると、栓を抜いてくれた。見知らぬ国の、真夜中ひとりぼっちも、その笑顔に救われた気がした。

おでこに瓶を当てて、熱を冷やす。とても気持ちがいい。あらためてファンタのロゴを

まじまじと見つめ、乾きにまかせてひと息で半分ほど飲み干した。味は結局わからないが、冷たいだけで格別だった。

駅に着いてからもう、1時間以上が経っていた。僕の不安はピークに達し、自分で宿でも探さないといけないかな。と考え始めていた。

僕はまた同じ階段に戻り、しゃがみ込んだ。少し歩き廻り過ぎたのか、フラフラとした。もうすでに宿を探す気も失せていた。すると後ろから、「みなみ さん、でーすか？」と片言の日本語で誰かが僕に声をかけた。ぼーっと振り向くと、長身で少し茶色い髪の、二枚目なお兄さんが立っていた。

「すぐ、わかりましたよ」とバラナシでのガイド、オムさだった。僕はここでも純白に輝いたTシャツを着ていた。僕はよろよろと頭を下げた。

無事にガイドのオムさんとも合流ができ、挨拶もそこそこに車に案内されると、「よい、しょっ」と鉛のような体を車に押し込んだ。オムさんは申し訳ないとしきりに謝っていたが、僕は会えたことだけで嬉しかった。オムさんが急ハンドルで向きを変えると、「ごとんっ」と窓に頭をぶつけた。「あはははは」とオムさんは陽気に笑うと、どこどこと悪路を走り出した。

車は数秒おきにデコン、ボコン、と跳ねた。だがどんなに悪路を跳ねようとも、最果ての地で救出されたこの安心感は、筆舌に尽くしがたかった。しかしオムさんは、それを打ち消すかのような、恐ろしいことを言い出した。

「よる、バラナシえき あぶないねえ」とオムさんは、あぶなげな日本語で話しを始めた。

「あなた、よく、よるに ひとりで いたよ！」とオムさんは満面の笑顔で言った。

「え！　なんで?!」

1人にさせたのはあんたじゃないかっ。

オムさんの話によると、去年ここで一人旅の日本人が刺され、荷物を奪われたのだと言った……。僕はそれを聞いた途端無言になってしまった。僕の無言の不安を察知したガイドのオムさんは、「だいじょぶ、そのにほんじん しんでないから。カカカカ」と言って高らかに笑った。僕はオムさんの顔を「かっ」と見た。まったくインド人は……。

すると自分が刺された場面がリアルに想像されていった。

……刺されて倒れているところを、一人の美しいインド人女性に助けられた。彼女は「私の家に来て」と言って僕に肩を貸すと、部屋まで案内した。そこで僕は気を失った。

朝の光で目が覚めると、その麗しの美女の後ろ姿が見えた。この美女は誰だろうと思いながら「ねえ」と声をかけた。その女性が振りかえると、それは朱里だった。そして僕に向かって「悪い夢よ」と言った。すると隣の部屋からゆり子が現れて僕を見ると「すべて夢よ」と言った。

直後、僕はガバッと身を起こし意識を取り戻すと「ちがうちがうちがう、ちがうーっ」と絶叫した。何が違うのかは自分でもよくは分からなかったが、とにかく違ったのだ……。そんな肩の荷の重い妄想は、また僕の熱をぎゅーっと上げた。

ひとり謎の絶叫をする日本人が面白かったのか、オムさんは「ち、がーう、ち、がーう」と真似をしながらハンドルを叩き、大うけだった。

オムさんは「オウケイ、オウケイ」と言いながら、街灯が一本もない暗闇の中を、ヘッドライトだけを頼りに車を走らせた。

それからさらに15分程、真っ暗でガタガタと揺れる悪路を走ると宿に到着した。建物の照明はもう全て消えていて、裏口のような扉から中に入った。奥から眠たそうなホテルの人らしき男性がやってきて、オムさんと一言二言話すと、その人は中に戻って行った。おでこに手を当てると、さらに熱が上がっているようで、言われるがまま部屋に案内された。部屋に入るとすぐに、オムさんは明日の予定を言った。

「ネクスト モーニン、スリー オクロッ、デパーチャー オウケイ?」

「オウケイ、オウケイ」と応えると、オムさんは満足そうにうなずいた。オムさんはまた、「ち、がーう、ち、がーう」と僕の真似をしながら容器に部屋を去った。

オムさんが帰ると、真夜中の部屋は耳鳴りがするほど静かだった。部屋を見渡すと、あまりインドを感じさせない、モダンな造りの清潔な部屋だった。汗ばんだ全身をさっとシャワーで流し、すぐにベッドに寝転んだ。

けたたましく鳴った目覚ましで、ガバッと起きる。窓の外はまだ真っ暗で、それは完全な夜だった。体を起こすとまだ悪寒はしたが、寝る前より幾らかはましだった。

携帯電話を開くと一件の着信があった。明らかに電話番号ではない数字の羅列が表示されていたが、僕には何も理解できなかった。この電話番号を教えているのは朱里とゆり子だけだった。僕は一先ず携帯電話をバッグにしまった。

ロビーに降りて僕は愕然とした。それはもう「宿」なんかではなく、「豪華ホテル」と

言った方が早そうな煌びやかさだった。だだっ広い燦然としたロビーには、きらっきらの装飾があちこちに施され、どこの壁にも複雑なレリーフが彫り込まれていた。スーツを着たフロントマンが、この時間からすでに、きびきびと仕事をこなしていた。あっけにとられた僕は、口をぽかんと開けて「なんだこれ……、やっちまったのか？」と真っ先に財布を心配した。そして僕を見つけたオムさんは、立ち上がって大きく手を振った。インド人はどうしてみんな、こんなに大きく手を振るのだろうか。

「すごい豪華ですね？」

握手をすると、僕は見渡すように言った。

「そう、ホテールインディア、ここ バラナシ いーちばんね！」

「えー！　……」とそのあと僕は、宿代を聞いて絶句した。

貧乏旅行をするつもりも無かったが、かといって豪遊するつもりなんてもちろん無かった。お札がぱたぱたと飛んで行く幻覚が見えて、僕は思わず空を掴んだ。

「きょう さいこう。てんき、ばっちりね！」とオムさんは上機嫌で空を指しながら言った。オムさん自身の天気の方も、どうやら上々のようだった。

ほっかほかに温まり切った笑顔で現れたオムさん。もしかしたら寝てないのか？

オムさんの肩は、明らかに温まりきっていて、いつでも豪速球を投げてきそうなやる気を放っていた。僕はミットを構えると、「オッケーです、行こう！」と言った。

ガンジス川までは、車でバラナシの街中を縫うように進んだ。街中といっても、ほとんどの路面はがたがたで、道の両脇には凄まじい量のゴミが散乱していた。そしてやっぱりオムさんも、ヒンドゥー教というよりも、クラクション狂で、文字通り狂ったように鳴らしている。やはりインドでクラクションは、楽器なんじゃないかと思った。

そしてここでも牛が幅を利かせている。何が通ろうと決して避けない。周りがまったく気になっていないようだ。牛はあちこちで「もおー」と教科書通りに啼いていた。

オムさんは道路に無造作なまま車を止めると、僕を日の出を見るポイントまで案内した。

しばらく歩いて見えてきたのは、大きな建物が建ち並ぶ、僕が夢見た「ダシャーシュワメード・ガート」だった。

すでに人ごみになっているガーとの中心部まで来ると、オムさんは「ここでみる ひので、いみがある」と陽気さは消え、神妙にゆっくりと目を閉じながらそう説明した。

オムさんは、このインドで生まれた生粋のヒンドゥー教徒なんだなと感じた。このガートに立っていると、オムさんの今までの人生までもが受け取れるような気がした。

オムさんは僕をその場に1人にすると、またしばらくしたら迎えに来ると言って、どこかへ行った。それでもよく見ると、離れたところで座るオムさんが見えて、僕を見守ってくれているかのようだった。きっとオムさん自身が、1人で心行くまで「感じる」ということを、何より大事にしているのだろう。そんなオムさんを見ながら僕はにんまりと微笑んだ。

しかし戻った後で聞いてみると、昨日奥さんをずいぶんと怒らせてしまって、隣で話すのも気まずいから、ちょっと離れてぺこぺこと電話してただけさ。「なんで、みなみさん、わたしみてわらってた？」なんて言うもんだから、インド人にもわかりやすく、「ズコッ」と言ってやった。

インド最大の宗派である、ヒンドゥー教の三大神の1人「シヴァ」、そのシヴァ神の豊かな髪が天上界から降り注いだ聖なる水を受け、ヒマラヤ山中に降り注がせた。それが今、目の前で悠久の時をかけて流れ続ける、ガンジス川の源と言われている。僕は今、神の流れの前にいるのだ。感慨深さに浸りながら、夜明けが始まるのを静かに待った。

対岸の地平線が赤く染まり始めると、僕は目を離さないようにじっと見つめた。そして闇は徐々に赤く染まっていく。その色彩の変化を見つめていると、ゆり子と仲良くなってすぐの頃、彼女が話してくれたことが思い返された。

＊

膝から子鹿が産まれたあの日にゆり子が誘ってくれたのは、ヤマハのイベントだった。試乗会とかサイン会とかが行われていて、グランプリライダーまでもが参加した大々的なものだった。ゆり子は「こんなイベントに来てくれる女の子なんていないし、一緒に来てくれて嬉しい」そう喜んでいた。

それからも僕らは二人でよく、コーヒーを飲みながらおしゃべりをした。

会う約束をするたびに浮かれたし、会ったあとは、こんな僕とはもう二度と会ってくれ

ないんじゃないかと不安に押しつぶされた。
日を追うごとに、何が起きたわけでもないのに、職場の人の表情を見ることにも怯え、世界中の人から、「お前なんか価値がない」と思われているんじゃないかと、気をもむようになっていた。今までだって、そんな風に感じることは山のようにあった。しかし、圧倒的なゆり子の人間としてのクオリティを目の当たりにすると、自分の価値の無さという真実が一層際立ち、「こんな自分なんて、ゆり子さんが必要とするわけがない」と、僕は自分で自分の価値を壊していった。

ある日、待ち合わせのコーヒーショップの前で待っていたゆり子が、僕に気がついて微笑んだ瞬間、心に溜め込んでいた何かが弾けた。「僕なんか僕なんか」とブツブツ言いながら逃げるように引き返してしまった。
「ねえ、待って、どうしたのっ？」
後ろでゆり子の声が聞こえていたが、僕はそれを振り切るように走った。ゆり子は声をかけながら僕の後をついてきた。次第に虚しさが募ってくると、僕の足は動かなくなった。
「ねえちょっと、なんで逃げるのよ、ハアハアハア……」
追いついたゆり子は、息を切らせていた。
「ごめん」
「もうきみ、ほんと足速いのね」
「うん……」
「いいから、ね、ちょっとこっち来て？　座ろうよ」
ゆり子は、少し先のバス停まで僕を連れて行った。
「どうしたの？」と言って、僕をベンチに座らせた。
ゆり子は心配そうに僕の顔を覗き込んでいる。けれど何も言えなくて、俯いたまま膝を握りしめていた。
僕らが会うようになってから、1ヶ月くらいが経っていた。会社のロビーで待ち合わせをすることがよくあったから、すぐに話題になった。さえない地味男と、高嶺の花子さんとの組み合わせに、みんなが興味本位で振り返った。しかしある一部はザラザラとざわついた。
それは僕の直属の上司で、ゆり子とのこと知ると、途端に態度が変わっていった。あっ

という間に僕はその上司の標的となり、派手ではないが、陰湿な嫌がらせを受けることになった。それ以来、会社の中でもあらゆる視線に怯えることになった。

けれど会社では、ゆり子は僕を見かければ声をかけ、いつでもニコニコと楽しそうだった。かといって僕と会っているからって、会社で嫌な目に会うこともなく、相変わらず人に囲まれていた。その格差を目の当たりにすると、僕の枯れ木のような自尊心なんか、一瞬で吹き飛ばされた。

「ねえ、自分の気持ちとか、手に負えなかったりしてる？」

ゆり子はそう言いうと、座る位置を僕の方に少しずらした。

「……ゆり子さん、なんで僕はこんなにも人のことが気になってしまうんだろう。人とうまく距離を取ったり、近づいたりできないし、いつも誰かに怒られそうな気がしてる。僕なんて、生きる価値もない……」

気持ちを吐き出し過ぎたことにはっとすると、恥ずかしさでまた俯いた。そして会社のことなんかよりも、もっと根本な苦しみを吐き出そうとしていた。

「そっかあ……。大丈夫よ、わたしがついているから」と言って、僕の肩にそっと手を乗せると優しくさすった。

「うん……」僕の肩に、優しい温かさが伝わった。その温かさを感じると、きっとこの人が僕を救ってくれる。救ってほしい。すがるような気持ちでいっぱいになった。

「きみの気持ち、よくわかるよ……。ねえ？」

「ん？」顔を上げてゆり子の顔を見た。

「きみはわたしのこと、健全な精神の持ち主だって思ってない？」

「ゆり子さん、すごいよ。いつだってニコニコしてて、人に囲まれててさ……」

「きみ、だいぶわたしのこと誤解してるわね。ふふふ」

「え、だって……」

こんなスーパーなゆり子の何を誤解すればいいのか、何もわからなかった。

「わたし、高校に入ってしばらくすると、怖くて学校に行かれなくなっちゃったの。わたし、機械工学を専攻したくてね、私立のちょっと遠い学校に入学したの。だから知ってる子、誰もいなくてさ。わたしいつも引っ込んでるような地味な子だったから、逃げ場がないというかね……」

「そうだったんだ、そんなの信じられない……」
「そうよ。いつも学校のみんなから嫌われてるって思ってて、みんなの話す言葉をいつも見張ってた。その学校は芸能コースもあったから、美人がうじゃうじゃいるの。ほんとよ。だからわたし、自分が惨めで仕方がなかった」
「ゆり子さん、めちゃくちゃ美人じゃないか、そんな……」
「あはは、ありがとう。うれしいわ。でもね、その頃わたしだって人のこと気になりすぎて、頭が変になりそうだったのよ。すごく苦しかった」
ゆり子は俯きながらそう言った。
「やっぱり信じられないよ……」
「わたしだって、当時の自分からしたら信じられないって思うわ」
ゆり子は僕の顔を見ながら微笑むとそう言った。
すると、バスが停まり何人かの乗客が降りた。バスが過ぎ去ると今度は次のバスを待つ人が現れた。
「歩きながら話さない？」ゆり子はそう言うと立ち上がった。
僕らは歩きながらまた話をした。
「さっきは逃げちゃってごめんね」
「あはは、もうびっくりしたわよ」
前から自転車が来て、僕らは縦に並んで避けた。そしてまた自転車が過ぎ去ると横に並びながら歩いた。道路の反対にあるイタリアンレストランは賑わっていて、外のテラスでも楽しそうに食事をする家族がいた。
「ねえ」
「なあに？」
「ゆり子さん、どうしてそんなに変われたの？」
「そうね、ん……、変わる……。というか、わたしは何も変わってなんかないわ。今でも人との繋がりを怖がることなんて山のようにあるし、他人の目なんかいつでも気にしてるよ」
「そんなの嘘だよ」
「あはは、嘘じゃないよ。色々なことにビクビクしているよ」
「ほんとに？」
「仕事のことも、仲間のことも、ヤマハに戻れるのかだってわからないの。でもわたしそ

ういうの、どんな結果でもいいやってどこかで思ってるの」
「え、戻れないの？」
「うん、ヨーロッパは不景気みたい。世界に出るならＵＫのヤマハに配属されないといけないし、今向こうも厳しいんだって。でもいいの、わたしはわたしだから、起きたことを受け取ろうって。父がそういう性格なのよ」
「お父さんって、ヤマハワークスの監督って言ってたよね？」
「うん、父も、何度も何度も日本に返されて、それからまた諦めずに日本の会社でコツコツ頑張ったのよ挫折こそが俺の誇りだ。なんて言ってさ」
「かっこいいね」
「小さい頃はずっと父はヨーロッパだったから、わたしほとんどお母さんと二人暮らしみたいなものだったの。父がこっちに戻されてたときは、色々話を聞くようになったの。それでね、人ってこんなわがままでもいいんだって思えるようになったの」
「お父さんそんなわがままなの？」
「そうよ、家に帰っても絶対家事なんてやらないし、ご飯が少しでも好きじゃなかったら平気で残すし。小さい頃はわたしが遊んでって言っても、やりたいことあったら、無視よ。ははは。でも、遊んでくれるときは本当に夢中になるから、わたしお腹抱えていつも笑ってた。わたし父のこと本当に好きなの」
　ゆり子は何かを思い出して、くくくと笑っていた。
「ゆり子さん、笑うの好きだもんね」
「うん、きみの笑いのセンスもわたし好きだよ。きみそれどこで習ったのよ。っていつも思ってる」
「そうなの？　えー、そっか」
　すると僕はそれに応えるように、突然「チョリソ！、チョリソ！」と叫んだ。
「それそれ、あはは。その突飛なの好きよ」
　僕はあははと頭をかいた。
「父はいつも、お前はそれでいいんだ。って言ってくれた。学校で馴染めなくても、失恋しても、失敗してもいつでもね。でも例外は、わたしが勝手にヤマハに就職したとき。それはもう怒り狂ってたわ。まあわたしが黙って受けたからね。でもお母さんが言うには、今はなんだか嬉しそうなんだって」
「いいお父さんだね……」

「一度、わたしが高校でもうダメってふさぎ込んでたとき、父は急遽日本に帰ってきてくれたの。わたしのために仕事放り出して……。それで言ってくれたの。『生きる価値なんて持たなくてもいいし、幸せになんかなろうとしなくていい、お前はもう幸せなんだから』って。『おれがいるし、母さんがいるだろ？　おれも母さんも、お前が元気に生きてるだけでこんな幸せないんだから。お前は生きてればそれで良い！　以上』そう言ってとんぼ返り。おかしいでしょ？」

「あはは」

ゆり子へのイメージが少し変わっていった。完璧だと思っていたのは、自分の思い込みなんだ。

「ねえ」

「え？」

「きみはそのままでいいと思うの。何も変わらなくていいし、落ち込んでいいし、寂しくても苦しくてもいいと思う。それがきみだと思うから」

「これで？　いいの……？」

「うん、そのままでお願いします！」といってゆり子は敬礼の真似をした。

「なんだか奇妙な気がするよ。これで良いなんて言ってもらったこともないし、自分もこれで良いなんて思ったことなかったから……」

「不思議でしょ？　人って結構わけわかんないことを信じて生きてるのよね。」

「これでいい」

「うん！　あなたは孤独でもいい。どう？　なんか楽にならない？」

「なんかおれ、大丈夫な気がしてきたかも」

「あはは、その調子、その調子！、よっ人気者！」

「まあ人気はないけどさ……」

「そんなことないぞ、わたしの一番人気だから。きみ」

「またあ、そんなこと言って」

ゆり子は手を後ろで組んで、ハミングを口ずさむ。

「楽しいね」とゆり子言った。

「うん、楽しい」と答えた。

「自分が楽しいと、自然に周りにも楽しいことが集まってくるのよ。高山くんもそうだから。わたしの楽しいこと」

僕は黙って頷いた。胸の奥がくすぐったくなり、もじもじとした。
ゆり子は「本当よ」と言って優しく微笑むと、少し前を静かに歩いた。
僕は少しゆり子の後ろを歩いたあと、また隣に並んだ。
すると、僕の手に柔らかな感触を感じた。ゆり子の指先が、僕の手のひらを小さく掴んでいた。その瞬間、僕の心臓ははちきれそうなほどの鼓動を始めた。僕はその手を握り返した。手のひらにゆり子の温度が伝わると、不思議と静かな安らぎを感じた。
僕らは手をつなぎながら、ゆっくりと歩いた。ゆり子の手から伝わる温度や感触は、僕に穏やかな未来を感じさせた。
「僕もそんな経験できるのかな」と前を見ながら言った。
「もちろん」
ゆり子は、言葉にならないような想いを含めるように、そう言った。
しばらく歩くと、遠くに駅の改札が見えてきた。僕は歩くのを止めて、道の端にゆり子を引き止めた。僕らは手をつないだまま向き合った。ゆり子は何も言わず、ただ僕を見ていた。しばらく見つめ合うと、僕はゆり子に「好きだ」と小さな声で言った。ゆり子は唇を緩ませると、僕の手を強く握り返し、静かに涙を流した。その潤んだ目で僕を見つめながら、「わたしも好きよ」と言って微笑んだ。
その言葉は僕にめまいを起こさせた。「緊張した〜、も、もうダメ」と言ってむにゃむにゃと膝をつく僕に、ゆり子は同じ目線にしゃがむと「大丈夫？　か、れ、し」と言って「ふふふ」と笑った。僕は震える声で、「よ、よろしくね、かの、じょ……、えへ」とはにかんだ。
「いいのかな、僕で？」
「わたしたち恋人よ」
「えー、えへへ」
僕らは少し長めのハグをして、お互いの思いをインストールし合った。
改札に向かい、僕らはつないだ手をぶらぶらとしながら歩いた。つないだ手の感触は、さっきと変わらない、暖かくて柔らかなものだったが、「好き」という言葉を交わした瞬間、「自信」という感触が僕の心に生まれていた。それは、今まであったゆり子との距離を急激に縮まらせた。
ゆり子はニコニコと嬉しそうで、何度も僕の顔を覗き込んでは、「すきだ、すきだ」と僕の真似を繰り返した。照れくさくなった僕は、

「このお、ゆり子ー」と言ってゆり子の脇をくすぐるそぶりをした。
「いやあ、あはは」と言って、ゆり子ははしゃぎながら逃げていった。
少し離れるとくるっと振り返って、
「このお、ゆり子〜」とまた僕の言葉を真似してからかった。
そのあと口に両手を添えると、
「ゆり子って、呼んでもいいーのよー」とゆり子は、嬉しそうな声で言った。
「さあ呼んでみて、きみの彼女は、ゆり子よー」と、今度は、道路の反対まで聞こえそうな大きな声で言った。その声は心地よく透き通っていて、ゆり子の素直な気持ちがよく表れていた。とは言え、僕は気恥ずかしくて、
「ゆり子、ゆり子」と小声で囁きながら走り寄って、「もうー、やめてよー」とニヤニヤしながらゆり子にくっついた。
「あはは」とゆり子は笑って、僕を迎えた。
それから僕らは手を絡めるようにつないだ。指と指が絡まる感触は、また僕の心に自信を与えた。
改札に着いても僕らは手を離せなくて、つないだ手を小さく振っていた。ゆり子はバスで、僕は電車。僕らはいつもここで別れる。しかし見つめ合ったまま、どちらも帰ろうとはしなかった。

＊

夜明けが始まった。太陽が生まれ始めの高度では、7階調の光の屈折により、まずは赤い光だけが網膜に届く。その赤が、徐々に闇を溶かし始める。赤は、じりじりと闇を侵食していくと、弧を作るように明るさを増す。そして太陽が顔を出していくと、次の色、オレンジに燃え上がらせていく。命の誕生だ。
夜明けが映りだしたガンジス川は、赤黒いオレンジ色に染まりだし、波間に漂う手漕ぎボートは、シルエットになって浮かび上がった。毎日毎日、ここガンジスで太陽は生まれ、そして死んで行く。目で見ることができる輪廻転生が、日々繰り返されていた。
荒野から神々しく昇る太陽の光は、次の色の黄金に変わり、命を爆発させるかのよう

に、その巨体を現していった。僕はその光の変化を、ただただ見つめた。
昇り来る太陽の一端が、これから現れるその全容が、想像以上の大きさなのだということを伝えていた。ジリジリとそれは昇り、みるみると巨大になっていく。その全てが姿を現すと、僕は全身を黄金色に染めながら、宇宙の威力に圧倒された。その存在に衝撃を受けると、フラッシュバックのような意識の断裂までをも呼び起こした。とてつもない早さで様々な記憶が目の前を流れていった。それにより僕の鼓動は、経験したこともないほどに速まっていった。僕は慌てずに、体中の隅々まで酸素を送るようにゆっくりと呼吸をした。するとまた鼓動は、何事も無かったようなリズムを取り戻した。
すると僕の胸の辺りには、揺らぎながら佇む太陽と同じような、暖かなオレンジ色のような色彩が広がった。そこに意識を通して触れるてみると、温かささえ感じられた。僕はその感覚達を、自由にさせた。僕は自分の中の何かと繋がった感覚を確かに感じた。それは次第に僕の心を満たしていき、
ゆり子がそばにいるかのような安心感に包まれた。
気がつくと夜明けの太陽は、もうすっかり朝の光となり、辺り一体を最後の7番目の色の紫に染めていた。

きらびやかな命の誕生は想像以上のインパクトがあった。「ふー」っと一息ついた。
「ぅぁっ！」
僕は汚い言葉を吐きながら、大変なことに気がついてしまった。
「写真っ！　写真、撮り忘れ、た……」
愕然とした。ガンジス川での最重要ミッションとも言える「夜明けの写真」を、すっかり撮り忘れていた。あんなに煮込んで買ったはずのニコンのカメラは、最高の出番を取り逃がした。朝の光を浴びる黒いボディーのニコンは、心持ちか寂しそうに見えた。
「もうしわけないっ」
カメラを目の前に崇めると、ありったけに謝った。
気を取り直し、登りきった朝日が差し込むガンジスに向けて、シャッターボタンを押すと「カシャッ」と気持ちの良い音が耳に響いた。そのままファインダーから目線だけを外すと、ニヤッとした。
カメラを下ろし、まじまじとガンジスの流れを目で追った。燦々と注ぐ朝日が、きらびやかに川面を照らしていた。ガンガーの流れは細かいうねりを無数に作り、その一つ一つ

が違う表情で光を照らし返していた。ガートには、沐浴をする人々が、無数に蠢いている。その活気には、人の生きる強さが現れているようだった。

感慨に浸った次の瞬間、僕は肩に蛇を巻いて写真を撮られていた。

ガンガーの夜明けに満足し、ふうっと腰を上げた瞬間、「へびねー、へびねー！」と叫ぶ蛇商魂二人組に捕まり、あれよあれよと言う間に、巨大な蛇を担がされていた。

何が起きたのかわからないうちに、苦笑いを浮かべた僕と巨大ヘビがニコンに収められた。インド人はしきりに「さいこうね、あなたへびのかみさまね！」と黄色い声援を上げていた。

そしてまた、あれよあれよと言う間にむしり取られた料金は、けっこうな金額だったのだろう。良いように蛇遣いにされた僕の姿を見つけたオムさんは、なんともいえない苦い笑いを浮かべていた。まったく「やれやれ」だ。

バラナシでの滞在もあと二日となった。その日は観光も終え、オムさんとも別れると、僕はホテルの前に立った。こうして改めて見ても、やはり僕には分不相応な豪華ホテルだった。「オムさんのばかあ……」とぼやきながら、キラキラと光るホテルの看板を見上げた。

俯きながら肩を落とし、「ばかあ、ばかあ」とつぶやきながらロビーを通ろうとした瞬間、僕は目を疑った。そこには、ソファーに腰をかけた朱里の姿があった。首が奇麗に見えるような髪を上げたスタイルで、すらっとした足をホットパンツから存分に伸ばしていた。僕は一瞬で気持ちが昂り、身を屈めながら小走りで陽気に朱里の元に駆け寄った。

「なになになになに?!　なによ、朱里ちゃん?!　どうしてここにいるのよー?!」

「『朱里ちゃん』じゃないわよ、あんなに何回もここに居るよってメールすれば覚えちゃうわよ。ふふふ」

「ちがうちがう、デリーじゃなかったの?!」

「ああ、それね。ふふふ。この前インドでマシンのテストがあるって言ったじゃない？」

「うん、でもそれもっと先じゃ？」

そう言いながら、僕はさりげなく身体の一部が触れるように朱里の隣に座った。

「ちょっ、ちかいよ、もうー」

朱里は僕を蹴り飛ばしそうな勢いだったが、久しぶりに見た朱里の顔がたまらなく可愛

くて、もうとろけそうだった。
「そう、日程自体は先なんだけど、向こうが『良かったら早めに来て観光でもしないか？』って。本当はテストのあとに予定してたんだけど、インドはもうそろそろ雨期だからって。まったく、肝心のマシンテストは雨での良いのかよって話しよね、まったく。ふふふ。それでどこが見たいって言うからガンジス川見たいって言ったの。そしたら飛行機でぴゅーよ。わずか1時間。みなみさんは列車で15時間だっけ？　ははは。しかしみなみさん、貧乏旅行じゃなかったの？　ずいぶん立派な所に泊まってるのねえ」
なんだろこのモヤモヤは……。朱里の相変わらずの口ぶりに、ざわざわとした何かがやってきた。
ガンジスで素晴らしい夜明けを見てから、僕はゆり子のことをずっと思い返していた。しかし触れられる距離にいる朱里の存在は、そのすべてを吹き飛ばすには十分な破壊力があった。
明かりは僕を愛してはいない。それはわかっているのに、気がつけばこうしてピコピコとしっぽを振っている自分がいた。
気持ちが抑えられなくて、「部屋に行こうよ」と手を握った。しかし朱里は、「お腹空いたからご飯食べようよ」と言って、繋いだ手をはぐらかせた。
いつものように朱理は、何一つ思い通りには動いてはくれない。そんなことはわかっていても、その吸引力に抗う力は僕にはなかった。
僕らはホテルを出て食事に向かった。
「朱里はいつまでここに居られるの？」
「明日の朝にはチームと合流するわ、今日は無理言って単独行動させてもらってるの。今日はみなみさんの部屋に泊まってもいい？」
「え?!」
「だめ？」
「あ、ああ、いいよ、もちろんいいよ！」
僕の気持ちはまた一瞬で華やいだ。はぐらかされて落ち込み、今は朱里が泊まると言ってはまた興奮した。こうして朱理は僕に安心する暇を与えなかった。常に気持ちは臨戦態勢。
朱里は今日半日、この街をふらついていたようで、「良い店を見つけたから食べにいこうよ」と僕をそこに連れて行った。店まで歩く途中、僕らはなぜか縦に2人で歩いた。僕

は手を繋ぎたかったが、なぜか躊躇してしまう。拒否されるのが怖い。
お店に着くと朱里は、流暢ではないが、問題なく英語でコミュニケーションをしていた。朱里はターリーという丸いお皿に沢山の種類のカレーが乗ったプレートを、僕の分も合わせて注文をした。僕はこのスタイルのカレーをインドではじめてみた。
「なにこれすごい！」
「えー、みなみさんインドに来てターリー食べてなかったの？　あかりもうこれで3度目よ。全然だめね」
僕のウイスパーハートは、またしょんぼりとした。僕の前世は「しょんぼり星の王子」そんなところだろう。チャンスに弱いエースで4番だった。
そしてそのしょんぼりとした理由はその言葉だけではなかった。原因のほとんどは朱里のメールだった。会話をしていても、食事をしていても、朱里はしきりに誰かとメールのやり取りをしていた。
だけど僕は何も言えず、ただただ朱里が電話を下ろすのを待つことしかできなかった。好きな人と一緒にいるのに、いや好きなのはおれのほうだけなのか……、そんなことはない、僕らは恋人同士だ。
僕の気持ちは、ざらっざらにささくれ立った。
そして気持ちを悟られないように夢中でカレーを食べた。朱里がメールをしている間、僕は食べるしか無かった。カレーに集中した。無理矢理意識をカレーにもっていき、そしていつの間にかほんとにカレーに夢中になっていた。信じられないくらい辛かったが、驚くほどの美味しさだった。夢中で食べた、そして夢中になりすぎて、
「……なみさん、みなみさんっ」
朱里が語尾を強めて僕を呼んだ。
「え、あ、な、なに？」
僕は他人からは見えない、仮想眼鏡を斜めにしながら、慌てて朱里に間抜けな顔を向けた。「おいカレー、うますぎんだよっ！」と朱里に怒られてどうしたらいいかわからない気持ちをカレーにぶつけた。カレーはただただそこで湯気を立てていた。
「もう、話しきいてるの？」
あ、朱里ちゃん、「それはこっちのセリフじゃないかー」と囁くように叫ぶ。
「あ、ご、ごめん、な、なんだろう」
僕の嫌われたくないウイルスが発症し、とにかく慌てて謝った。

「インドのそのメーカーのね……」

朱里が何か話をしていたが、僕はもうこのターリーの虜になってしまっていた。インドにこんなすばらしい料理があるなんて……。明日からはこの「ターリー」一本にしぼろう！　昨日までの宿のレストランで、長いお米のチャーハンをビールで極め続けていた自分を呪った。旅しろよ自分！　しかし会計でこのターリーの値段を知ると、しょんぼり星に帰りたくなった。びっくりするほど高かったのだ。そりゃ美味しいはずだ。

僕らはそのあとは会話も弾み、朱里のマシンテストの話題や、僕のインドでのこれまでのあれやこれやなどを話した。朱里は僕のインド滞在記にお腹を抱えて笑っていた。特に蛇遣いの話には大受けだった。

朱里とつき合ってから、こんな楽しい会話あっただろうか。僕はこの時間を心の底から楽しみ、気分はすっかり「うきうき星のプリンス」へと変貌していた。

帰り道、僕らはホテルまで手を繋いで帰った。食事が終わると、朱里の雰囲気もどこかリラックスしたように見えた。そしてなんということでしょうか、朱里から手を繋いできたのだ。手から伝わる朱里の感触と温度は、僕の胸の中を波を立てながら満たしていった。

部屋に入ると朱里はあたりを見回し、「中もホテルインディアねえ」とチクリと言うと、1人でくすくすと笑った。僕の気持ちは高ぶっていて、朱里の皮肉などもうどうでも良くなっていた。

朱里はすぐにシャワーを浴びたいと言って、座る暇もなくバスルームに行ってしまった。僕の胸は高まり、ボコボコと鼓動した。朱里がバスルームに行ったあと部屋を見渡すと、思えばほんとに豪華な部屋だよな、と改めて認識した。明日からは貧乏宿だ！　と心に決め、朱里のシャワーの音に耳を澄ませた。

ふと気になって携帯をチェックした、電話とメールのアイコンには、どちらにも一件の不在通知が表示されていた。相変わらず不在着信の番号はめちゃくちゃだった。今朱里と一緒にいるということは、その着信はゆり子ということだった。そしてメールを開くと、やはりそれはゆり子からだった。

メールには僕の旅を気遣った言葉が沢山並び、そして最後に「話したいことがあるの」と締められていた。僕はすぐにあの彼のことを思い出した。この直感が外れればいい。そんな都合のいいことを思っていると、シャワーが止まる音がした。またすぐに現実に意識

が戻された。僕が今一番望んでいる「もの」が、あの扉の向こうにあるからだ。
バスタオル一枚だけの姿の朱里が現れると、僕はその姿を二度見した。そして釘付けになったた。しかし「何見てんのよっ」と一刀両断。「あ、そうだ、ヤカンの火を止めなきゃ」とでも言いたそうに、自分もシャワーを浴びに行こうとした。その瞬間、朱里が僕を後ろから抱きしめた。背中に朱里の胸の感触が、柔らかく伝わる。
「みなみさん」と言うと、朱理は僕の首筋にキスをした。
とろけそうな唇の感触が、柔らかいピンク色の沼に僕を鎮めていった。しかし次の瞬間、
「しょっぱっ」と言った。
「そ、そうだよね、シャワー浴びてくるよっ」
愛のお花畑は一瞬で荒野と化し、慌てて体を離そうとすると、
「良いよ」と朱里は言った。
「え？」
「良いの、このままで」そう言うと朱里はまた僕を強く抱きしめた。
僕らはそのままベッドに、絡まるようになだれ込んだ。僕が勢いよくバスタオルをむしり取ると、朱里は何も言わず受け入れた。

全てが終わると朱理はすぐに起き上がった。しなやかな身体を隠そうともせず、シャワーに向かった。そのとき僕は、咄嗟にこんな質問をした。
「朱里はおれの、どこが、好き……なの？」しかし、言ってみてすぐに後悔した。
「え、何突然？」と言うと朱里は沈黙をし、僕を品定めするように眺めた。
その沈黙の長さは、僕にとって一縷の望みを与えたが……、
「なんかみなみさん、あかりの好きなように動いてくれるから、楽なのよ」とあっけらかんと言った。
その晩僕は、枕を涙で濡らした。涙は嘘をつかなかった。

僕が目を覚ますと、朱里はすでに身支度を済ませていた。昨日と同じように髪を掻き上げて縛り、珍しく大人っぽいワンピースを着て椅子に座っていた。
僕が起きたことに気がつくと、朱里はこちらを見た。
「みなみさん、こういうの好きでしょ？　ふふ」と僕の女神は微笑んだ。

僕が何を考えているのかなんて、すぐにわかったようだ。
朝日を受けて座る朱里は、見惚れてしまうほどに優雅で美々しかった。昨日ロビーで会ったときはホットパンツを履いていて、アクティブなアスリートのようだった。だが今は、淑やかで清楚な服に包まれていた。しかしそれは服装だけではない、僕らが肌を合わせたからか？
「おはよう。もう、夜中イビキやばかったよ。うるさいから蹴っ飛ばしたらみなみさん落っこっちゃって。ごめんね」と女神様は、モーニングパンチを僕のテンプルに喰らわせた。
どうりで……。朝、僕がベッドの下で寝ていた理由に納得した。僕は腰の当たりを手でさすりながら朱里を訝しんだ。
「うそうそ。本気にしないの、もー。そんな顔しないでよ、気持ち悪いからー。そんなことするわけないじゃない。みなみさん勝手に落ちたのよ。あはははは」
「そ、そうだよね。おはよう。ははは……」
まあいつもの朱里だった。
「やっぱみなみさんと身体合うわ、わたし。ここまで来た甲斐があったわ」
「本当？」と言って僕は朱理に近づき、腕を掴んだ。
「何よ、その顔！　やめて、せっかく服着たんだから」と言って身をよじった。
「えー、だって」
「だってじゃないわよ。一人でやってなさいよ、もう朝から」
「一人でって……」
すると朱理は近づいてきて、僕の頬にキスをした。
「また今度ね」
朱理は立ち上がって服の裾を整えると、カバンを背負った。
朱理の姿を眺めていると、昨日抱いていたメールの相手のことなど、どこかへ吹き飛んだ。今はただ、残っている朱里の肌の感触に満たさていればいい。
ロビーに降りて朱理を見送った。朱里は「じゃ」と、それだけ言うと、むせ返る熱波の中、振り向きもせず帰って行った。朱里が離れていくその距離が、そのまま僕らの距離のようにも思えて不安になった。

＊

朱里とバラナシで別れてから2週間ほど経ち、僕はムンバイにいた。旅も終盤を迎えようとしていて、僕の肌は真っ黒に日に焼けて、もう髭も剃らなかった。しかし相変わらず僕のTシャツは真っ白だった。

その日は、昼ご飯を食べに行く気も起こらず、ドミトリーのハンモックでぶらぶらと揺れていた。バッグの底にバナナがあったのを思い出し、手をぎゅーっと伸ばし、バッグを取った。バナナが2本あったが、腐りかけていて、食べれるところだけちぎって食べた。そしてふと今までの旅を振り返った。

デリーではクマールさんに、バラナシではオムさんに出会いガイドをしてもらった。バラナシでは予定外の豪華ホテルに滞在し、素晴らしい夜明けを見て、そして朱里がホテルに現れた。僕はそこまで思考を巡らせると、頭の中のターンテーブルに、「朱里身勝手」という名前のレコードを置き、そっと針を降ろした。

朱里とバラナシのホテルで一晩を過ごしたあとも、僕は朱里の肌の感触が忘れられずにいた。そして身勝手さを、何度も何度も思い返しては、心をきりきりとさせていた。「一回ギャフンと言わせてやるぜ」と口に出してみたが、出来る気がしなかった。

インドまで旅に来たのに、結局朱里に気持ちを振り回されっ放しな自分に嫌気がした。なんだかむしゃくしゃとしてきたから、「朱里身勝手」というレコードを外し「ゆり子献身」という名のレコードに変えた。……ゆり子にいたっては、こんな僕に戻って来ても良いとまで言ってくれる。ゆり子の元に戻れば、僕が幸せになることは確実だった。ゆり子……。しかし朱里がホテルに現れた途端、僕の気持ちは全てが朱里になった。朱里の吸引力は強大だった。

僕は二人の女性の狭間で勝手に揺れる自分が嫌でたまらなくなり、自棄気味に携帯電話の電源を落としてバッグの底に仕舞い込んだ。そうして一切のコンタクトを断ち、自分を旅に没頭させることにした。僕は旅に来たんだ。とまた自分に言い聞かせた。

それから僕は、この旅を急激に貧乏主義なハードモードへとシフトしていった。

僕は貧乏旅行の知識も豊富にリサーチしていて、何をすれば良いか迷うことはなかった。そしてそれは正解だった。日本人も来ないような、危険があってもおかしくないような場所に身を置き続けた。すると、我ながら見事にゆり子と朱里のことは思い出さなくな

った。

宿も一泊百円前後という、格安で大部屋のドミトリー一択にし、ガイドも雇わずに1人で旅を続けた。食事も格安なものでまかなった。

ブッダガヤではブッダが悟りを開いた地を巡り、そしてコルカタへ行き、またインド繁華街の喧噪を肌で感じた。そのあとはジャイプールに滞在し、アンベール城や風の宮殿などを散策した。

インドの喧噪も当たり前に思えるほどに慣れてきて、しぶとさや豪快さも身につけた。リキシャーや宿ではしつこく値切り、観光地の客引きにも一括入れて無視をした。僕の奥底に眠る剛胆さの発見は、とても新鮮な感覚だった。もう肩に蛇を巻かせるような隙は与えなかった。

最初は1人でコツコツとした移動も楽しかったが、インドの旅も終わりが見えてくると、手間に思えてきた。いちいち手に入ればければならないチケットや、その都度値切らないといけない、諸々なことにも嫌気がさしていた。そろそろ最終目的地のアグラへの移動を、どうしようかとぼんやり考えていた。

デリーでクマールさんが、日本から来た観光客はよく、ガイドもできるタクシーを何日も雇って旅行をしていますよ。と言っていたことを思いだした。うーん、それ、いいかもなあ……。いやそれがいいなあ、それしかないかもー！　と僕は情熱のごとくガバッと立ち上がると、さっきちぎって捨てたバナナで滑って転んだ。

「痛ってえ」と腰をさすりながら、そうだ！　ここから残り全てを豪勢に駆け巡るぜ！ご飯だって豪勢に喰うぞ！　僕の旅は自由だ！　「旅人シップに乗っ取って、プランなんて、ノープランだっ！」　僕は意味のわからない選手宣誓をし、大きく右手を上げて叫んだ。隣で寝ていたアメリカ人が、意味も分からず一緒になって「Yippee!」と指笛を吹いた。「もう何でもきやがれ！　ぴゃー」と奇声をあげた。

僕はまたガイドさんを雇うことにした、それもタクシー付きのガイドさんだ。行きたい所へ行って、見たい所をガイドしてもらう。持ってきたありったけの金を使ってやろうと開き直った。

思い立つとすぐにデリーのクマールさんに連絡をして、「ガイドさんの手配をお願いしたい」と伝えた。すると、アグラの知り合いのガイドが、ちょうどムンバイに仕事で来ていると言った。彼の帰路に乗っていけば、お互いラッキーだね。と。僕は即答でお願いした。「あなたとてもついてるねえ」とクマールさんは言った。僕は重々礼を言って電話を

切った。

「モウ アグラ デスヨ」

新しいガイドの兄ちゃんが、タージマハルのある次の目的地「アグラ」にもうすぐ着くと言った。そして1時間前にももうすぐ着くと言っていた。まだまだ道のりは長そうだった。

雇ったタクシー運転手の兄ちゃんは、話を聞くと同じ年だった。老けていた。老けていて尚、下ネタが何よりも大好きで、ずっと卑猥な日本語を教えろとしつこかった。そしてなんとしたことか、兄ちゃんは日本語がまるでだめだった。僕は「日本語が喋れる人」とリクエストを出すのをすっかり忘れていたのだ。

待ち合わせ場所に行くと、車を磨きながら待っていた兄ちゃんの姿はニヒルだった。サングラスをかけて片手をボンネットにのせ、片足を軽く交差させながら僕に「こっちだ」と手で招いていた。

僕は開き直っていた。「英語くらいなんてことはない」と思えていたからだ。自分でも驚いていた。これが日本だったら僕はきっと学校で1位を取れるほど、ものすごいスピードで反復横跳びを飛びまくり、右往左往したことだろう。しかしインドでの僕は違っ……

「ヘイ！　ヘイ！　ヘイッ?!」

自分の覚悟を思い描いていると、大きな呼び声で呼び戻された。慌てた僕は、

「What's?」と言って運転席の兄ちゃんを見た。兄ちゃんはしきりに何かを言っていた。当然英語である。

必死に聞き取った言葉は……

「ニホンデ、オンナノアレ ナンテイウ?」

は？　へ？　こ、この人は馬鹿でいらっしゃるのですか？　僕は思わずフロントガラスに頭をぶつけるほどびっくりした。中学生レベルでしか英語を認識できない僕なのに、必死になって聞き取った言葉は「日本語で女性のあれの名称を教えろ」だった。「あれ」とはまさに「アレ」だった。

自分の耳までが真っ赤になるのを、鏡を見ないでも確認できた。そして急激に怒りにも似た「やっぱりばかだ！　それ知ってどうすんだ？　この兄ちゃんが特別？　それともインド人全部が……？」とばかばかと連呼しながら呆れた。

しかし僕は真剣に考えていた。その答えを。腕を組み、「うーん」と言いながら首を傾げ、悩みに悩んだ。僕はこれでもそれなりの「純情」さは持ち合わせている。日本人の名にかけて、堤防だ、堤防にならなくてはならない！　僕がこの堤防を欠壊させてしまったら、次から次へとやってくる日本人に対して、インド人がその言葉を浴びせてくるだろう。もしそれが女性だったら……。旅人の女性にそんな恥をかかせるわけにはいかない。自分がここでミスをしたら、日本人の倫理の堤防は欠壊する！

そして僕のなけなしの脳みそが考えた結果は、なんと……

「あ、『あそこ？』かな……、へへ」

「アソコ？」と兄ちゃんは首を傾げた。

おい今おれ「あそこ」って言った？　ばか？　おれのほうが馬鹿なの？　それよりなんで真剣に考えてるのよー。猛烈な後悔が僕のハートをなぎ倒していった。

僕はドキドキしながら反応を見守った。兄ちゃんは考えている、考えているぞ……。

「兄ちゃんの思考」と言う水面がさわさわと動きだし、波紋を広げ「日本人の気持ち」という堤防まで押し寄せてきた。波紋は堤防の最上部を乗り越えようとしたが、弧を描いたハングによって、また内側へ小さな波を揺らせながら戻ってきた……。ぎ、ぎりぎりセーフだった。

「アソコ、カ……」

兄ちゃんは見事、受け入れたようだ！

これで次から次へとインドへと押し寄せる日本人が、「あそこ、あそこ」と浴びせかけられたとしても、それは単なる場所を指し示す言葉として認識されるであろう。ぎりぎり日本人としての純潔は守った。「守ったぞー！」僕は必死に辿り着いたその山の頂きに、日の丸の旗を突き刺し、力の限りに叫んだ。「『あそこ』もわるくないぞー！」と。ベースキャンプからは、「やりましたねっ！　『あそこ』なんてなかなか思いつかないですよね！　そんな質問、無視しないで登頂するなんて、バカですね！　どーぞー」とベースキャンプ司令室では、ミニスカートのブロンド女性が、机の上の無線機に向かい、何度も僕に祝福を送った。

兄ちゃんを見ると、軽快に口笛を吹きながら「アソコ、アソコ」とすこぶるご機嫌だった。それ以降何があろうと僕は無謀な挑戦はしないことを、日本全土のインド旅行予備軍たちに誓った。

しかしそんな兄ちゃんを見ていたら、僕の恋の悩みなど、どこかへ吹き飛んでしまっ

た。なんだか兄ちゃんのアホさに救われた。新たに始まった兄ちゃんとの旅は、僕の人生すら変えてくれそうな予感がした。

ひたすらタクシーを走らせるエロ兄ちゃん。エロ？　僕はいつしか、タクシーの運転手付きガイドさんから、運転手の兄ちゃん、そしてエロい運転手の兄ちゃん、今では「エロ兄ちゃん」と呼んでいた。まるで出生魚の「ブリ」のように僕らは慣れ親しんでいった。僕を乗せてこのインド大陸を颯爽と泳ぐエロ兄ちゃん。

さあ最後の地アグラへ。

僕を乗せたエロタクシーは、どこまでもまっすぐな道が続くハイウエイを走っていた。

エロ兄ちゃんは運転に集中し、僕は窓の外を眺めることに集中した。過ぎ去る田園風景を見ていると、ふと、旅行前の知識を、あれやこれや詰め込んでくれた識者達のことが思い返された。「おめえの予定表、観光地ばっかり書いてあんけどよう、これぜってー疲れんぜ。観光地なんか行った日にゃ、えげつねえ客引きがわんさといてよ、日本人のおめえなんか絶好のカモだ。良い出汁が出るカモネギ南蛮だ！　つるっと喉越しよくいかれちまうぞ！　こんちくしょうめ！」と識者の飛ばした熱い唾を、僕は静かに顔面で受け続けた。

識者は続けた「いいか、観光地も面白いが、とにかく客引きインド人がうぜえ。それはまあ、今話した通りだ。誰も彼もが『おれの財布を狙ってる』つって被害妄想で狂っちまうのは確かだ。けどそうなったらな、どこでも良い。ふつーの人がいる村にでも行ってみるんだな。普通のインド人の優しは半端じゃねーぞ、心の底から癒されるぞ、ほんっとうに優しいから、からー、ぅぁー」そういってその識者は泣き崩れた。彼の頭の中には、まさに旅の鮮烈な記憶がメリー、ゴー、ラウンドしていたのだろう。

インド人は確かにうざい。真っ白いTシャツを着た僕が悪いのかもしれないが、日本人はとにかく目立った。喧噪を歩けば3分おきに誰かが何か言いながら近寄ってくる。そんなことにもうんざりしていた。

「そうだ、行こう。行ってみよう！」

僕は小さい村「village」に行きたい。とかなんとか、身振り手振りも交えて言った記憶がある。否、僕は確かに小さい村に行きたいと伝えたのだ。兄ちゃんは親指を勇ましくサムズアップし、「ノープロブレムッ！」と言って力強くうなずいた。

僕はウキウキした。どんなふれあいが待っているのか。どんな癒しが待っているのか。

日程はまだ余裕もある。滞在してもいいだろう。素敵な女性か？　可愛い子供達か？　僕はハイウエイから見える風景をにんまりと眺めた。やさしいインド人との触れ合いかあ。胸が高鳴ってきた僕は、小さく「イエイッ！」と叫んだ。

だが、かなりの時間走っているが、村にはなかなか着かなかった。不安になってきてエロ兄ちゃんに聞いてみた。

「モウ スグダ」とエロ兄ちゃんは言った。

「そうね、インドは広い。ちょっとの隣村が、車で数時間なんて当たり前だ」

僕はまた小さな村に思いを馳せた。

さらに車を1時間ほど走った所で、エロ兄ちゃんは沿道に車を止めた。

「ツイタ ゾ」

「は？　へ？　どこ？　村はどこ？　ねえ村は？　ねえ……」

僕は猛烈な不安に襲われた。あたりは荒野と言ってもいいような平原だった。あ、そっか、地下？　地下民族か?!　僕は地下へと続く入り口を、血眼で探した。

「コレ ダ」

兄ちゃんが自信たっぷりに指をさしたのは、足元だった。それは１０ｍほどの大きさの、今まさに僕らが立っているこの微妙に小さい橋だった。

「？？？」

状況が読めなかった。なんだ？　橋の下か？　橋の下に村があるのか？　え？　あ？　ぅぁ？　僕は兄ちゃんに詰め寄った。

「ホラ チイサイ ハシ ダ」

僕は奇怪な音をたてながら、全身を使いこのオチにずっこけた。兄ちゃんが連れてきてくれたのは、

「village!」

ではなく、

「bridge!」

だったのだ……。愕然とした。

僕の発音が悪すぎて「village」を「bridge」と兄ちゃんは聞き間違えたのだ。だからって……。「蛸」たべたいなー。と言って「凧」用意するあんぽんたんはいないだろ。村だ村っ、村に行けと言ったのに……。橋なんて……。小さい橋……。ほんとだ……。

僕は食い下がった。まだこの先にもあるだろ？　ちいさいむら、「むーら」がさあ？

あぁ？　と、しゃがんだ姿勢からアッパーカットの軌道をトレースし、兄ちゃんの顔をグワアッ、と睨み込んだ。
兄ちゃんは平坦に
「モウスグ アグラ ダ」
と、とどめを刺した。そして戻れば村はあるが、かなりの距離だという。僕は膝をつき、目頭を抑えながら、仕方がないとあきらめた。まぁこれも旅、これも思い出。そして文句なしの小さい橋だった……。
エロ兄ちゃんは誇らしげにボンネットに手を置いて、足をクロスしながら、ひざまずく僕を見つめた。

タクシーはようやくアグラの市内に入った。インドの街特有の、ゴミで埋もれる道路。そんな道路にも慣れてはきたが、ここアグラの状況は見たこともないほどに酷かった。治安も悪そうだ……。
まずは宿に案内してもらった。宿の前に車を止め、ガイドのエロ兄ちゃんと一緒にフロントへ行った。知り合いの宿のようで、フロントの兄ちゃんも笑顔で親切そうだった。
「ダイジョブ、コイツノショウカイ ボッタクラナイ」
そう言うと、エロ兄ちゃんとフロントの兄ちゃんは、高笑いをした。
しばらくするとエロ兄ちゃんは、
「ホカニ イッテホシイトコ アルカ？」と聞いてきたので、
「今日は宿で休むよ」と言うとエロ兄ちゃんは、
「オウケイ」と言ってサングラスを上げて、ウインクした。車に戻るとブロロローと去って行った。
そのあとはフロントで軽く話しをした。会話帳を使って、簡単な会話は話せるようになっていた。
ここの宿代は標準以下なのに、なかなか雰囲気も良かった。宿で一番大事なことは、フロントの人と仲良くなることだった。フロントと言うとかっこ良く聞こえるが、要は店番のことだ。この店番の兄ちゃんは、エロ兄ちゃんと息が合うことだけあって、いつも陽気で楽しそうだった。
しかしこの値段でこのクラスの宿に泊まれることに驚いていた。今までの安宿はなんだったのか。おそらく今回は、外国人プライスではなく、インド人プライスで交渉してくれ

たのだろう。外国人旅行者からいかにお金を引き出すか。そこに躍起になるここインドでは、きわめて珍しいことだった。良いガイドさんに当たると、旅は途端に快適になる。やるなエロ兄ちゃん、とちょっと見直していた。

部屋に入り荷物を降ろすと、どさっとベッドに座り込んで、「ふーっ」と一息吐いた。少し熱があるようだった。ここアグラまで二日間に分けて２０時間の旅、やはり疲れた。なんとなく体調も良くなくて、お腹も壊し気味だった。しかし旅も1ヶ月近くにもなると耐性も付き、ちょっと位の熱やお腹の調子はそれほど気にしなくなった。

僕はシャワーを頭から浴びながら、ゆり子の「話したいことがあるの」が気になっていた。それでも僕は話す勇気がなくて、「また連絡するね」とメールで返信をしただけで、それ以来連絡はしていなかった。

車での移動が終わり、シャワーも浴び、リラックスした時間を過ごしていた。ベッドに寝転がると、自然にまたゆり子のことを考えていた。今では朱里のことが少しずつ頭から離れていき、ゆり子のことを考える時間が増えていた。

ようやくゆり子に電話をする勇気が湧いてきて、ひとまずバッテリーの切れた端末を充電器に刺した。僕はじっと携帯の画面を見つめていた。するとなぜか忘れていたかのように胸がドキドキと鼓動を速めた。いつ電話をしても、きっとゆり子は喜んでくれる。それは疑いの無いことだった。しかしそれは今では過去のことのように思えた。

電源の入った画面には、二件の着信表示があった。どちらもゆり子からだった。

僕は2週間ぶりにゆり子に電話をした。6回目のコール音のあと、ゆり子は電話に出た。

「もしもし……」

電話に出たゆり子からは、不穏な気配が感じたられた。

「もし、も、し？」と言って、僕はすぐに言葉に詰まった。

「……」

「な、何してるの？」

「……うん、今雑誌を見てたの。びっくりした」

何か別のことを考えながら話しているような話しぶりだった。

「え、ごめんね、電話、できなくて……。着信、今、見たんだ」

「ちがうの。今高山くんに借りたフライトの9月号を見ていたのよ。そうしたら高山くんから電話が来たの」

「そうなんだ。そ、そっか、ゆり子の部屋にあったんだね。そうだ、貸してた貸してた」
僕は動揺が止まらなかった。
「今日ね、わたし高山くんから貰った物とか、思い出のある物を整理していたの」
「え？」
「わたし、彼と……、前に言った、あの前のめりな彼、覚えてる？」
「ん？　うん」
この鈍い僕でもさすがに気がついた。ゆり子の決心が伝わってくる。それは僕を一瞬で不安の底に突き落とした。みるみる僕の体は震えてゆき、声は声帯を振るわせず、言葉にならないような空気がすうっと漏れた……。
「彼に言われたの。『あなたのことが好きです。一緒に人生過ごしてゆきませんか？』って」
「え？　プロポーズ、されたの……？」
世界から色彩が消えていくかのように視界が遠のいていった。
「でしょ？　わたしもプロポーズかと思ったわ」
「え?!　結婚、する……の？」と僕は震えた声で言った。
「まさか、しないわよ。ふふふ。だけど……、だけどわたし彼とつき合うことにしたの。わたしたち本当に似た者同士なの、それでね……」
ゆり子はまだ話しを続けていたが、そのあとゆり子が何を言ったのかなんて、何も耳に入らなかった。僕はゆり子が「彼と付き合う」と言った瞬間、まるで自分の背骨が抜き取られたかのように体から力が抜けた。僕は自分の体を支えられなくて、ベッドに転がった。
「そ、そうなんだ、そっは、よはっはね」ゆり子の話がひとしきり終わると、僕の言葉から滑舌が失われた。だが同時に、僕の胸の内の中では、激しくゆり子を責めていた「なんだよそれ！　僕に戻って来て良いよって言ったじゃないか！　僕のこと待ってたんじゃなかったのかよっ！　くそっ！」心の中で、そんな都合の良すぎる汚い本音を吐き続けた。しかし口に出してなんて言えるわけが無かった。
「ちょっと今体調が悪いから切るね」と僕は言った。
これ以上話していたら本気で汚い言葉をぶつけてしまいそうで怖くなった。
「え、うん……」
「ごめん……」

「わかったわ、お大事にね」
「うん」
「じゃあね」
僕らは電話を切った。ゆり子との、今までで一番短い電話だった。
まさかゆり子がその彼と付き合うなんてありえないと思っていた。僕がゆり子を選ぶかどうか、それだけの問題だと思い込んでいた。僕が損をすることは無い。心の奥の本音では、そういう身勝手を充満させていた。しかしすぐに、僕には朱里がいるじゃないか！朱里が……。不安にかられて叫んだ僕の本音は、誰にも言えないくらい、黒く浅はかだった。
僕は電話を切ったあとも、長い間ベッドでごろごろとした。ありとあらゆる自責や他責の言葉で頭の中がいっぱいになったが、それよりもゆり子をなくした喪失感はが。僕はゴロゴロと転がり落ちるようにベッドを下り、財布だけを持ってよろよろと部屋を出た。
廊下を歩いていると突然身体中から抑えられない衝動が沸き起こった。一階下りてフロントの前を通る時には、「わーっ」と叫びながら走っていた。ちょうどいたエロ兄ちゃんが、「ヘイッ、ヘイッ！」と僕を呼び止めた。この衝動はとてもじゃないが英語などで説明などできなかった。エロ兄ちゃんに「ビアー、ビアー」とコップを煽るジェスチャーをした。するとエロ兄ちゃんの目がぴかっと光った！「ツイテコイ」そう言うと数件隣にある店に僕を連れて行った。
そこで僕のシークレット自棄コード「マハラジャ」を遂行した。「もう自棄だ！」と言って、食べたいものを次々と頼み、ビールを浴びるように飲んだ。こんな場面で酒を浴びるなんて、僕はまるで演歌の歌詞にでも出てきそうな、堕落男のようだった。
そして今も「アソコ」と連呼してくるエロ兄ちゃんに「好きな物食べろよ、なあブラザー」とヒップホップなノリで絡んだ。エロ兄ちゃんは、いつも通り気ままに楽しそうだった。
だが、僕が何を言っても「アソコ、アソコ」の一点張りなのは、さすがになんとかしなきゃという気持ちが芽生え始めたが、なんだか落ち込んでいるのがバカバカしくなった。
僕は、ギリギリのところで「ファイトいっぱーつ！」とエロ兄ちゃんに救われた気がした。もし今こんなインドの僻地で一人だったら、僕はどうなっていたんだろう。そう考えると恐ろしかった。

アグラの最終日に、この旅の最後の目玉、タージ・マハルへ行く。建造物にはそれほど興味も無かったが、タージ・マハルだけは違った。ゆり子がとても気に入っていたからだった。ゆり子からあの告白を受けてから、観光にはも気が乗らず、日にちをずらしていたら最終日になってしまった。でもこれだけは何としても目に焼き付けたかった。

たかちゃんがくれた「フライト」９月号には、タージ・マハルの特集もあった。タージマハルを建造した、ムガル帝国第５代皇帝シャー・ジャハーンは、１６世紀頃から北インドを支配していた。まさに大王であり、マハラジャだった。

タージ・マハルは、自分よりも先に死んでしまった愛妃、ムムターズ・マハルのために建造された、総大理石の白亜の王墓廟なのだという。つまりはお墓であった。２０年の歳月と財力に物を言わせ「後世に残る墓」を、と愛する妻の遺言を忠実に実行して建築された、圧倒的な愛の結晶なのであった。ゆり子はいつもため息をつきながら、よくそのページを眺めていた。その時は、感受性豊かなゆり子の共感。と思っていた。だが、「世界一の愛の象徴ね」とゆり子が言った言葉は、今ではそれがどれほど大きな意味だったのかということが、嫌というほど身に沁みていた。

タージ・マハルに近づくにつれ、車からも徐々にその壮麗な白亜の一部が見えてきた。まだだいぶ距離はあったものの、その想像以上の圧巻の迫力に、思わずのけぞり、エロ兄ちゃんに「おうおうおう」と肩を叩きながら叫んだ。

さらに僕のテンションは跳ね上がり、ニコンが唸りを上げた、もうパッシャパシャだった。まだずっと遠い距離にあるタージマハルに向かって「お前をものにしてやるぜ」と叫びながら、パシャシャシャシャッと乱れた。エロ兄ちゃんは、そんな僕の暴れ撮りを物珍しそうに見ていた。

僕は必死で目の前のことを楽しもうとした。

チケットを買うと、「大楼門」という、タージマハルの敷地内に入る門へと向かった。エロ兄ちゃんはそこで、同じガイドの友達を発見すると、僕を放りっぱなしで勢い良くおしゃべりをはじめた。そのガイドさんも日本人を連れており、僕と同じように放り出された二人組の女の子と、こちらはこちらでおしゃべりをはじめた。

話しを聞く、というか一方的に聞いているだけで、僕の喋る番なんて来ないかと思うくらい、マシンガンをぶっ放していた。マシンガンの内容はこうだった。二人のうちの片方が、酷いモテ男に弄ばれ、その憂さ晴らしに、インドまで旅行に来たということだった。

さらに話しを聞くと、その子は彼にとても尽くしていたが、好きな女ができたとかである日突然捨てられたのだと言った。もっと聞くと、――というか聞かされると――そのモテ男は他にも何人も「好きな子」を隠し持っていたらしい。

彼はそのとき、理由を説明しようとしたのだが、「僕は世界中の女の子に素敵な思い出を……」「ボコッ」その子は彼の話しを聞き終わるまでもなく「グー」で脇腹をえぐるように思いっきり殴ったと言った。「あいつの脇腹いい音がしたわ、2、3本は逝ってるかもね。がははは」という武勇伝だった。しかしまあ、その彼もその彼だ。

二人ともとてもかわいらしい女の子なのに、そんな恐ろしい話しをしながら高笑いをする様を見せつけられたら、とてもじゃないが僕のいきさつなど話せるわけも無かった。ゆり子に朱里、そんな話をしてしまったら、僕は確実に血だるまにされ、この遥か彼方の地で土に還ることになっただろう。それだけは避けなければならなかった。

今僕にできることは、話の中に出てきた見ず知らずの彼の脇腹に、同情を寄せることだけだった。同情の悲壮感に包まれた僕の顔を見た彼女たちは、

「そんな悲しい顔しちゃってー、わかってくれるのね」

と手を握られた。握られたその子の手の感触を確かめながら、この手がそいつの脇腹を……、そう思うとありったけの相づちを打った。打ちまくった。しまいには「分かるわー、男でもそれ酷いのわかるわー」と感情も乗らない嘘を並べた。僕が分かったのはもちろん、その男の殴られた脇腹の気持ちのほうだった。

「あなた彼女いるの？」と片割れが聞いてきた途端、僕は走り出した。否、逃げた。後ろから女の子達が「まだ話し終わってないのよー、よー」と語尾がリフレインするほど話し足りないようだった。え、まだ話の続きがあるのか?!　と怖くなり、耳に手を当てながら「もう聞きたくないんだよー、わー」と叫びながらエロ兄ちゃんを置き去りにし、敷地の中に走っていった。とてもじゃないがそんな猛者たちに、僕の話などできるわけがなかった。

「大楼門」をくぐり、視界が開けた途端、正面には目もくらむような白亜の建造物が現れた。まだ遠くに見えているだけなのに、真正面に堂々と鎮座するタージ・マハルのその姿に、僕は立ち止まってしまった……。そのままぼーっと見ていると、後ろからインド人がどかどかとやってきて、僕の同じ側だけにぶつかっていくと、その勢いでくるくると回転しながら敷地内に入って行った。くるくるーって。

タージ・マハルは、インドの遥か彼方から象１０００匹を使い、壮大な量の白大理石を

運んで造られた。こんな大きな白い物がこの世の中にあるということだけでも驚くしかなかった。この規格外のタージ・マハルは、その神々しいまでの佇まいに、世界７不思議の一つとして数えられている。その美しい造形は、敷地を含めそのすべてが完全なるシンメトリーに設計されていた。

「う、美しい」

僕はそう呟くと、ちょうちょを追いかける少年のように、タージ・マハルに近づいていった。

「誰か！　だれか僕の首を支えてくださーい！」

という独り言を、ちょっと大きめにしゃべりながら、真下から見上げたタージ・マハルに圧倒されていた。

上を向きすぎた首を降ろすと、右に左にと走り回っては大理石を触り、また走り回っては触った。間近で見ると、写真では確認ができないような細かなレリーフが、壁面にびっしりと彫り込まれていた。

「フライト」の記事には、タージ・マハルの建造期間は２０年と記されていた。それを見た僕は「ええ、ありえないでしょ？　そんなに長い間なにやってたの？　みんな寝てたの？」などと思っていた。しかしこうして実際に自分の網膜に映してみると、とてつもないスケールの大王の想いと、携わった職人のたちの稀代の技術を感じた。すると僕の認識は、「よくこれを２０年で建てれたな……、みんな寝なかったの？」に変わった。

そしていよいよ墓廟へと入り込む。四つの塔に囲まれた真ん中に佇む墓廟では、「ハダシデ アガルヨウニ」と書かれた張り紙の指示に従い、靴を脱いだ。

夏期のここアグラの気温およそ４０度。床は壮麗な大理石。そう石。燃えた炭の上を走り抜ける達人でもない僕は、裸足で歩くなど当然できるわけはなかった。焼けた鉄板の上で踊る囚人のように、「あぢぢぢぢっ」と言いながら走った。僅かな日陰を目指して走り抜け、また日陰から日陰へと走り抜ける。そして墓廟内部入り口まで走り抜けると、日陰で休む人たちに混ざって僕も休んだ。僕がカメラを持っているので、何度も話しかけられた。つまりは「撮れ」である。僕は気を良くして「オウケイオウケイ」と撮りまくった。

ここまで栄華を極めた大王であっても、結局は１人の人間。そして愛する妻の為に、私財を投げ打ってでも愛情を表現したかった。タージマハルを完成させたこの王は、最後は息子の反逆に遭い、離れた城に死ぬまで幽閉されたという。幽閉されている間、窓から見えるこの妻の眠るタージマハルを毎日眺めた。そう書いて記事は締めくくられていた。

その言葉を思い返すと、建物のどこを見ても王の「愛」としか感じられなくなっていた。僕はほんとうに人を愛しているのか。愛したことがあるのだろうか……。愛がなんなのかさっぱりわからなかったが、自分がしてきたことが「愛」ではないことくらいは理解できた……。

僕は大楼門までとぼとぼと歩いて戻った。肩を落としている僕を見つけたエロ兄ちゃんは、何も言わず僕を車に乗せた。車内で相変わらず、ラジオの曲に乗せるように「アソコ、アソコ」と連呼している。気がつくと僕は、おかしくて吹き出していた。

インドの偉大な王よ、僕のこの煮え切らない想いなんて、あなたの圧倒的な愛で粉々に叩き潰してくれ。そう思いながら目をつむり、頭に後手を組むと、車のシートに身を預けた。

タージマハルからの帰りに、道ばたの小さな売店で休憩をした。エロ兄ちゃんは珍しく、僕にジュースを買ってくれた。Limcaだった。落ち込んでた僕への気遣いだろうか。僕は「えへ」と遠慮気味に笑いながら受け取った。この旅の間で、もう何本Limcaを飲んだかわからない。今では、旅に無くてはならない味となっていた。

二人で乾杯をして、瓶のまま立ち飲みをしていると、店のお姉さんが新聞を進めてきた。それは、日本語で書かれているスポーツ新聞みたいなものだった。一面はバレンティーノロッシのガッツポーズだった。おそらく僕のTシャツの＿＿＿＿「kawasaki」＿のロゴを見たからだろうか。僕はそんな新聞があることにびっくりしたが、レースの最新記事が読めることが嬉しくて、思わず購入した。しかしその新聞には、僕の知りたくないことが書かれていた。

インドには、日本の大手バイクメーカーや、沢山のレース関連の会社が、市場規模拡大の為に勢いよく進出していた。そしてここアグラでは、沢山の日本人が働いているということもあり、日本語で読めるような新聞が発売されていたようだ。モータースポーツについてもたくさん取り上げられていた。

何気なくぱらぱらとめくっていると、朱里が言っていたインドのレーシングパーツのメーカー「IDM」の記事が載っていた。タイアップ広告のような記事で「日本のレーシングチーム、プラススピードと合同で開発」という見出しで製品のラインナップが掲載されていた。

そこにはモデルのようなポーズをとり、レーシングスーツのファスナーを胸の辺りまで

下ろした、艶かしい朱里の写真が大きく使われていた。僕の知らないところで恋人が、大胆に胸のファスナーを下ろしている。しかもそのファスナーの間からは、胸の谷間が覗いていた。それは僕にとって、あまり気持ちの良いものではなかった。

他にも全日本選手権でのライディングシーンの写真や、レーシングスーツを着てヘルメットを片手に持った朱里が、仲良さそうに男性ライダーにしがみついている写真が載っていた。

男性ライダーは朱里のチームメイトらしく、コンビを組んで2シーズンを戦ったと記事には書いてある。読み進めると、「二人はレースではライバルだけど、プライベートではお互い大事な存在なの。二人でサーキットに行ってカーレースを見たりもするし、サーキット以外にもよくドライブに行ったりもするわ。私たち海が大好きなの。日本の下田は最高のビーチよ。そんな私たちだから、レースでトップを追いかけているときは、お互いのスリップストリームを使い合って、トップスピードを上げるコンビネーションを使ったりするの。最高な関係よ」と朱里の言葉として書かれてあった。

チームメイトのその彼は、すらっと背が高く、茶色い髪でゴルゴ13のようなサングラスを頭に乗せていた。薄ら笑うその表情は、ビーチで女性の水着に目をやるような軽々しさだった。しかし全日本ライダーというブランドは、一流のアスリートという証でもあった。僕にその彼に勝てそうな要素は一つもなかった。しいて言えば、インドの水だって飲めるくらいの丈夫な胃袋……。「おい無理すんなよ」と自分で自分を慰めると、その彼のライディングに負けないくらいのスピードで落ち込んでいった。

同じチームのライダーのことなんて、詳しく聞いたこともなかったし、僕から聞いたときは「ライバルよ」くらいにしか言わなかった。けれど、僕が一番ショックだったのは、記事の最後に載っていた朱理がチームメイトに寄り添っている写真だった。朱理はそのチームメイトの腕を抱えていて、二人は密着している。その姿は、僕がホテルインディアで見た服装と同じだった。あれは彼のためのものだったのか……。

昨日、ゆり子の話しを聞いて背骨が抜けた。今日は朱里の記事を見て、内蔵が抜き取られた。今の僕は皮だけのくにゃんくにゃん星人だった。

くにゃんくにゃん星人は、くにゃんくにゃんの空っぽになり、車までくにゃんくにゃんと移動した。

「ダイジョウブカ？」

エロ兄ちゃんは、くにゃんくにゃんと車に戻ってきた僕の死んだような目を見て、心配

そうに言った。
「プロブレム……」
とだけ言って僕はくにゃんと車に乗り込んだ。シートに座ると窓のへりに腕を重ね、そこに顎を乗せると外の風景に視線を向けた。走る車の窓からは、熱い風が僕の顔に優しく当たった。彩る街の鮮やかな風景が、次々に目の前を流れていった。
ゆり子をなくした喪失感の重さに呻いていた矢先、知りたくなかった朱里の現実を突きつけられた。きっと直接聞いたところで、この記事と同じことを聞かされるだけだろう。
「私たち温泉が大好きなの」と。もし、もしこの記事に書かれていることが違っていたとしても、朱里とはこれ以上続けられないという事実を知るだけだろう。今こうして、朱里のセカンドマシンとなった現実を突きつけられると、このまま続けることは……、いや、違う、そんな問題なんかじゃない、ゆり子はずっとこんな気持ちだったのかもしれない。僕にはゆり子みたいに、朱里を暖かく見守るなんてこと、到底できそうにもなかっ……。
「……イ、オイ、オイッ！」
いつの間にか車は宿に着いていて、エロ兄ちゃんが何度も僕を呼んでいた。
「ん？　あ、はい……」
僕は目も開ききれない白目でエロ兄ちゃんの方を振りむくと、なんとなくな返事をしたするとエロ兄ちゃんは、
「ジンセイ ハ ノープロブレム ダッ！」と大きな声で言うと、両手を広げ頭の上で大きな輪と笑顔を作っていた。ぺたっと撫でたような髪型でサングラスをしていたエロ兄ちゃんは、そのポーズのままニカッっと笑った。初めて見たエロ兄ちゃんの前歯には、大きく隙間が空いていて、その姿はまさにタモリ。タモさんだった。日本でだってタモリになんか会ったこともないのに、まさかこんなインドで会えるなんて夢にも思ってなかった。エロ兄ちゃんには後光が差していて、まるで神様のようだった。なぜ「ジンセイ ハ ノープロブレム ダ」のポーズが、頭の上で大きな「輪」なのかはよくわからないけれど、ここインドで安心できる場所を見つけたような気がした。
「タモさんありがとう！　タモさんありがとうーっ！」
僕は車を降りるとエロ兄ちゃんに向かってそう叫びながら宿へ歩いて行った。エロ兄ちゃんはタモさんと言われても、意味なんてわかるわけもない。
「エ？　エ？　エッ?!」と、ずっと大きな声で聞き返していた。僕はそれを無視し、鼻歌を歌いながら宿に戻った。すると外からは、けたたましいクラクションを鳴らしながら、

エロ兄ちゃんの車が走り去る音がした。
インドに来た初めての日、クラクションのけたたましさに驚いて僕の旅は始まった。そして今は、そのクラクションの音が僕の気持ちを穏やかにさせていた。

すっかり穏やかな気持ちになった僕は、にこにことフロントの前を通った。すると、兄ちゃんが声をかけてきた。
「オイ、キョウ シタデ ケッコンシキ、ヤルゾ」
僕はきょとんとそれを聞いた。
「へー、結婚式？」と人ごとな返事をした。
「ソウダ」
「ふうん」
インド人の結婚式ってどんなんだろう？　頭の上には、いくつもの吹き出しが湧いた。きっと首を左右に振りながら、やいのやいのと派手に踊るのかな。へ～、とあくまで他人事だった。
「オマエ ナニカ スゴイノトリタイ イッテタダロ？」
「え？　あ、う、うん」
「イケヨ」
「え、誰が？」
「オマエ」
「はっ？　おれえ?!　ダメダメ、そんなの」
僕は慌てて手を左右に振った。
「ナンデ？」
「何でって、行っちゃダメでしょ？　こんな関係ない人がさ？」
相変わらずインド人は適当だ。
「ノープロブレムダッ！」
「え、だからそんな、人様の結婚式に勝手に出るなんてだめだって、プロブレム、プロブレム！」
「カンケーネーヨ、ハイッチャエバ ワカンネーヨ」
「いやわかるってっ！」
僕は手のひらの甲で、兄ちゃんの胸元にツッコミのポーズをかました。

「それにそんな服もないし、靴もサンダルしかないよ」
僕は断らなきゃと、行かれない理由を並べた。
「カエヨ。シャツ。オレ カソウカ？　クツモアルゾ？」
「いやいや、そういう問題じゃないから」
押し問答をしていると、1人のインド人が後ろを通り、フロントの兄ちゃんに声をかけた。
「オイ シン。シキ クルダロ？」
フロントの兄ちゃんはシンさんという名前だった。
「オレ イカネーヨ、シゴトダ。アソンデル ヒマネーヨ」とシンさんは、そのインド人に言った。
「イイダロ スコシ クライ」
「……ア！、ジャアコノ ニホンジン イカセル！」
「オウケイッ！」
「ちょ、ちょっと、勝手に……。オウケイじゃないよっ」
僕は二人をキョロキョロと見渡し、おろおろとした。
「コイヨ、オマエ。コイヨ？」
通りかかったインド人は、いとも簡単にそう言った。
「え？　い、いいの？　おれえ?!」
僕は自分を指差しながら、きょとんとした。
「ノープロブレムッ！」
フロントの兄ちゃんと、通りかかりのインド人は、声を合わせて無責任にそう言った。
「アンシンシロ！　ミンナフツウ、ノープロブレムダッ！」
シンさんは自信たっぷりに、ウインクまじりの笑顔でそう言った。
シンさんは観光に関わるこの宿の仕事をしていて「外国人観光客が、このアグラの地で散々騙されているという話を嫌というほど聞くんだ」そう言っていた。
僕も以前ネットで調べたら、このアグラの悪名の高さにはびっくりした。
シンさんはきっと、僕が騙されないか心配になっていると思って「みんな普通」と言って安心させようとしたのだろう。とはいえ、やっぱり他人の結婚式に出るなんて僕には飛越せないハードルだった。僕は丁寧に断った。

次の日の朝、いつものように肩からカメラをぶら下げて、宿のすぐそばの露店のチャイ屋で、あっまいチャイをすすっていた。いろんな場所でチャイを飲んだが、ほぼどこでも同じ味だった。いろんな食べ物や飲み物を口にしたが、チャイだけは示し合わせたかのように同じ味だった。

あるとき聞いた、サルの芋洗い行動のことを思い出していた。ある場所でサルが芋を洗い出し一定数を超えると、離れた土地でも同じようにサルが芋を洗い出したというのだ。それは超常現象と呼ばれるらしい。

ちょっと待てよ……、僕はあることを思い出していた。「みんな普通のインド人」に会いに行きそびれた、あの「小さな橋」事件での心残りだった。

日本で会った何人かの旅の識者たちは、同じように普通のインド人に会えと言った。そしてそれは皆、「奇跡的な出会いがきっかけで、本当に素晴らしい体験だった」そう語っていた。

全く違う旅をしたはずの達人たちが、口をそろえて同じような体験談を語った。僕ら人間も所詮はサルである。それはもしかしたら僕の旅でも同じことが起こるのではないだろうか。昨日の結婚式……。そうだ、こんなきっかけ、もう既に奇跡ではないのだろうか?!行ってみてもいいかもしれない。　むくむくと結婚式への興味が湧き上がった。

僕はすぐに行動をとった。

慌てて宿に戻り、どこかへ行こうとしていたシンさんをぐいっと捕まえた。

「行ってみるっ！」と僕は主語も概要も吹っ飛ばし、焦り顔で言った。

「？？」とシンさん。

「昨日の、イエスタデイ、マーリッジ！　キャメーラ！」と単語で攻めながら、シャッターをカシャカシャと押すポーズを見せた。

すると兄ちゃんの表情がキラッとほとばしった。

「オウ、オウ、オウ！　キャメラ、キャメーラネ！」と言うと兄ちゃんは慌ててどこかへ電話をかけると、身振り手振り叫んでいた。ポチッとボタンを押し電話を切ると、今日もキリッと濃い顔で僕を睨むと、

「ノー、プロブレ〜ム！」と満面の笑顔で親指を立てまくった。

「サンキュサンキュー」と言って、兄ちゃんと握手をした。

インド人の得意技の「ノープロブレム」は思いも寄らず、この世の中でもっともハートウオーミングな出来事の「結婚式」しかも普通のインド人の結婚式への扉を開けてくれ

た。
僕はだんだんと、インド人の強引さと適当さ、それに流されるという楽しみも心得てきたようだ。
僕は脇を鳴らしながら部屋に戻ると、ニコンのバッテリーを充電した。そして3枚目の新しい32Gのフラッシュメモリーをカメラにセットした。メモリー一杯撮りまくってやるぜ。と息巻いた。
僕は汗臭くなった真っ白いTシャツを脱ぎ、それを「ヒュー！」と言いながら、指でくるくると回し投げた。そして新しい真っ白なTシャツを頭から被った。僕はがしっと立ち上がると、「よしっ！」と叫んだ。
しかし僕は、部屋を出る時に足下に転がっていた「もにゃっ」という感触の「不安」を踏みつけた。確かにあのインド人は来いと言っていたが、そんなに適当なのか？　本当にノープロブレムなのか？　結婚式だぞ？　いくら適当が持ち味のインド人だったとしても、結婚式は人生でもっとも大事なことの一つのはず。手当たり次第「来ちゃいなよ」なんて普通言わないだろ……？　それに、もしまた観光地のようなうざったい人の集まりだったとしたらどうしよう……。この宿で、まさかそんなことは無さそうに思えたが……。
んー、まあ駄目と言われたら帰れば良いし、なんかあれば帰っちゃえば良いじゃん！
そうだ、いつでも帰っちゃえばいいんだ！
僕はすぐにうきうきの続きに取り掛かった。
「人生はノープロブレムだから」

言葉もまともに通じなく、コミュニケーションも取れないと思っていた海外で、僕は日本にいるとき以上に心が開いているのを感じていた。コミュニケーションは言葉じゃないんだな。
この幸運を運んでくれた黒いボディのニコンを見て、「今日からお前は煮込みのニコンではなく、幸運のニコンだ」と新しい称号を与えた。
地下の食堂で式は行われる。
僕は約束の15分ほど前に来ると、その周辺をさりげなくうろうろとした。
僕がモジモジしているところへシンさんがやってきた。
「ビビッテンノカ？」
「ま、まあ…」

「ノープロブレム、トニカク イッテミロ」とだけ僕に言った。

入り口の外にはもう、わらわらとインド人達が集まっていた。驚いたことに誰もスーツなど着ていなかった。ほとんど普段着といった装いだ。そんなにカジュアルな式なのか？ まさか新郎新婦まで私服なのか？　と再び不安が立ちこめた。しかし、真っ白なTシャツとジーンズの僕にとって、それは朗報とも取れた。まあ、ひとまずこれで目立つ要素が一つ減ったぞ。

人だかりに近づいてよく見ると、そこはすでに宴の席となっていた。大きなタンドール釜で、ナンを焼く職人が腕をふるっていたり、テーブルには料理もたくさん並んでいる。みんな美味しそうにナンやカレーを食べていた。

やはり結婚式になるとチャパティではなく豪華にナンを食べるんだな。すると人ごみの中からナンを焼くナン兄ちゃんと目があった。ナン兄ちゃんは僕のニコンを指差し、「オマエ コイ」と手招きをした。僕は「え、これ？」と、カメラを持ち上げると、へらへらと近づいていった。

すると、カメラをまじまじと見つめた兄ちゃんの目が「ぴかっ」と輝いた。「グッ、キャ、メーラー」と呟いたあと、人差し指を下からくいっと二度ほど曲げながら「トレッ」と力強く言った。僕は「撮っていいのか？」とシャッターを人差し指で押すジェスチャーで聞くと、おなじみの「ノープロブレム！」が返ってきた。

そのノープロブレムは、この式の参加に許可がもらえた証に思えた。

ナン兄ちゃんは、結婚式という華やいだ場で最高のナンを焼いてやろうと、バカでかいタンドール釜を担いでやってきたのだろう。――実際は担ぐなんてできるわけのない巨大な釜なのだが――そして今、二人の意気込みがつながった。胸の奥が華やぐ。

ナン兄ちゃんは最高のポーズをくれた。タンドールの釜の内側の壁に、ナンの生地を叩き付けるようなポーズで止まっていた。腕は釜の深くまで入っていて、かなりの熱さのはずだ。だがそこは職人、表情一つ変えずポーズを取っていた。

褐色の肌に真っ白のタンクトップ、顔は細身で整えられた口ひげ、眉もきりりと濃い。極まっていた。シャッターを押すと、ナン兄ちゃんとの競演が始まった。まるでアニメでも作れてしまうのではないかと思うほどに連射をした。結果、違いのよく分からない写真が大量にデータとして納められた。そして共演の連射が終わると、ナン兄ちゃんは力強く「イケ」と入り口の扉を指差した。まるでお前の求めるものはそこあるぞ、と言わんばかりに。

結婚式の会場は、その扉を降りた、地下のレストランで行われることになっていた。
僕は目を輝かせ、最高のターンで振り返ると、まっしぐらに扉に向かった。
恐る恐る地下に降りていくと、そこでは溢れそうなほどのインド人で賑わっていて、ムンムンとした熱気に満ちていた。上の会場では参列者はまばらに見えたから、これから集まってくるのかな？　と思っていた。しかしもうすでに、集まり切る寸前だったのだ。
そこで繰り広げられている宴の規模はまるで祭りだった。僕はその激しい賑わいに足がすくんだが、大柄な男に続きながら会場に足を踏み入れた。
一人のニヤリとした兄ちゃんが僕に近づいてきた。僕をジロジロと眺めると、ちょっといやらしそうな表情をしながらも、なんだか嬉しそうだ。ぶら下げたカメラを見つけると、ニヤリの兄ちゃんも「トレ」といって催促した。僕がシャッターを押すと、兄ちゃんは、満足そうにニヤニヤとした。人差し指をクイッと動かすと「コイ」と言って、後をついて来させた。不安と期待が入り混じるような、複雑な感覚が押し寄せてくる。
どこかに連れて行かれて「何勝手に入ってんだよ」って結局追い出されるのではないだろうか。いや、でもこの兄ちゃん、さっきからなんだか嬉しそうなようにも見えるし……。僕は言われるがまま連れられて、恐る恐る会場の奥へと歩いて行った。
かなり広いレストランだが、それでも無数のインド人で満員状態だった。あちこちで食事をしながら話し込む輪ができていたり、初めて見る、不思議な形の絃楽器が、ゆっくりと流れるような音色を奏でている。中央のステージのような所では、大勢が楽しそうに踊っていた。
地下に来てみたら、かなりの数の人が正装をしていた。女性は皆、カラフルなドレスのようなサリーを着ていて、その壮麗さに僕の目は圧倒された。額にはビンディと呼ばれる、――おそらく宗教的な意味合いのものだろう――綺麗な石のようなものを貼っていた。インド人特有の豊満さ、肌の色やよく目立つ瞳など、どの人のサリーもとても似合っていた。サリーはやはり、インド人が着てはじめて輝くのだろう。
男性は民族衣装を纏う人もいたが、ほとんどが私服のような出で立ちでだった。入り口に受付なんてなかったし、来たい人が自由な格好で自由に来れる。そのような形式なのだろうか。まあそうでもなければ、僕なんかが気軽に入れるわけはないだろう。
どうやら僕は、歓迎されているのか？　みんなのにこやかな表情を見ると、そう思えた。
ニヤリ兄ちゃんは僕を連れ回すと、ずらーっと並ぶビュッフェの前で止まり、皿を持て

と言った。そこに次々と料理を載せていくと、とても食べきれないようなてんこ盛りのお皿になった。会場は芳しいスパイスの香りで充満していて、このお皿からも、お腹が「ギュルギュル」鳴るような、素晴らしい香りが漂っていた。

「タベロ」そう言うとニヤリ兄ちゃんは、フォークを差し出した。

「お、おう」と言いながらパクパクと食べた。

これがすごかったのだ。頭の中がお花畑にでもなりそうな衝撃的な味わいが、口の中いっぱいに広がった。なんだこれは……、これがインドの宴の実力か……。こんな料理、どれもこれも、この長い旅でも食べたことがないぞ。もう何も説明などできない、ただ僕は永遠にこれを食べ続けたいと、夢中で皿を突いた。口をパンパンにした僕を見ると、ニヤリ兄ちゃんはさらにいやらしく「ニヤリ」と笑った。

「あ、あなたの国は、最高です」と僕は涙目になりながら訴えた。

皿が空になると、ニヤリ兄ちゃんは、今度は目の奥を輝かせ、今度はあそこに行ってあれを飲め、と指差して僕を行かせた。そこではブルーのよくわからない飲み物を渡された。そして振り返ると、ニヤリ兄ちゃんはめんどくさくなってきたのか、しまいにはあっちこっちと、指を刺すだけで僕を右往左往とさせ、ありとあらゆるものを僕に味あわせた。

子供達も、「面白そうな外国人がきたぞ」と、おもちゃにでも群がるかのように、僕の周りに集まってはしゃぎだした。あちこちから写真を撮れ撮れと僕の手を引っ張ったり、楽しそうにポーズを決めたりしていた。

今度は、生意気そうな背の高い兄ちゃんが、子供たちの輪に割って入って来た。そして「ミロッ！」と言って合図をすると、その場で豪快に踊り出した。そして仕切りにカメラを指さすと、シャッターを押させた。僕も「オウケイ、オウケイ！」と言ってレンズを向けた。会場に流れる、壮麗な音色を無視するかのような、大胆なダンスだった。

皿を持ったまま、ニヤリにいちゃんは僕を次々と色々な人のところに連れいていった。いく先々で皿が山盛りになった。もう誰に会って、何をして何を食べているのか、さっぱりわからなくなってきた。だんだんとこの混沌とした状況に可笑しさがこみ上げてくる。ニヤリ兄ちゃんは僕にウインクをすると、「トレヨ」と言って、背の高い兄ちゃんの踊りに混ざっていった。

次第に周りには人が集まっていき、皆同じように踊り出した。会場にはそんな輪があちこちに出来ていて、みんなが心の底から楽しんでいるようだった。これだけのインド人が

いるのに、僕の肩に蛇を巻くような人は誰もいなかった。僕の人見知りも、ここではまったく出番はなかった。笑っている自分の表情が、心の底から来る楽しみを表現していることを実感した。

すっかり馴染んだ僕は、自分がインド人にでもなったような錯覚を起こしていた。今までの人生を振り返っても、こんなに楽しく人と触れ合えたことがあっただろうか。

これまで夢中でインド中を旅してきたけれど、今この場が僕にとって最高のインド、「インディア」だった。ふつうのインド人との交流に喜びの舌鼓を打ち、さらにインドを頬張った。

会場の騒ぎは落ち着きだしていた。僕は会場の端の椅子に座り、辺りを見渡していた。ニヤリ兄ちゃんも、仲間と楽しそうにしていた。そしてゆり子が話してくれた「あなたはそのままでいいのよ」という言葉が思い出された。

僕はいつでも、自分の中の決めつける思いに振り回されてきた。そして相手にもその決めつけを押し付け、苦しい思いをさせてきた。しかしここでは、みんながありのままの僕を、そのまま受け入れてくれている。日本にいた頃の僕は、いつだってゆり子の気持ちなんか考えずに、ゆり子のありのままを否定してその存在をあまりにも軽く見ていた。

ゆり子はその新しい彼に、自分の全てでぶつかるだろう。そこにはもう僕が入る余地などはない。そう思うと僕はまた孤独を感じ、恐ろしくなった。ゆり子がいたおかげで僕は朱里を好きになれたのではないか？　そんな思いさえ浮かんでくる。そしてそれは、事実なのだろう……。

ゆり子の屈託のない笑顔が浮かんだ。

僕は一体何をしていたんだろうか……。僕は自分の太ももを力一杯に殴った。とても痛かったが、僕には今痛みが必要だった。

ゆり子は失くしてはいけない人だった。失くしてはいけないものを失った絶望感で涙が溢れた。僕は椅子に座ってカメラを持ったまま、声を出して泣いた。人目もはばからず。

ゆり子はもう僕じゃない誰かに、心の扉を開けている。それは僕からはもう見ることのできない扉だった。人の気持ちの中にある扉は、その人が選んだ1人にだけにしか開けることはできない。人はその扉を開けた相手と、幸せに満たされた想いで生きて行く、楽しさ悲しさ、寂しさや嬉しさ、全ての感情をお互いが自分の力で感じてゆく。その先に二人の間に新しい命が宿り、人は脈々と命を繋いでいく。僕とゆり子には、もうその繋がりは

ない。永久に無くしてしまった……。
僕は椅子に座ったまま「おうおうおう」とみっともないくらいに泣いていた。するとニヤリ兄ちゃんが隣に来て、僕の肩に手を回し頭をもしゃもしゃとした。「ゆり子さようなら、ゆり子さようなら」と僕は何度も何度も言葉に出して泣いた。
僕が泣いている理由なんて誰にもわかるわけも無いのに、ニヤリ兄ちゃんもよく見ると泣いていた。
すると、僕の周りにはどんどん踊る人で溢れていった。

ひとしきり泣いたあと顔を上げると、演奏も止み、会場が静かになっていた。隣にいたニヤリ兄ちゃんが僕の肩を叩いた。
「オイミロ」ニヤリ兄ちゃんは言った。
高砂を見ると、既に新郎は親族と一緒に連なって、玉座に就いていた。纏っていた衣装は、とても華やかなものだった。
新郎隣の席は空いたままで、今からそこに、新婦が現れて座るのだろう。厳かな演奏が始まり、いよいよ式が始まるようだ。僕は身を乗り出して、食い入るようにその場を見つめた。そして何枚かシャッターを押したあとカメラを椅子に置いた。ただ何もせず、僕の気持ちの全部で見たかった。
しばらくすると新婦が現れた。僕は言葉を失う。それまでの旅で見たどんな見所よりも、荘厳で神々しい衣装を纏っていた。さらには、様々な民族装飾を身につけた新婦の表情は、くらっとするほど美しかった。2人が玉座に座ると式は始まった。僕はただただ見惚れていた。沢山の人が玉座の周りに集まり、何か儀式をしているようだった。僕はよく見える所に移り、その様子を眺めた。
気がつくと、ニヤリ兄ちゃんが見当たらなくなっていた。どこにいったのかと辺りを見渡す。すると会場の奥で、大きなテーブルに座っている高齢の男性に、身を屈めるように話しをしていた。その高齢の男性からは思慮深い気配が感じ取れた。ニヤリ兄ちゃんの表情を見ると。尊敬されている存在なのだというのが遠目ながらでも理解できた。
ニヤリ兄ちゃんは僕の所に来ると、真面目な顔で「コイ」と言った。僕はなんだ、何かやらかしてしまったのか？　泣きすぎてうるさかったか？　とびくびくと後をついていった。
その高齢の男性の前に来ると、その男性は流暢な日本語で話しをした。日本人が経営す

る会社で、長い間働いていたということだった。男性はいくつかの質問を僕にしたあと、話しをはじめた。
「青年よ、座りなさい」
「はい」
「あなたのことを見ていましたよ」
「え？」
「私は、日本人にとても大きな恩があります」
「でも僕は日本人ってだけで……」
「同じ血を分けた民族です。同じ血が流れていれば、私はあなたにも何かをしてあげたいのです」
「そんな僕なんか……」
そう言うとその高齢の男性は、ニコニコと優しく微笑んだ。
「あなたは、どうしてそんなに泣いていたのですか？」
「え、まあ、それはちょっと……」
僕はゆり子を失った喪失感にぼこぼこに打ちのめされていた。
「愛する人はいますか？」
僕ははっとした。この老人は人の心が読めるのか……？
「言えよ」とニヤリ兄ちゃんが言った。
「ん……？　今日本語言った？　日本語言ったよね?!」
「おれ、ちょっと使える」
「え？　使えるの?!」
ニヤリ兄ちゃんは鼻をいじりながら、得意げな顔をした。
「おれはこの人の孫、じいちゃんから教わった。けど普段は人前では使わない。妬む奴も多い。日本語が話せると、インドではたくさんお金を生む。日本人はとても親切だ、『出会ったら優しくしろ』って、いつもじいちゃんに言われてる」
ちょっとどころではない日本語を話す兄ちゃんに、また自分の居心地が広がっていった。
「じいちゃん、お前のこと心配してんだよ。ずっと泣いてんから」
僕は高齢の男性の顔を見つめた。
「あなたは愛とは何だと思いますか？」とその男性が聞いた。

「……よくわからないんです。けれどこの場で僕は、沢山の喜びを感じました。とても嬉しくて満たされた想いがしています」
「それは良かったですね」と高齢の男性は微笑んだ。
僕は男性の目を見て続けた。
「僕は、親からの愛というものを知らずに育ったのかもしれません。ずっとずっと理由もわからない苦しみを感じていました。大人になると、愛というものがあると知りました。けど、どう取り扱っていいかまったく分からなくて、僕に優しく歩み寄ってくれた女性を、とても傷つけました。おそらくその女性が見せてくれたものが「愛」なのでは、と思っています。しかし、このインドで僕は彼女との……、彼女との繋がりを失いました」
「そうですか、あなたは今誰かの気持ちを失ったのですね。もうそれは取り戻せませんか？」
高齢の男性は、優しい眼差しでそう言った。
「彼女は今、僕じゃない人と向き合おうとしています。しかし僕はその女性に対して大きな罪を感じています。そして彼女から受けたものは深い愛情でした。ですが僕は、彼女から愛情を受ければ受けるほど、彼女を傷つけました。今頃になって、僕は彼女が大事な存在だったことに気がつきました。僕は彼女のことがとても大事です。しかしもうそれは遅くて……」
「ここにいるあなたを見ていると、あなたは今ここで、あなたのその苦しい人生が、何のためにあるのかを理解したのではないですか？　その女性は、あなたがその人を傷つけることでしか知ることのできない、大事な何かを伝えるために、あなたの前に現れたのではないでしょうか」
「え……」
僕は考えたこともないような思いに、ハッとさせられた。ゆり子がそこまでして僕に伝えたかったこと……。
「あなたは今何を思っていますか？」
「……」
「その想いがあなたの真実です」
「でも、伝えてももう、もう無駄です。遅いんです」
僕は顔を手で覆うと、鼻をすすった。
「無駄でもいいのですよ、その女性には、まだあなたに何かを伝える役目があるように思

えます。その気持ちを伝えた後に残ったものが、その女性があなたに伝えたかった本当の想いなのですよ」

僕は胸を掻き毟られる思いで立ち上がった。

話をしてくれた高齢の男性に向かい、大きくくの字に折り曲がり、膝におでこを付ける勢いで「ありがぼう、ご、ございまじだ！」と鼻水を垂らしながら、言葉にならない嗚咽で挨拶をした。

僕の想いが伝わったのか、高齢の男性はずっと僕に笑顔を向けていた。「ゆり子お、待ってろお！」と瞳にメラメラと炎を燃やし、走り出そうと振り向いた瞬間、目の前は何重もの人だかりになっていて、みんなが僕を見ていた。そこには新郎新婦さんまでいるではないか。「し、式は……？」と棒立ちでその光景を眺めた。

ニヤリ兄ちゃんが僕の隣に来て、「会話をみんなに通訳してたんだ」と言うと、ようやく意味を理解した。僕はみんなに敬意を込めて、再びペタンと大きな「くの字」で挨拶をした。

一呼吸間を置いて起き上がると、みんなが僕に向けて、ぺたんと見事なくの字になっていた。さすがヨガの国、全員が綺麗に体を折っていた！　もはやそれは「く」ではなく、「り」だった。

いやいやそこじゃない、そこに驚いている場合じゃない。これが日本式の挨拶だと思われてしまう。するとあのエロ兄ちゃんとの間違った登頂が脳裏をよぎった……。僕が目の前にチラつくエロ兄ちゃんとの攻防を手で振り払っていると、

「行けーっ！」

とニヤリ兄ちゃんが僕に向かって叫んだ。すると人だかりになっていたみんなも一斉に「行けーっ！」と日本語で叫んだ！　僕は目頭をつまみながらみんなの思いを受け止め、勢いよく走り出すと、一気に階段を駆け上がった。目指すは部屋の携帯電話だ！

地上に出て走り出すと、後ろがなんだか騒がしい。振り返ってみると、地下にいたはずの大勢のインド人が、僕のあとを追って地上になだれ込んでいた。みんな大きく手を振ったり踊ったり、僕にエールを送っていた。言葉は何もわからなかったが、みんなの気持ちが伝わってきて、僕はまた顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら、

「ノー、プロッブレームッ！」と拳を握りあげ、大声で叫んだ！

僕のその叫びがおかしかったのか、あちこちで体をよじって笑っている。僕の叫びに答えるように、「ノー、プロッブレーム、ノー、プロッブレーム」とみんなが叫んでいた。

よく見るとナン兄ちゃんは、くるくると何を振り回しながら僕に叫んでいて、新郎は新婦を抱き上げて、二人で大きく手を振ってくれていた。
「おまえらの気持ち、受け取ったぜっ！」と叫ぶと、僕は手だけを振りながら走り、部屋へと向かった。
フロントの前を勢い良く通り過ぎようとすると、「ナニガアッタ？　ナニガ　ノープロブレム ナンダ?!」とシンさんは叫んでいて、でも僕は、手だけを挙げるとさらに走った。
部屋に着きドアを思いきり開けると、閉める時間も惜しんで荷物へと走り寄った。ゆり子の告白を聞いたあと、こんな携帯折ってやろうかと思ったが、やはり勇気がなくて再びバッグの奥にしまっていた。僕は少しでも早く携帯を取るために、バッグを逆さまに持ち上げると、全ての荷物を一気にばら撒いた。荷物を掻き分け、携帯電話を手に取ると、慌ててホームスイッチを押した。何度押しても画面はつかない、バッテリーが切れている。僕は震える手でコード探すと、携帯に繋いだ。僕はまた涙を溜めながら、ゆり子のことを思い出していた。
ゆり子の声が聞きたかった。声が聞きたい……。
電源がなかなか入らなくて、焦ったくて何度も携帯を振った。すると赤い充電ランプがついて、しばらく待つと画面が立ち上がった。もしまだ間に合うのなら……。というかすかな期待は、とんでもない重さで僕の心にのしかかった。震える手でゆり子に電話をかけた。

「高山くん?!」
「もしもし、　ゆり子?!」
2度目のコール音で電話に出たゆり子の声は、弾むような音色をしていた。
その声に僕の気持ちは逸り、堰を切ったように言葉が飛び出す。
「ゆりこ、おれやっぱりゆり子のことが大事なんだ。ゆり子と一緒に居たい」
ただ、素直な想いを伝えた。
「高山くん？」
「あれ？　ゆ、ゆり子？　ねえ？」
ゆり子の気配が僕を不安にさせた。
何かわからない不穏な汗が、ツーっと首筋を伝った。

「高山くん、今どこなの？」
「今はまだバラナシだよ」
「そう」
「ゆり子？」
「ありがとう。電話すごく嬉しい」
「うん」
僕は汗を拭いながら言った。
「ねえ？　高山くんが今わたしに伝えたい言葉って、それ、なの……？」
ゆりこの言葉の意味が僕にはわからなかった。
その声は静かに低く、寂しさと孤独を味わいながらぽつんと光る、冬の街灯のようだった。
「え？　うん。おれ気がついたんだよ、おれにはゆり子が一番大事……」
「違うよ」ゆり子は遮るように言った。
「え、なにが？」
「違うの、高山くん……。もう、もうわたしに言ってはくれないの？」
「え、言ってって……？」
「忘れちゃった？　わたしたちが付き合うときに、伝え合った言葉。高山くん言ってくれたじゃない」
「う、うん。覚えてる」
その日のことは、今でもしっかりと記憶に残っている。僕は震えながらゆり子に「好きだ」と言った。ゆり子も「好きよ」と応えた。その言葉は、今でも青空の日の目覚めのように、僕の心の中でどこまでも澄んでいる。しかし、僕は今、「好きだ」と言うことができなかった。ゆり子の魅力なら、両手じゃ足りないくらい挙げられる。けれどなにかまた、つまらないプライドでも持ち出しているのか……？
僕はどうしても、今ゆり子に「好きだ」と心の底から伝えることができなかった。
僕は安心だけをほしがり、寄り添って貰うことだけを求めていたのか？　そして今までゆり子の思いを、一方的に都合良く搾取していただけなのか？　そう思うと、真っ暗な知らない人の家に許可無く立ち入り、靴を履いたまま歩き回るような、そんな罪悪感がのしかかってきた。
「……」

しばらくお互いが黙っていたが、ゆり子が話を続けた。
「あの日高山くん、涙を見せながら『好きだ』って言ってくれて、わたし嬉しくて、飛び上がりたいほどだったよ。この人だ、って思った。ほんとうよ。あの日に言ってくれた『好きだ』という言葉だけで、わたし何があってもこの人から離れないって思えたの。その言葉がわたしの全てだった……。あんなに綺麗に澄むように『好きだ』って言ってくれる人なんて、もう一生現れないって思ったよ。そしてわたしも『好きよ』って返した。それって、私の高山くんへの『覚悟』だったの。だからまたその言葉が聞けたらって……。でも気持ちが途切れちゃったみたい。もう」
そう言うとゆり子は、小さくすすり泣いた。小雨がアスファルトを濡らすような静か泣き声が、数千キロの距離を超えて聞こえていた。
「……わたしもう、1人で抱えて待つのが限界だったのかもしれない。そんなときに彼と出会ったの。彼から『好きだ』って言われても、付き合うなんて考えられなかった。わたしは高山くんのことが好きだから、高山くんと一緒に居たい。そう思ってたから。いつかまた戻って来てくれる。わたし待てる自信があったの。けど……」
「ゆり子、おれは……」
「いいの、もういいの。高山くん」
「……その彼、本当にゆり子のこと、好きなの？　ねえ？」
「違うのよ、高山くん、わたし……」
「違うって？　そいつはゆり子のこと好きなんでしょ?!」
「待って」
「待ってってなに、教えてよ！」
「彼のことよね……、彼のこと。うん、本当になんとも思ってなかったの。でも会っているうちに、こんな人もいるんだって……」
「そんな話聞きたくないよ！」
「高山くん待って、そんな責めないでよ！　わたし……」
「ご、ごめん……」
ゆり子はまた泣き出して、僕はハッとした。焦りが頭の中に充満する。
「彼、いつも積極的に誘ってくれるから、少しずつ会うようになったの。とっても素直な人だから、こんな人もいるんだなって、彼に興味が出てきたの。彼とわたし、お互いよくぶつかるの。わたし誰かにこんなに本気でぶつかれたのが初めてだったから、わたしも遠

慮しないで本気で何でも言うの。それがこんなに楽なことだって知らなかった。わたし、高山くんにはどこか遠慮してしまっていたから……」
「もう遠慮しなくていいよ、おれだって、ゆり子のこと」
「わたし何も言えなかった。高山くんの気持ちを待つだけなんて、もう嫌なの」
「だからゆり子、おれとって言ってるじゃん！」
「ねえ、聞いてくれる……？」
「聞くって何を？」
「高山くんはいつもそうやって話、聞いてくれなかった。ぶつかってもくれなくて、いつも拗ねてただけじゃない？」
「そ、そんなこと、そんなのゆり子が自分勝手で、おれの言うこと聞いてくれなかっただけじゃん?!　ひどいよ！」
「高山くんのそばにはわたしの自由はなかった。わたしは怒ることもできなくて、いつも泣いてただけよ」
ゆり子の言う言葉は、どれもが僕の的のど真ん中を貫いた。
「だから、そいつはゆり子のこと本当に好きなの?!　ゆり子だっておれのこと何も理解してくれなかったじゃないか！　ゆり子がちゃんとしてくれてれば」
止まらなくなった感情には、僕の本性が現れていた。
「わたし高山くんのこと、本当に好きだったのよ。それなのに……。そうね、だからわたし、わたしが高山くんに迷惑かけたのね！　全部わたしがいけないんだよっ！」
「おれにだって、言いたいこと、あるんだよ……」
ゆり子は怒鳴った。こんな声を聞くなんて初めてだった。
僕の声はかすれて、すぼんでいった。
「こんなの嫌よ……」
時計は深夜0時を過ぎていた。日本では3時半。宿の外では、まだけたたましくクラクションが鳴っていた。ゆり子は明日会社だ。気持ちだけが焦った。
「高山くんは、わたしのこと……、好き？」
「す、好きだよ……、好きに決まってるじゃん」
「無理しなくていいよ。わたし、そんな言葉が聞きたくて待ってたんじゃないの……」
「ごめん……」
ゆり子は泣いていた。

「最初にね、高山くんが、インドに行くって聞いたときにね、わたし何か光るものを感じたの。何かがインドで起きるかもって。高山くんにとって、最高の出来事が、待っているような気がして……。もしかしたら、わたしの所に戻って来てくれるんじゃない、かって……」

ゆり子はすすり泣きながら、ゆっくりと話した。

プスン。といってエアコンが止まり、妙な静寂が響いた。ゆり子のすすり泣きは小さくなっていった。ゆり子は鼻をかむと「ごめんねうるさくて」と言った。鼻水ブーだね。というとゆり子は「そうよもうブーブーよ」と笑った。「おれもずっと鼻水が滝だよ」というとゆり子は「あはは」と笑った。

「おれ、インドで本当楽しいことばっかりだったんだ。今日もすごい楽しい結婚式に呼ばれたんだ」

「えー、結婚式？」

ゆり子は少し嬉しそうな声で言った。

「そう、もうすごい盛大だったんだよ。そこでみんながあれ食べろこれ食べろって言って連れまわされてさ、めちゃくちゃ楽しかったんだ」

「いいな、楽しそう」

「式なんかもう、クラクラするほど荘厳だったよ」

「わあ素敵ね！　どんな結婚式なんだろう」

「あの厳かな感じ、ゆり子にも見せてあげたいって思いながら見てたんだ」

「うん、わたしも見てみたかった」

「あとはさ、ニヤニヤしてるにいちゃんとか、みんなが写真撮れ撮れってさ」

「うん……」

「そこである人に言われたんだ、『あなたが今思う人は、あなたに何か大事なことを気づかせるためにいるんじゃないですか？』って。」

「うん」

「おれ、ゆり子と付き合って、たくさん愛されたよ。どう受け止めていいかわからないくらい。でも受け止めても受け止めてもただわがままになるだけだった。愛されたいって叫ぶだけで、でも自分がどうしてもらえたら愛されてるって思えるのか、それすらわかってなかったんだと思う。そんな答えのない難問をゆり子に投げつけてた」

「高山くん……」

「だから今でもどう愛して、どう愛されていいのかなんてわからない、でも自分はゆり子のそばにいたいって本気で思えたんだ。インドでの旅が、インドで会えた沢山の人といるうちに、純粋な思いをみんなが教えてくれて。だんだんと素直に思えるようになったんだ。でももう遅いんだな……」

「彼はね、わたしに真正面から「好きだ」って言うの。『ぼくは君がどんなでもいいんだ、何をしててもいい、僕のことが好きじゃないとしても、僕はきみのことが好きだから』ってそこまで言ってくれたの。だけどもう少しだけ返事を待ってほしいって、お願いして……。もう少しだけ高山くんのこと待ちたいって。わたし彼とつき合うなんてこと、そんなに簡単に決められたわけ、わけ、じゃなかったのよ。で、でも」

ゆり子は嗚咽で言葉が出なくなった。

僕はじりじりとした思いを抱えたまま、ゆり子の言葉を待った。

「一人でね、悩んで、悩んで苦しかった。そしたら彼が笑顔で『いつまででも待つから。君がどんな選択をしても僕の気持ちは変わらない、僕は離れたところからでも君を応援できる。正直に言ってくれて嬉しい』って。この人、自分の人生をちゃんと生きているんだって思えたの」

「ほんとにもうその彼のことを選んだの？　ねえ、ゆり子。決めたの？」

「わからない、一度は決めたけど、わからないのよ……。だから今日電話があって、すごく嬉しかった。わたし本当にどうしていいか何もわからなくなってたから」

「おれ、ゆり子と幸せになりたい、ゆり子と一緒に居たいよ」

「うん……、わたしも高山くんと一緒に居れたら本当に幸せよ……」

「じゃあ、一緒にいようよ、ねえゆり子?!」

「わからない……。わたしどうしたらいいんだろう」

「ゆり子に会いたい！」

「無理よ……」

「なんで?!」

「だって……」

ゆり子はそう言うとまた黙って、小さく鼻をすすっていた。

僕は座りながら壁に寄りかかりながら、ゆり子のすすり泣く声を聞いていた。

「わたし……、この前の電話で、彼とつき合うって言ったでしょ？　咄嗟に言ってしまったけど、でもわたしまだ決めきれてなかったの。言ったあとすごく後悔して……。彼にも

やっぱりまだ今は無理、って言った。まだ高山くんのこと待ちたいって思ったの。でももう高山くんには付き合うって言っちゃったから、電話なんてもうしてくれないって思った。ずっと高山くんのこと考えてた。わたしは、高山くんと繋がっていたかったの、心の底から。だから電話がきたとき、わたし心臓が止まりそうなくらい「どきっ」としたの。毎日毎日どこかでずっと待ってたから。だからとても嬉しかった。きっと最高の言葉が聞けるような気がしたの……」

ゆり子は涙をすすり、「ちょっと待ってね」と言って鼻をかんだ。

「わたし、高山くんとはもう……」

「ゆり子のこと、おれ好きだよ！　ゆり子は完璧な好きを求めてるかもしれないけど、でもそれ以上に、大事って思う気持ちじゃダメなのかな？　おれ、本当に身勝手にゆり子を傷つけた。でも一緒にいたいんだ」と僕はすがった。しかし、ゆり子を引きとめられないことは、僕自身が今、嫌という程感じていた。

「ううん、いいの。電話をかけてくれただけで嬉しかったよ。それだけでもわたしにとって、信じられないくらいの奇跡だったの。ごめんね……」

「謝らないでよ……」

僕は鼻をすすることも忘れると、ゆるい鼻水は口の中に流れ込んだ。僕はそれをTシャツの裾で拭った。

「わたしに向き合ってくれるその彼も大事にしたかったし、でも、まだ高山くんのこと待ちたかった。だから抱えきれないくらい気持ちが揺れて怖かったの。でも今日は今までで一番高山くんと、本気で話ができたと思う。わたしこれでもう思い残すことは何もなくなったよ……」

ゆり子の泣き声は、水たまりに落ちる雨粒のような音階と、雨の匂いを僕に漂わせた。僕は何も言えなかった。何を言ってもどれも言い訳のようにしかならない気がした。

僕はベッドの上で胡座のように自分の足の裏同士を合わせて座っていた。合わせた足先を片手で持って、静かに揺れた。今は感じるゆり子の存在と、失ってしまった空虚な現実が、孤独となって僕の存在を淡くしていった。

鼻水は止まらなく、ただただシャツで拭った。

僕らの数千キロの距離の電波の間には、静かに漂っている小舟がいて、その小舟が僕らの泣き声が聴こえる所まで漂って来ると、何かに引き寄せられるようにゆっくりと沈んでいった。澄んだ海の底にその船が横たわると、砂の中に飲み込まれていった。その船に何

が乗っていたのか、僕には悔しいほどはっきりとわかっていた。
ゆり子のすすり泣く声が小さくなってくる。
「高山くん、朱里さんとは別れたの？」と聞いた。
ゆり子の声は、少しだけ明るい色を混ぜた声に変わっていた。
「うん……、振られた。はっきりと言われたわけじゃないんだけど、でももういいんだ……」
本命だろう彼氏が朱里にいることは言わなかった。
「もう彼女とは会うことはないと思う。だからゆり子に電話したんだ」
「うん」
「もう終わったんだよ」
「いいの？　それで？」
「しかたないよ。僕がいけないんだ……」
「高山くんは、朱里さんのこと好きなんでしょ？」
「そ、そんなことな……」
ドミノがパタパタと倒れていって、絵が現れるように、ゆり子の思いに気がついていった。
僕は朱里に対して、怒りのような気持ちすらあったし、話せばおどおどしてしまう。大事にだってされていない。だが、好きかどうかと聞かれたら、すぐに「好きだ」と答えられる。ゆり子がなぜその言葉にこだわったのか、ようやく気がつけた気がした。
「好きと思えることって……、奇跡に近いことだと思うの。好きという気持ちがあれば朱里さんの側にいる努力、できると思う」
「ゆり子は僕に朱理と付き合って欲しいってこと？」
「ううん、わたしは高山くんに好きな人といて欲しいだけなの」
「朱理のこと好きかどうかなんてわからないよ」
僕は嘘をついた。
「好きってどんなものにも言うでしょ？　海がすきとか、花がすきとか、あなたが好きとかって。好きって言葉って、永遠に変わらない気持ちの物に言うものじゃない？　一番大事な人に対してもそうだと思うの。わたしはどんなにその人に怒ったりがっかりしても、好きな人がわたしのことを好きって言ってくれる限り、一緒にいたいって思う。それはわたしの価値観だけど……。でもわたしの好きはもう高山くんへは向かないよ……」

僕はこの世の中にあり得ないものを求めているのだろうか。それは、ありえない愛情だったのだろうか。僕の掴みかけた何かが、耳障りな音を立てながら、何一つ合うことなく地面にバラバラと落ちた。

「ゆり子は、大事なものを、見つけたんだね……」

「うん、そうだね……。わたしは好きと想って好きと想われる場所で、笑って、泣いて、感動して、怒って、くじけて、そしてまた笑うの。わたしはそういう場所で生きてゆきたいの。それがわたしの幸せなの。わたしは彼とそうやって生きて行きたい。わたし……、彼のことが好きよ……」

ゆり子は最後に、「わたし、本当の自分の気持ちに気がつけたよ、ありがとうみなみくん」と言った。

ゆり子ははじめて僕のことを下の名前で呼んだ。その真意が何なのかはわからなかったし、ゆり子から下の名前で呼ばれるということは、不思議な感覚だった。しかしそれは、ゆり子が自分の中の何かを許せた証拠なのかもしれない。僕にはそんな風に感じられた。

「こちらこそ、ありがとうゆり子」と僕は言った。

しばらく無言になったあと、どちらからともなく電話を切った。

それから3日後、再びデリーに戻った。

初めてインドの地を踏んだときに見たこの景色と喧噪は、今僕が見ているものと、何一つ変わっていないはずだった。しかしその印象はまるで違っていて、どこか穏やかな思いを感じた。僕の何かが変わったのだろうか。

この旅で掴めたものと、掴み損ねたもの。どちらも僕にとっては必要なことだということだけが、今の僕がはきりと言える確かなものだった。僕はそれだけを確かめるために、この悠久の地にやってきたのだろうか。

すると大きな牛が、突っ立てぼーっとしている僕の目の前に近づいてきて、「モウ〜」って啼いた。それを聞いた僕は、「モウ〜、なんて、こっちが言いたいよー、もう〜、ゆりこお〜、あかりい〜」と盛大に未練と鼻水を垂れ流した。

明日はいよいよ帰国の日だ。

翌朝、僕は早めに宿をチェックアウトした。空港に行く時間まではまだだいぶ余裕もあ

ったから、散歩でもしようと宿を後にした。
空港へは、デリーまで運んでくれたエロ兄ちゃんが、「カエリノ クウコウ オクッテクゼ」と言ってくれていた。
目に焼き付けるようにぶらぶらと街を歩いた。肩に食い込むこの荷物の重さは、旅では邪魔に思うこともあったが、「今日で旅が終わる」そう思うと、今では愛着さえ感じられていた。
僕は一番人通りの多いところまでゆき、壁際に荷物を下ろすとそこに寄りかかるように座った。全身に街の喧噪を浴びると、僕は静かに目を閉じ、耳だけで街のざわめきを感じた。それはまるで旅を終える為の「禊」であるかのように……。ゆっくりと呼吸をしながら、飛び込んでくる音だけに耳を澄ませた。音と音の隙間には。今まで聞こえなかったインドの声が聞こえるような気がした。目をゆっくりと開くと、また目映い街の景色が僕の目に写り込んだ。
ニコンを片手だけで簡単に構え、街の中にレンズを向けると、「カシャッ」とシャッターを切った。その音は、この旅で聞いた何千回のどの音よりも、潤んだような音に聴こえた。
エロ兄ちゃんとの約束の時間が近づいてきたので、荷物を持とうとした瞬間、「あれ？あれれれー？」と目が「？」マークになった。お金などを入れていてた小さな肩掛けのバッグがなくなっていた。「や、やられた……」大したお金は入っていなかったが、そこには旅の途中で知り合った沢山の人たちの連絡先などのメモが入っていたのだ。二度と連絡を取ることのできなくなった、沢山の顔を次々と思いだした。そしてそのバッグには、携帯電話も入っていた。けれど携帯をめぐる冒険の幕切れは、これでいいような気がした。
エロ兄ちゃんは約束の時間にグラサンでやってくると、またボンネットの上に手を置いて、足を妙な角度でクロスさせていた。
僕は手を振りながら走り寄ったものの、困ったことになった。バッグを盗られ、現金が何もなくなってしまったからだ。盗まれてしまった顛末を話した。すると、「カネカ……？」と一瞬曇った顔をした。ああそうだよ、そりゃそうだ。どんなに仲良くなったって仕事は仕事。うんうん、わかるぞ、大丈夫だ、ここからならなんとか歩けるかも……、とスマートに観念しようとしていると、エロ兄ちゃんがばちーんと僕の肩を叩いた。
「カネナンカ、ノープロブレムダッ！」と叫ぶと、頭の上でいつもより大きな輪を作り、

すきっ歯を見せつけるように笑っていた。僕は肩を押さえながら「タ、タモさん……」とうるうると呟いた。

エロ兄ちゃんはまた「エ？　ナニ？　タモ？」とまたしつこく聞いてきたから、今回も笑ってごまかした。返ったらタモさんの投稿動画のURLでも送ってやるか。

しみじみと肩にの痛みを感じていると、エロ兄ちゃんは嬉しそうな顔で、いつものように「アソコ、アソコ」と連呼していた。今ではその言葉を聞くと、気持ちがホッとするようになっていて、今度は自分のことが心配になった。

空港に着くと、「サンキュー」と言って僕は車を降りた。エロ兄ちゃんは車から降りてきて、旅の証のような長めのハグをした。そしてまたウインクをしながら車に乗り込むと、軽快なクラクションと共に帰って行った。

デリー発成田行き、エアインディア３０７便に無事に乗り込んだ僕は、座席の窓ガラスにおでこの先をこつんとつけ、離陸を待っていた。

すると隣の席に、大きな顔のおばちゃん二人が、騒々しく座り込んできた。二人はコテコテな大阪弁で掛け合うと、甲高い笑い声を響かせていた。目を合わせないように視線をそらせた。

僕の旅の余韻は、おばちゃんたちの笑い声でかき消された。

飛行機は無事に離陸し、機体が安定すると、シートベルトの解除音が「ポーンッ」と鳴った。するとおばちゃんたちは、「ポーンッ」てなんやねん！　と大受けだった。

おばちゃんたちはしばらくすると飽きたのか、窓際に座る僕に興味を向けた。ニヤニヤとしながら「なあ」というと威圧的に話しかけてきた。

「じぶんみたいな若い子お、インドなんて何しに行ってん？」と聞くとおばちゃんズは、大きな顔をずらすようにこちらを睨み、答えを待った。

「はあ、一人旅をちょっと……」と、とぼとぼと答えた。

「なんや兄ちゃん、元気ないのう。あ！　あんたもしかして、これがー、あれやろ?!」

おばちゃんズは、二人揃って小指を天高く突き立て、手を伸ばしきるようにお腹の前で膨らましながらそう言うと、斜め上から信じられないほどいやらしい目で僕を見下ろした。どうやら僕が女性への責任問題で悩んでいると決めつけているようだった。まるで当たってはいなかったが、遠からぬ罪悪感に、僕の胸はチクリとした。

「あ、ちょっと待ってえあんた、そのヒゲえ……。なんでやねんっ！　ぎゃぎゃぎゃぎ

ゃ」と僕のヒゲの茂り具合を肴に、見事に笑い上げていた。おばちゃんズに答えは不要だった。

意地汚い笑い声で僕に絡んでいたおばちゃんズは、「これただやねん！」といちいち僕に言いながら、ビールをがぼがぼと飲みまくると、あっという間に眠ってしまった。すると機内は、一気に静寂を取り戻していった。

飛行機は安全に、帰りの航路を辿っていた。

ふと見ると、おばちゃんの足元にはひざ掛けが落ちていて、それを拾うとそっとおばちゃんの顔、ではなく膝に戻した。

窓の外には果てしない空が広がっていて、目下には、雄大なヒマラヤ山脈の山並みが複雑に連なっていた。きっと今日も登山家は山を登り、そしてまた山を下りるのだろう。